

貝塚博物館調査資料 No. 1

加曾利貝塚

I

昭和37年度加曾利北貝塚調査報告

1975

千葉市加曾利貝塚博物館



PL1 加曾利北貝塚全景(左側中央部)と南貝塚の
一部(右側中央部)——上方に横たわるのは小倉支谷西谷



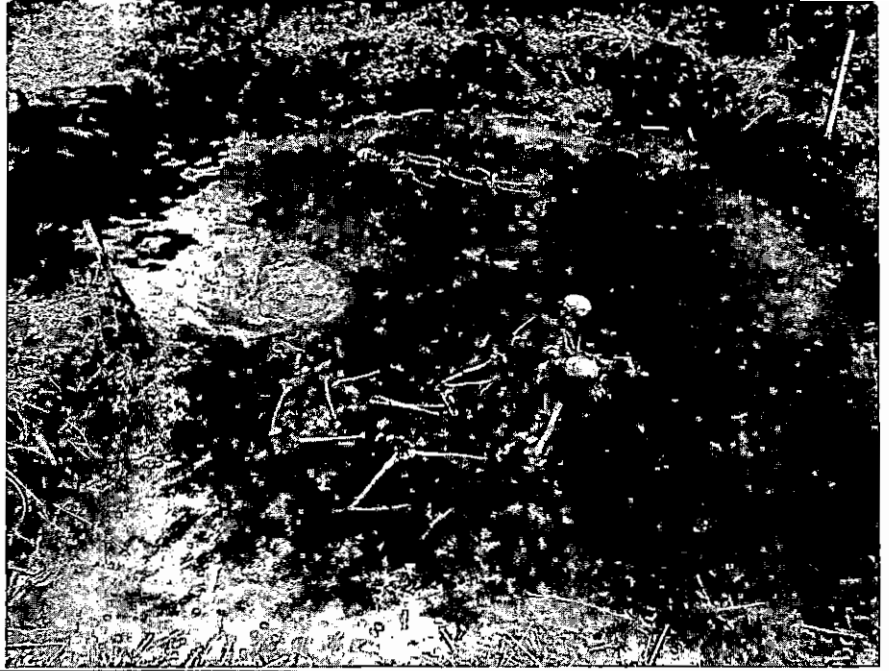
PL2 加曾利南貝塚から北貝塚を望む(1963年4月撮影)



PL3 第1地点全景



PL4 第1地点北から住居址群を望む(手前よりA・B・C住居址)



PL5 第2地点上層住居址の床面上に発見された人骨群



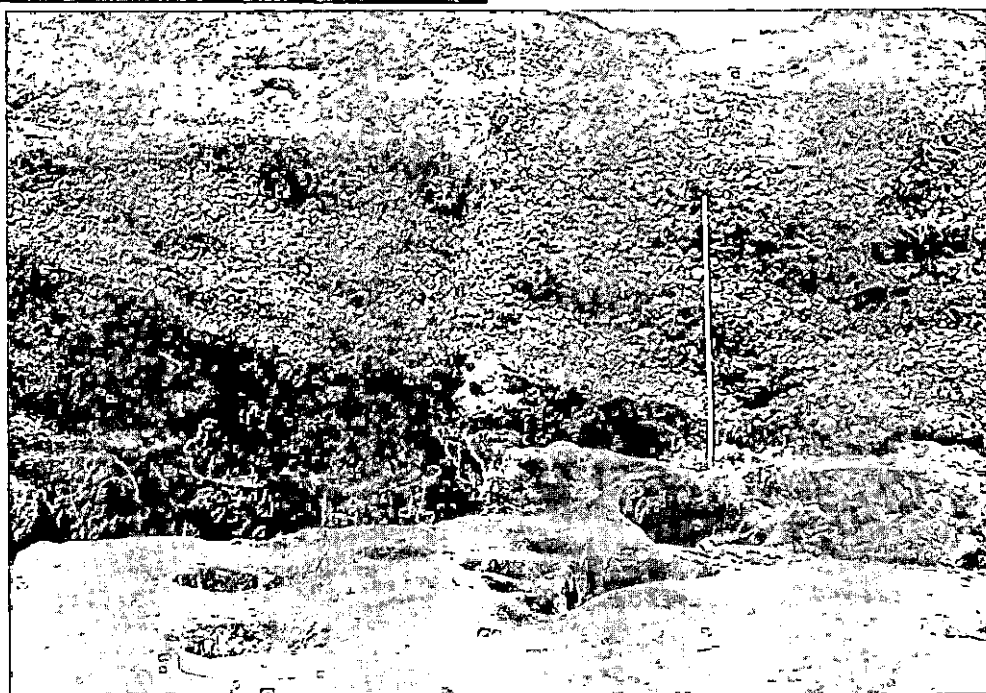
PL6 第2地点下層住居址床面(部分)



PL7 第1地点南側の壁面

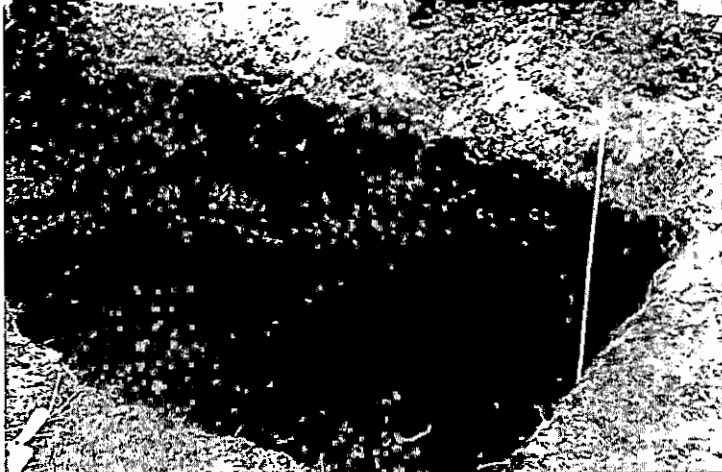


PL8 第1地点南側の壁面(部分)

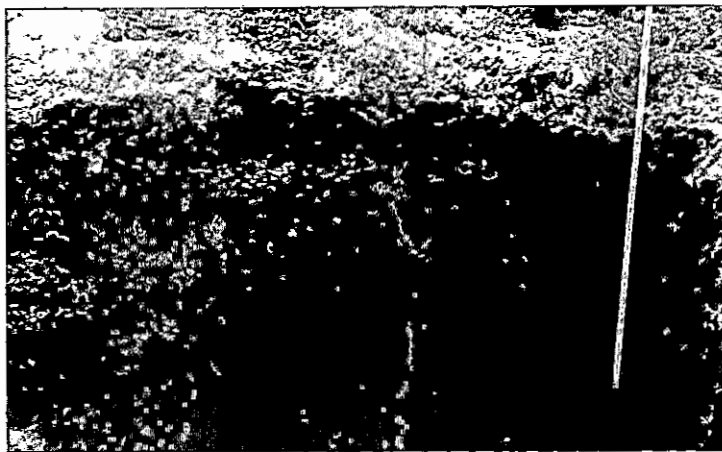


PL9 第1地点東側の壁面

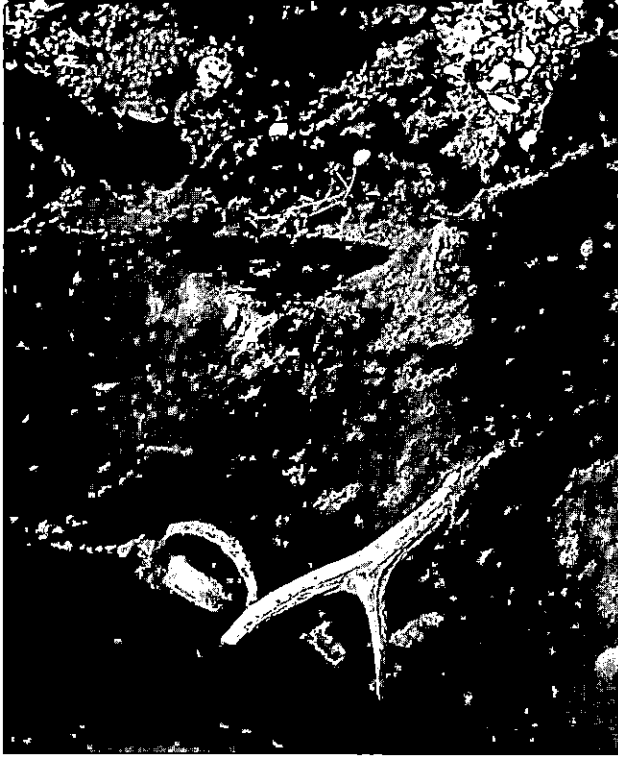
PL10 第2地点人骨群下の
層序(第1区北側の壁面)



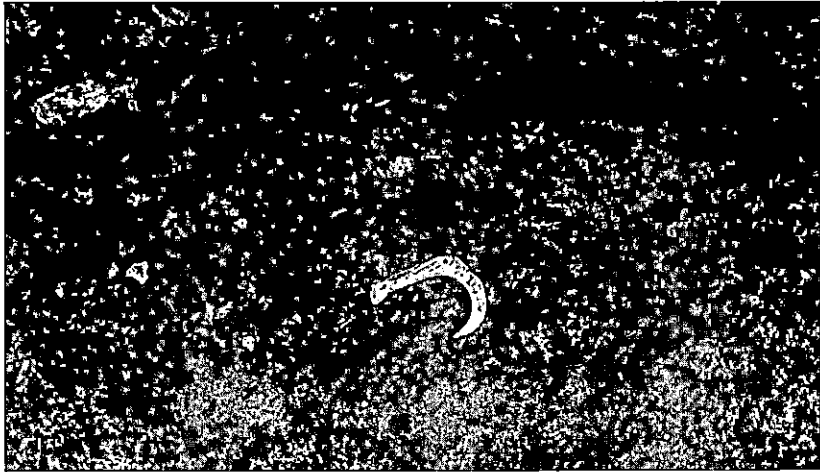
PL11 第2地点人骨群下の層序
(第1区北側の壁面 部分)



PL12 第2地点の層序(第1区西側の壁面)



PL13 第1地点B住居址周溝から発見された鹿角と土器破片(加曾利E式)



PL14 第1地点B住居址A'ピット内より出土した鹿角製釣針



PL15 第1地点C住居址床面上に発見された異形石棒



PL16 第1地点C住居址に伴った釣瓶形土器(堀之内I式)の出土状態



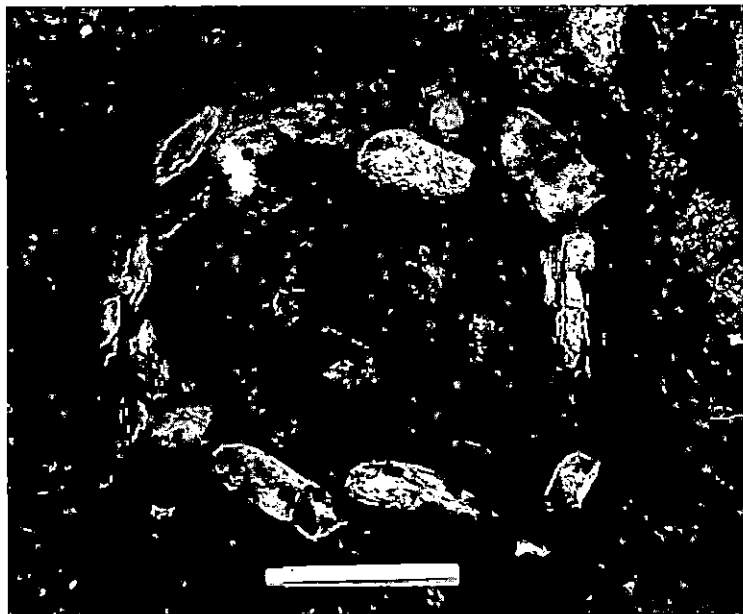
PL18 第1地点C住居址床面上に発見された
甕形土器(堀之内I式)の出土状態



PL17 第1地点C住居址に伴った朝顔形土器(堀之内I式)の出土状態



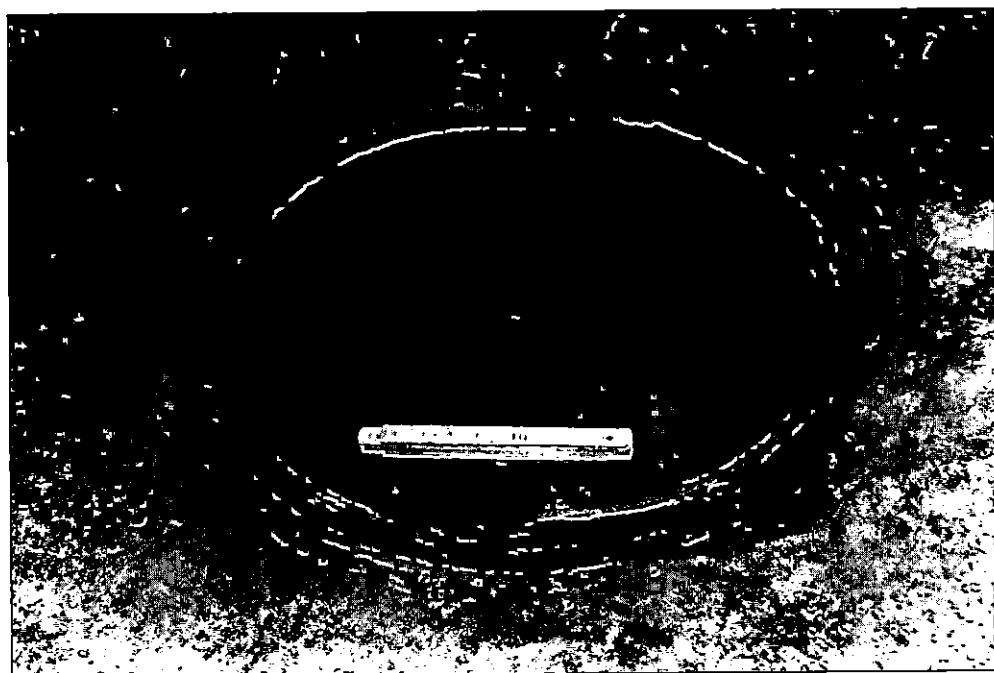
PL19 第1地点貝層中に発見された
甕形土器(堀之内I式)の出土状態



PL20 第1地点C住居址の石囲炉址



PL21 第2地点上層住居址の炉址



PL22 第2地点下層住居址の炉址(土器口縁部利用)

PL23 第2地点出土の第1号, 第2号,
第3号および第5号人骨の出土状態



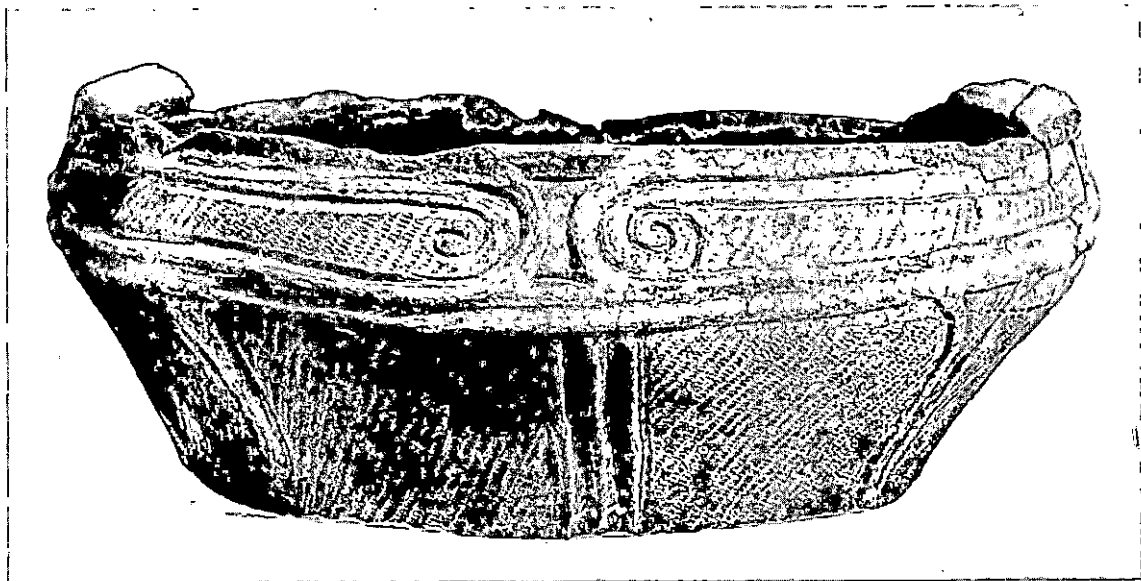
PL24 第2地点出土の第1号, 第2号および
第3号人骨の頭蓋骨の出土状態



PL25 第2地点出土の第3号人骨の右大腿骨(骨折)の出土状態



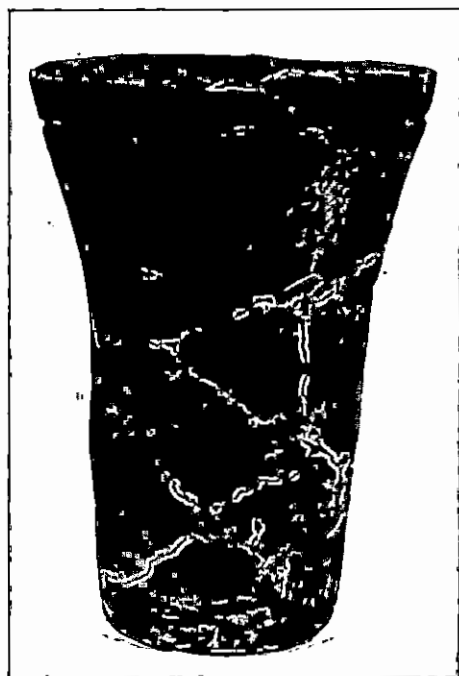
PL26 加曾利北貝塚北側斜面
貝層下より出土した深鉢形土器
(加曾利E I式)昭和4年武田宗久発掘H.40.3c



PL27 第2地点下層住居址の炉に使用した深鉢形土器(加曾利E I式)H.15.6cm



PL28 第2地点第5層上面出土の深鉢形土器(加曾利E I式)H. 35.0cm



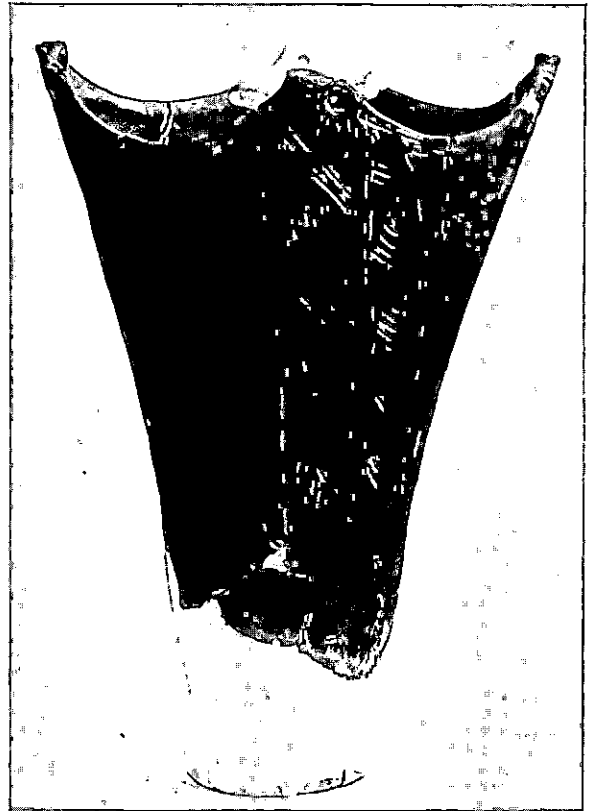
PL29 第2地点下層出土の深鉢形土器(加曾利E I式)H. 21.5cm



PL30 第2地点下層出土の深鉢形土器(加曾利E I式)H. 42.0cm



PL31 第1地点C住居址に伴った釣瓶
形土器(堀之内I式)H.21.1cm



PL32 第1地点C住居址に伴った深鉢
形土器(堀之内I式)H.36.9cm



PL33 第1地点貝層中出土の斐形土器
(堀之内I式)H.42.3cm



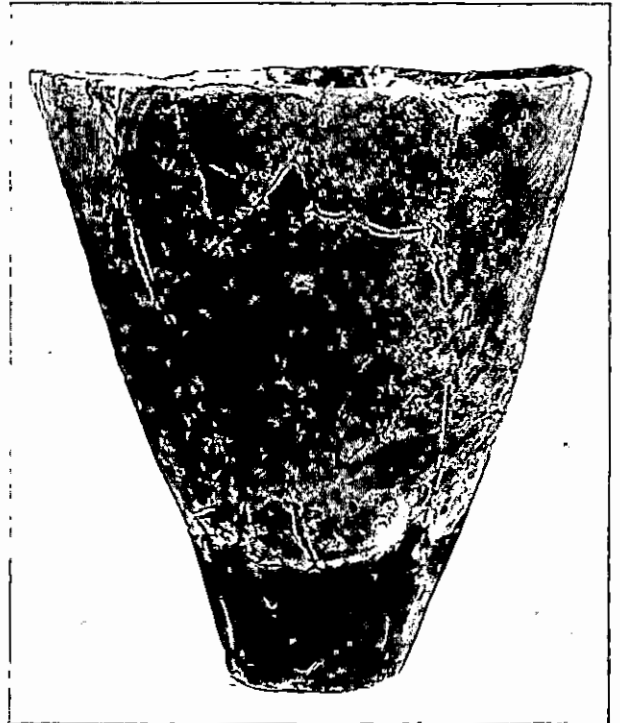
PL34 第1地点貝層中出土の斐形土器
(堀之内I式)H.33.4cm



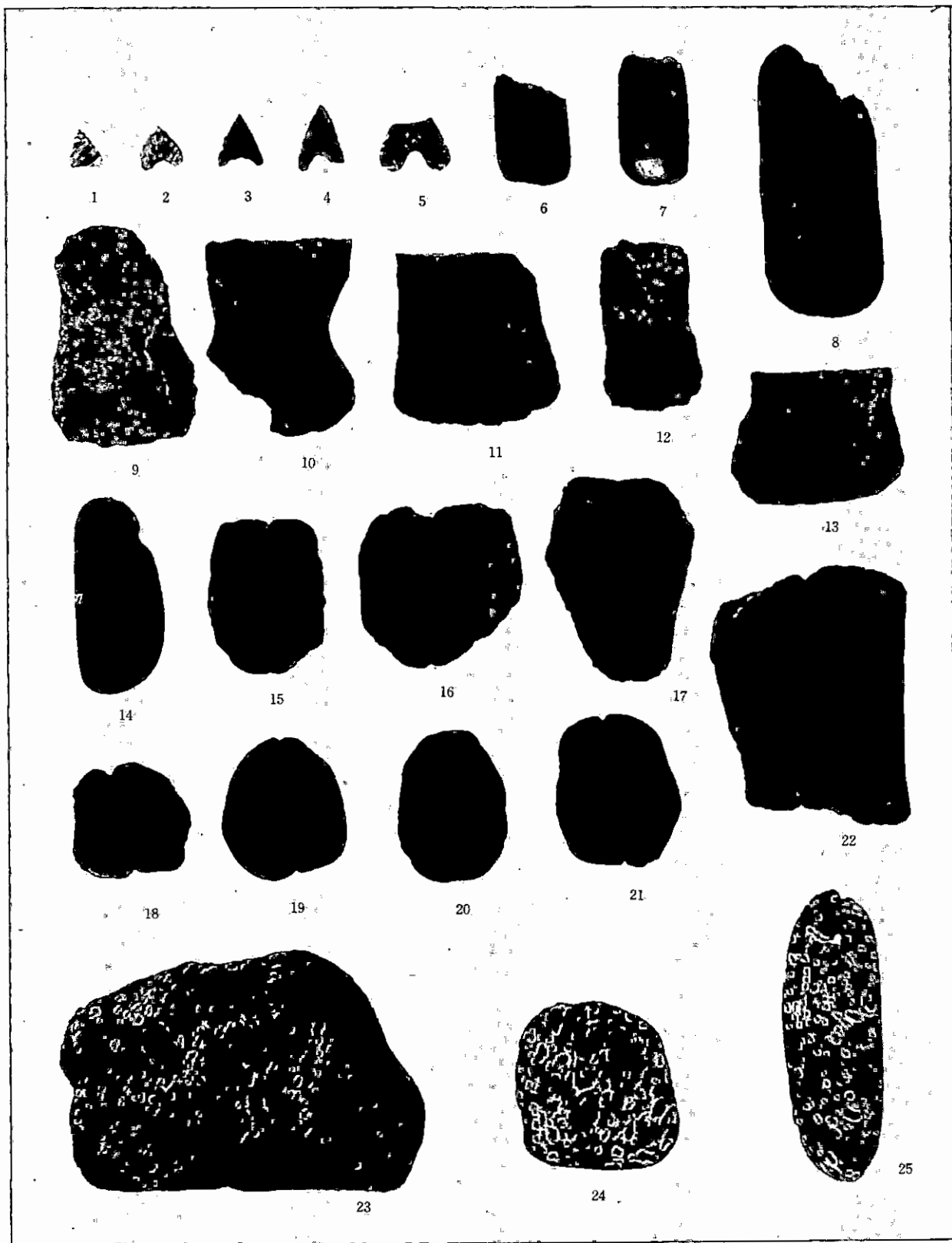
PL35 第1地点貝層中出土の深鉢形土器
(堀之内I式)H. 29.0cm



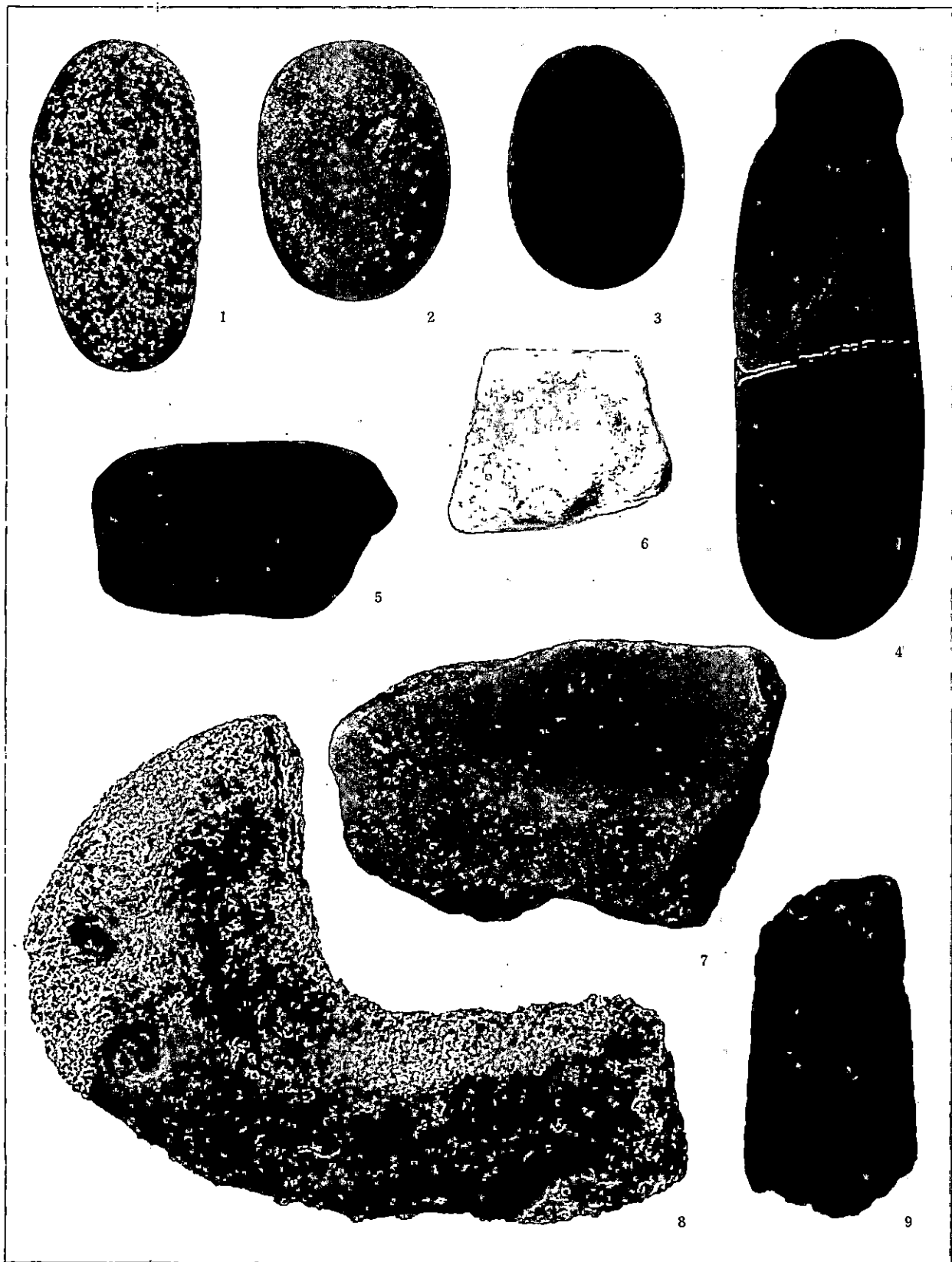
PL36 第1地点貝層中出土の深鉢形土器
(堀之内I式)H. 34.8cm



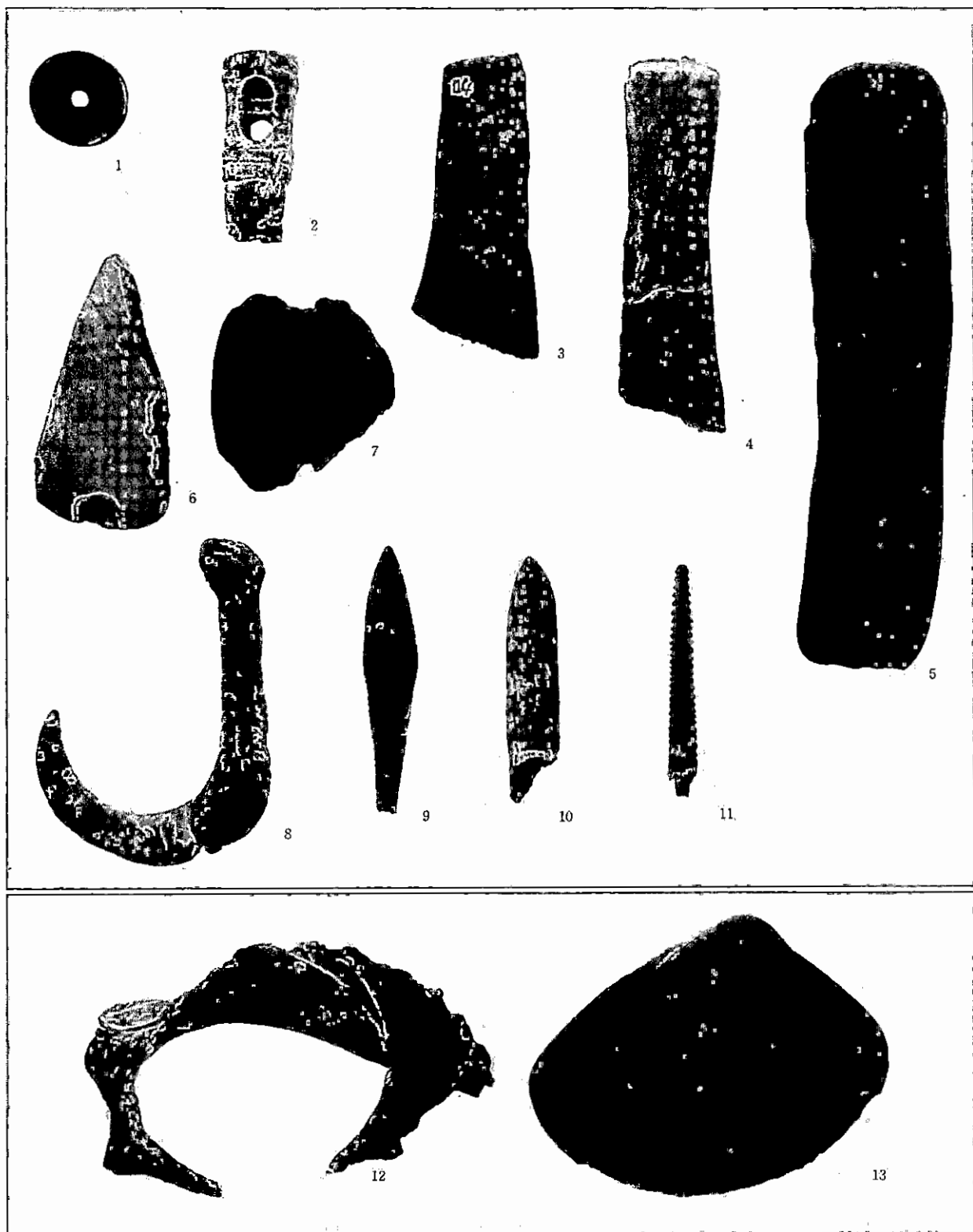
PL37 第1地点貝層中出土の深鉢形土器
(堀之内I式)H. 38.4cm



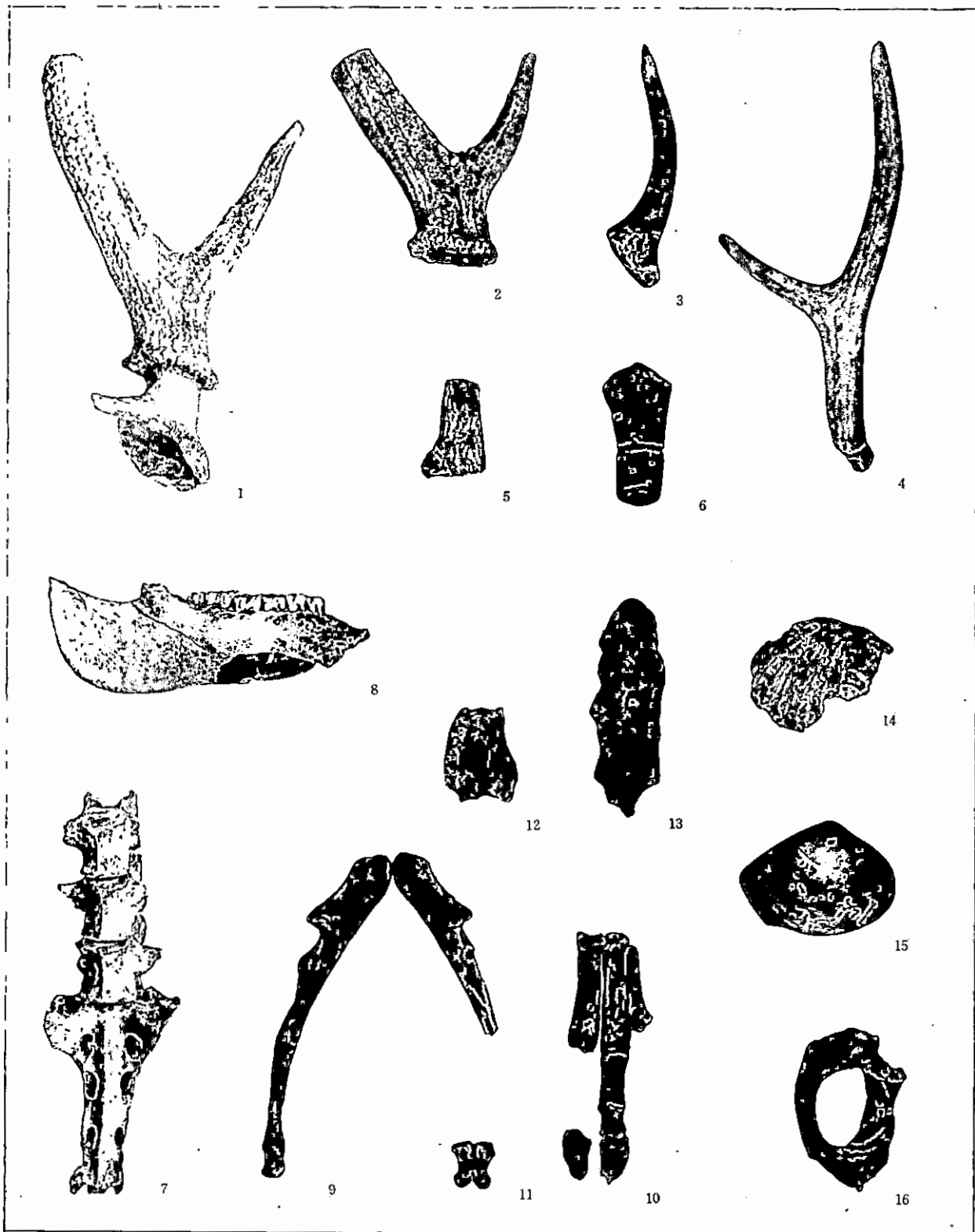
PL38 石器(1)および土製品(1) 1~5 石鏃, 6~8 磨製石斧, 9~13 打製石斧, (8, 17 は第2地点)
 14 石錘(?), 15~22 土錘, 23~25 浮子 (ほか第1地点出土)



PL39 石器(2)および石製品 1~3 敲石, 4 異形石棒(?), 5・7・8 石皿,
6 砥石(?), 9 石棒(?) (1~9 第1地点出土)



PL40 土製品(2)および骨角牙貝製品 1 耳栓, 2 ヘヤーピン, 3-4 角器未製品(?), 5 ヘラ状角器, 6 牙斧, 7 土鏝(?), 8 釣針, 9 角ヤス, 10 角鏝, 11 魚骨未製品, 12 貝輪, 13 貝器 (12 第2地点出土, ほか第1地点出土)

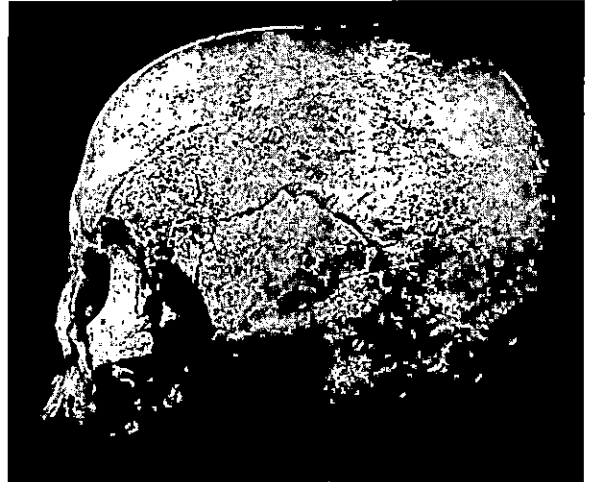


PL41 自然遺物 1~6 ニホンジカの角とその一部, 7 ニホンジカ腰椎と仙骨, 8~12 イノシシ右下顎骨, 左右尺骨, 右側前肢肢端, 鼻骨, 左上腕骨, 13 クジラ類の骨の加工品, 14 アワビ類, 15 ハマグリ, 16 アカニシ

PL42
第1号人骨

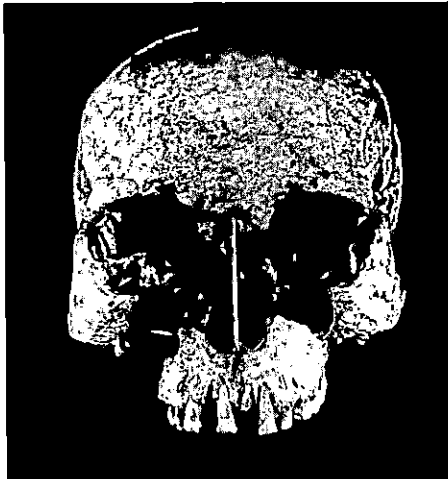


1 頭蓋骨前面観



2 頭蓋骨左側面観

PL43
第2号人骨

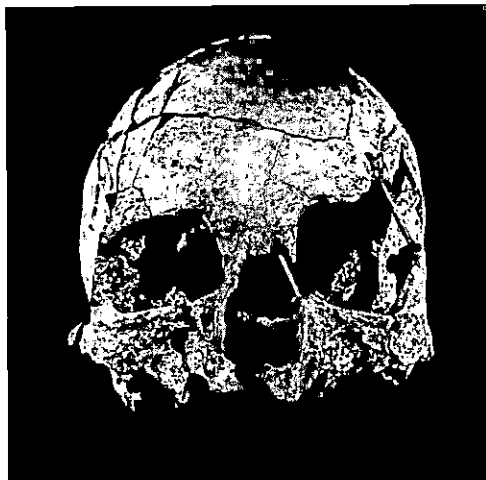


1 頭蓋骨前面観



2 頭蓋骨左側面観

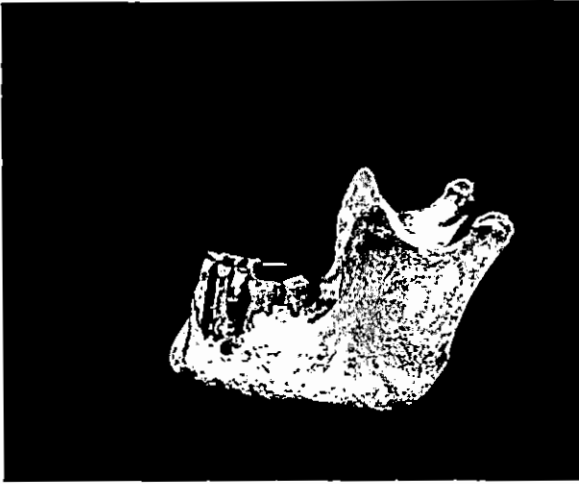
PL44
第4号人骨



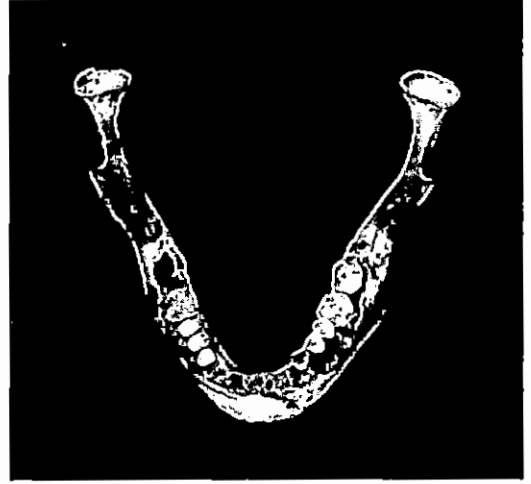
1 頭蓋骨前面観



2 頭蓋骨左側面観



3 下顎骨左側面觀



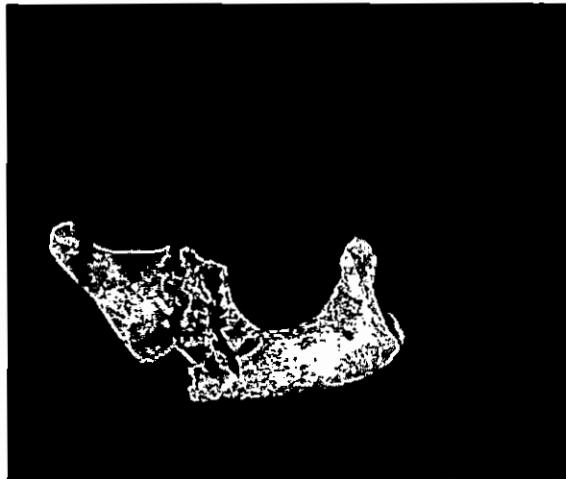
4 下顎骨上面觀



3 下顎骨左側面觀



4 下顎骨上面觀



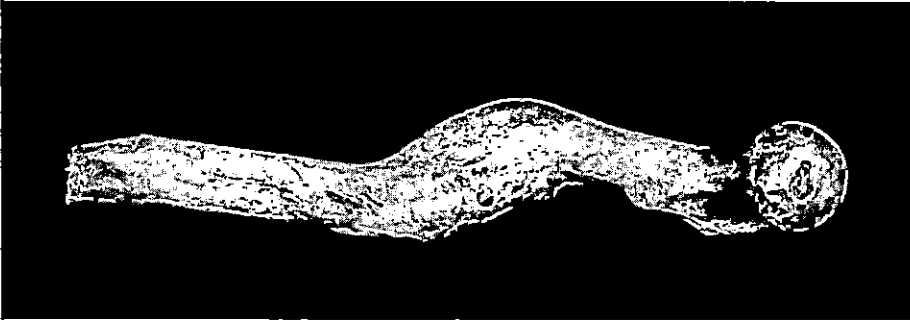
3 下顎骨右側面觀



4 下顎骨上面觀



PL45 第3号人骨 1 左右側大腿骨前面觀



第3号人骨 2 右側大腿骨內側面觀

加曾利貝塚

I

昭和37年度加曾利北貝塚
調査報告

武田宗久 編

目 次

第1章	序 説	5
第2章	調査の経過	8
第3章	遺跡の位置と周辺の状態	11
第4章	調査の概要	12
第1節	第1地点の状態	
I	層 序	12
II	住居址	17
III	大形ピット	20
第2節	第2地点の状態	
I	発掘の経過	23
II	層 序	23
III	住居址	24
第5章	遺物の概要	26
第1節	人工遺物	
第1地点		
I	土器	26
II	土製品	27
III	石製品	28
IV	動物質製品	30
第2地点		
I	上層の遺物	30
II	下層の遺物	31
第2節	自然遺物	
第1, 第2地点出土の動物遺存体		33
第6章	人骨の出土状態	45
第7章	人骨の所見	49
第8章	総 括	53
	あとがき	55

図版目次

PL 1	加曾利北貝塚全景と南貝塚の一部…… 1	PL 23	第2地点出土の第1号、第2号、 第3号および第5号人骨の出土状 態…… 9
PL 2	加曾利南貝塚から北貝塚を望む…… 1	PL 24	第2地点出土の第1号、第2号お よび第3号人骨の頭蓋骨の出土状 態…… 9
PL 3	第1地点全景…… 2	PL 25	第2地点出土の第3号人骨の右大 腿骨の出土状態…… 9
PL 4	第1地点北から住居址群を望む…… 2	PL 26	加曾利北貝塚北側斜面貝層下より 出土した深鉢形土器…… 10
PL 5	第2地点上層住居址の床面上に発 見された人骨群…… 3	PL 27	第2地点下層住居址の炉に使用し た深鉢形土器…… 10
PL 6	第2地点下層住居址床面…… 3	PL 28	第2地点第5層上面出土の深鉢形 土器…… 11
PL 7	第1地点南側の壁面…… 4	PL 29	第2地点下層出土の深鉢形土器…… 11
PL 8	第1地点南側の壁面（部分）…… 4	PL 30	第2地点下層出土の深鉢形土器…… 11
PL 9	第1地点東側の壁面…… 4	PL 31	第1地点C住居址に伴った釣瓶形 土器…… 12
PL 10	第2地点人骨群下の層序（第1区 北側の壁面）…… 5	PL 32	第1地点C住居址に伴った深鉢形 土器…… 12
PL 11	第2地点人骨群下の層序（第1区 北側の壁面部分）…… 5	PL 33	第1地点貝層中出土の甕形土器…… 12
PL 12	第2地点の層序（第1区西側の壁 面）…… 5	PL 34	第1地点貝層中出土の甕形土器…… 12
PL 13	第1地点B住居址周溝から発見さ れた鹿角と土器破片…… 6	PL 35	第1地点貝層中出土の深鉢形土器…… 13
PL 14	第1地点B住居址 A' ビット内よ り出土した鹿骨製釣針…… 6	PL 36	第1地点貝層中出土の深鉢形土器…… 13
PL 15	第1地点C住居址床面上に発見さ れた異形石棒…… 6	PL 37	第1地点貝層中出土の深鉢形土器…… 13
PL 16	第1地点C住居址に伴った釣瓶形 土器…… 7	PL 38	石器（1）および土製品（1）…… 14
PL 17	第1地点C住居址に伴った朝顔形 土器…… 7	PL 39	石器（2）および石製品…… 15
PL 18	第1地点C住居址床面上に発見さ れた甕形土器…… 7	PL 40	土製品（2）および骨角牙貝製品…… 16
PL 19	第1地点貝層中に発見された甕形 土器…… 7	PL 41	自然遺物…… 17
PL 20	第1地点C住居址の石囲炉址…… 8	PL 42	第1号人骨…… 18
PL 21	第2地点上層住居址の炉址…… 8	PL 43	第2号人骨…… 18
PL 22	第2地点下層住居址の炉址…… 8	PL 44	第4号人骨…… 18
		PL 45	第3号人骨…… 20

挿図目次

Fig. 1	大山・大給両氏実測図 大正12年	5	Fig. 26	第1地点 D' ビットの実測図	21
Fig. 2	第1地点・第2地点トレンチ区画	9	Fig. 27	第1地点 E' ビット	21
Fig. 3	千葉市の貝塚分布図	10	Fig. 28	第1地点 E' ビットの実測図	21
Fig. 4	加曾利北貝塚とその周辺の貝塚分布図	11	Fig. 29	第2地点調査区の断面図	23
Fig. 5	加曾利北貝塚の発掘位置	13	Fig. 30	第2地点第5層上から発見された土器および灰塊	24
Fig. 6	第1地点住居址群の平面図	14	Fig. 31	第2地点下層住居址の平面図	25
Fig. 7~Fig. 10	第1地点住居址群の断面図	15	Fig. 32	土器実測図(1) 第1地点出土	36
Fig. 11~Fig. 17	第1地点調査区の断面図	16	Fig. 33	土器実測図(2) 第2地点出土	37
Fig. 18	第1地点B住居址の平面図	18	Fig. 34	土器拓影(1) 第1地点出土	38
Fig. 19	第1地点B住居址床面より発見された石皿	18	Fig. 35	土器拓影(2) 第1地点出土	39
Fig. 20	第1地点B住居址の断面図	19	Fig. 36	土器拓影(3) 第2地点出土	40
Fig. 21	第1地点B住居址の周溝より発見された鹿角	19	Fig. 37	土錘実測図	41
Fig. 22	第1地点C住居址の炉の実測図	19	Fig. 38	石器実測図(1)	42
Fig. 23	第1地点 A' ビット	20	Fig. 39	石器実測図(2)	43
Fig. 24	第1地点 A' ビットの実測図	20	Fig. 40	石器(3), 骨角牙貝製品および土製品実測図	44
Fig. 25	第1地点 D' ビット	21	Fig. 41	第2地点の人骨上をおおう貝層	45
			Fig. 42	第2地点の人骨出土状態	47
			Fig. 43	No. 1~No. 5 人骨の出土状態	48

第1章 序 説

千葉県北半部の東京湾沿岸には標高 20~40m 前後のローム層に被われた丘陵がはてしなく続く。そしてこのやわらかい丘陵のいたるところに樹枝状の浸蝕谷が展開している。貝塚はこれらの谷に面した丘陵の縁辺に集中し、その密度は恐らく日本最高を記録することになる。その規模は大小さまざまで、中には直径 1m にも満たないものもあれば、50~100m を超える大貝塚もある。いずれも日本人の生活と文化の源流をなす原始の貴重な遺跡であることは申すまでもない。

大規模な貝塚は一般に馬蹄形貝塚や環状貝塚の名で呼ばれるが、この地域には堀之内・曾谷・姥山・古作・中沢・上山・後・旭前・堀込・貝殻ボツコミ・^{かみはら}上飯山満・上高根・藤崎堀込・築地・^{ついで}積橋・東寺山・^{ついで}廿五里・^{ついで}園生・台門・荒屋敷・草刈場・加曾利北・加曾利南・さら坊・蔵立・多部田・矢作・月ノ木・へたの台・菅田高田・長谷部・築地台・菱名・有吉・上赤塚・六通・小金沢・椎名崎・大膳野・草刈・門前・徳永・^{さいつ}西広・山倉・祇園・市原市上高根・^{いさく}諸久蔵・台等々の諸貝塚（以上は市川、船橋、習志野、千葉、市原の各市内にある東京湾沿岸のもの）がきらめく星の如くに点在する。

なかでも加曾利貝塚はその王座を占め、しかも巨大な環状貝塚（加曾利北貝塚）と馬蹄形貝塚（加曾利南貝塚）の二つがあって、これが北と南に接触して並び、2万数千坪の面積に幾千万枚とも数知れぬ貝殻の山を築いて、悠久数千年の歳月に耐え、奇跡的にも殆んど原始の姿をそこなうことなく現在に及んでいる。測量の結果によれば、この南貝塚は直径 170m、北貝塚は直径 130m に及ぶ。まさに日本最大の貝塚という名にふさわしい条件と偉容を備えたものと云えよう。

加曾利貝塚の名が初めて学界で紹介されたのは明治20年のことであった。上田英吉の「下総国千葉郡介城記」に「千葉郡の介城、丘腹絶壁に露出せる者凡二十所、其最大なるを仁戸名、加曾利、貝塚三村の介城とす。……明治5年以来、土人其の貝殻を採掘して、石灰を製する

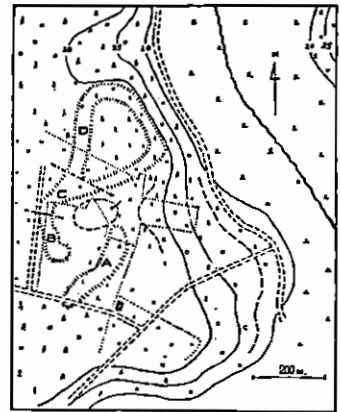


Fig. 1 大山・大給両氏実測図 大正12年

もの多し、……」^{註1}とある。

その後多くの先学がこの地を訪れて貝塚の状況視察、遺物の採集等を試みたが、大正11年には主として人骨採集の目的をもって試掘が行われた。このメンバーは、東京大学人類学教室の小金井良精、松村瞭、大山柏らである。大山はこの際実測図を作製した。続いて大正13年小金井良精、松村瞭は山内清男、甲野勇、八幡一郎らを伴って前記実測図のB地点、D地点のほかにE地点と呼ぶ3箇所を選んで発掘を行い、B・D地点から計3体の人骨を得るなど多くの成果をもたらすとともに、初めて縄文土器の含まれる層位の違いによって編年を試みようとする科学的な調査が行なわれた。

八幡一郎はこれを次のように述べている。「地点は傾斜面に添って幅2mの溝を作り、表土、貝層の上の方から下へと掘り進んだ。発掘によって、私達は直感的にB地点発見の土器と、E地点発見の土器とが趣を異にして居る事を知った。そしてB地点の黒褐色土層からもE地点発見の土器に似たものが時々現われた。B地点付近表面に散布する土器と、E地点付近表面に散布する土器を拾って見ても、大体異った性質のものであることは察せられた。」^{註2}

縄文土器を対象とした層位学的編年の研究はすでに大正8年ごろから東北地方の貝塚において開始されていたとはいえ、大正13年の加曾利貝塚の発掘が、この方法をさらに推進させ、日本考古学の研究を著しく推進させる

契機となったことは確かである。

このことに関して山内清男は昭和3年「下総上本郷貝塚」と題する論考の中で「加曾利貝塚の発掘(大正13年)は、土器型式の内容決定、層的事実、年代的考察に向けて僕等を躍進せしめた。加曾利E地点貝塚発掘の土器、加曾利B地点貝塚発掘の土器は各個別の一型式とみとめられ、爾後地点の名称は夫々の型式を指示する言葉となった。これに前後して堀之内貝塚の土器は大正10年鳥居博士が主宰し、小松、宮坂、山内等の参加した発掘の土器及び大正7年僕の表面採集品を標準として一型式と認められ、安行貝塚の土器は大正8年僕と藤枝隆太郎氏との組織的発掘の土器を基として他の一型式として認められた。——中略——更に僕は「堀の内式」は「加曾利E式」より後であることを示す型式学的根拠に基づいて加曾利E、堀之内、加曾利Bの年代的序列を認めた。」と述べている。^{註3}

その後昭和11年における大山史前学研究所の発掘調査は主として加曾利南貝塚の性格を総合的にとらえた最初の成果として注目された。^{註4}

第二次大戦後の発掘としては、昭和33年明治大学考古学研究室が加曾利北貝塚において、前記東京大学人類学教室が「E地点と名づけたと思われる箇所^{註5}の東側に、数本のトレンチを設定し、」加曾利EⅠ式土器と加曾利EⅡ式土器との間の層位の区別に検討を加えている。このように明治、大正、昭和三代にわたる加曾利貝塚の長い研究の歩みは、日本考古学の発達に極めて重大な意義をもっている。

昭和26年のこと、千葉県は川崎製鉄株式会社の誘致を契機とし、昭和50年を目標に東京湾内の埋め立てによる京葉臨海工業地帯1万1300ヘクタールの造成と、それに伴う内陸工業地帯約3300ヘクタールの開発を計画し、着着とこの事業を推進して来た。この範囲は浦安町から市川、船橋、習志野、千葉、市原、袖ヶ浦町、木更津市、君津町、富津町にいたる延長80kmにわたるものであるが、たまたまここが全国的に見ても貝塚の密度の高い地域とはほぼ一致するものであった。

それ故、開発の中に遺跡の保存を織りこんだ慎重な行政的措置が積極的且つ速やかに講ぜざる限り、貴重な遺跡が急速に消滅することは当然のことであった。

昭和36年の秋のこと、千葉市教育委員会が同年冬に予定している千葉市文化財展覧会に出品する資料の一部として、加曾利貝塚の写真を専門家に撮影させることになったから、私に現地を案内せよという依頼を受けた。そこで係官数名とともに現地を訪れてみると、意外にも樹木が盛んに伐採され、所々に杭が打ちこまれていた。早速事情を調査すると、すでに去る昭和35年8月頃郵政互助会が住宅団地造成のふれこみで、加曾利貝塚を含む約10数万坪を買収済みであることが判明した。

私はこの時加曾利貝塚は何としても保存しなければなるまいと考えた。併し事態は切迫しているので、この貝塚の一部なりとも早急に発掘調査した上で、世論に訴える以外に当面の対策はないと決意した。その年の冬のことである。千葉市文化財保護審議委員会の席上、昭和37年度の事業の一つとして、是非ともこの貝塚の発掘調査を行なう必要があることを提案した。これは幸いに賛同を得られて、いよいよ8月3日から10日間の予定で調査を実施したのであったが、実際は3日延びて13日に終了し、一応の成果を取めたのである。

この発掘調査は千葉市教育委員会が主催し、直接の調査はその外郭をなす千葉市文化会が担当した。責任者は武田宗久があたり、調査委員には千葉市教育長楠原信一、千葉市教育委員会社会教育課長遠藤健郎、加曾利中学校長沢本七郎、千葉市文化財保護審議委員鈴木正夫・国松真三郎・土肥刀泉・中村民男・和田茂右衛門・穴倉健吉・武田宗久、早稲田大学考古学研究室金子浩昌が任命された。作業は千葉県立千葉高等学校郷土研究クラブ、加曾利中学考古学クラブ、早稲田大学学生有志、早稲田高等学院生徒有志及び地元の方々によって行なわれた。出土品や発掘用具の保管をひき受けてくれた地元の豊田照氏、一切の渉外関係や会計事務の任に当られた千葉市教育委員会の文化財担当官佐藤好子氏、調査全般について有益な指導を賜わった千葉県社会教育課文化財担当官の各位

に心から御礼申し上げる次第である。

なお発掘終了後、1箇月間はトレンチの埋めもどしを中止して一般に公開し、本遺跡の重要性を市民に訴える一助とした。このことから加曾利貝塚を是非とも保存すべしと云う強力な要望が、各方面からおこった。一方郵政互助会はこの土地を松島炭鉱株式会社に買却し、さらに昭和38年1月頃東洋プレハブ工業株式会社がこれを買収して整地作業を開始し、加曾利南貝塚の一部を破壊するに至り、本貝塚の保存運動は急速にたかめられて行ったのである。

注6

武田宗久

註1 人類学会雑誌2巻19号 明治20年9月

註2 八幡一郎「千葉県加曾利貝塚の発掘」人類学雑誌39巻4・5・6 大正13年5月

註3 山内清男「下総上本郷貝塚」人類学雑誌43巻 昭和3年10月

註4 大山史前学研究所「千葉県千葉郡都村加曾利貝塚調査報告」史前学雑誌9巻 昭和12年

註5 芹沢長介「千葉県千葉市加曾利貝塚」日本考古学年報11 昭和37年

註6 武田宗久「加曾利貝塚の意義と保存対策」昭和39年3日

第2章 調査の経過

昭和37年7月22日武田、金子、宍倉は発掘に先だって予備調査を行なう。国鉄千葉駅に集合したわれわれは佐倉行のバスに乗って千葉霊園前で下車、墓地を経て小さな谷を渡り森と民家のまばらに混在する小径をしばらく行くと、突如として真白い貝殻を見渡す限り敷きつめたような広野に、発育の悪い薩摩芋畑と雑草の生い茂る情景を見た。ここが加曾利南貝塚である。周囲に点在する雑木は大かた伐採されている。開拓の準備であろう。

前方に森と雑草に被われた丘が見える。高压送電用の高い鉄塔が真夏の太陽をまともに受けて青く白く光る。あれがめざす加曾利北貝塚だ。カメラとボーリング棒、遺物採集用の袋を携行した三人は現地に着くとこの貝塚を一巡して大体の状況をつかんだ。大正13年東京大学理学部人類学教室の発掘のさい、E地点と名づけたと思われる箇所、その東側に昭和33年明治大学考古学研究室が発掘した場所を見る。今回の発掘は最終的調査になる可能性が大きいので慎重に地点を選定しなければならない。ボーリング調査の結果E地点から北西方に約100m(高压送電用鉄塔の北北東5m)付近に意見が一致した。ここは比較的旧態を良く保存し、地表面には僅かに貝殻が散布している程度であるが、貝層は1m以上あることが確認されたからである。帰途宿舎に挨拶をすませ地元の豊田照氏、豊田藤三郎氏宅に廻って今後の発掘の協力を依頼する。

8月3日午前8時30分、調査団は現地に集合して諸般の準備にかかる。11時頃千葉市教育長楠原信一氏ら関係官から挨拶を受ける。午後最初のトレンチ(これを第1トレンチと称する)を設定する。長さ15m幅1.5mでこれを北の方から1~15区画にして発掘を開始する。この日、地元の豊田藤三郎、千隼仁三郎、鶴田兼吉、原島福次郎の各氏からそれぞれ往時の加曾利貝塚に関する有益な話を聞く。

5日、第1トレンチの作業はほぼ地山に達したので東側に第2トレンチ(10m×3m)を設け第1トレンチとの

間に20cmの壁をのこす。午後から第1トレンチ西側のセクションの図取りを始める。表土は15cm前後で全くあらされていない。この層と地山上面を被う厚い混貝土層との間に貝層が複雑に重なっている。これが数千年前の人々の生活の年輪である。ここにはキサゴを細かく破碎した層が所々にはさまっている。特に12~15区にかけては重なり合ってセクションを真白にいろどる。2~3区の下方にはブロック状の焼土があり、7区の下方にはキサゴのみの層が見える。貝層中の土器は堀之内式が大部分を占めるが地山上部の混貝土層中からは加曾利B式土器の分量が多い。

6日第1トレンチの地山は住居地の床面が重なっていることをつきとめた。そこで第1トレンチの西側に第3トレンチ(10m×2m)を設け、前述の壁をとり除いてこれらの住居地を追求することにした。9日第2トレンチの東側に拡張区(5.5m×1.5m)を設け、後にこれを第2トレンチ第1拡張区と名づけた。また第3トレンチの西側に狭い拡張区を作る。この日高压送電用鉄塔の南東10m付近に10m×1.5mの新トレンチを設けその西半部を1区、東半部を2区として発掘中、地表下約40cmのところでは人骨群を発見する。そこで従来の地点を第1地点として武田が担当し、新設の地点を第2地点と名づけて金子、宍倉が担当する。

10日第1地点第2トレンチ第1拡張区の東側に更に拡張区(3.5m×1m)を設け、これを第2トレンチ第2拡張区とする。一方第2地点では人骨群を追求するために1区の西側に3区(4m×2m)、東側に4区(5m×2m)を設けて作業を進めるうちに、1区に発見された焼土のブロックは住居地の炉址で、同一平面上に発見された人骨群はこの住居地の床面上にあることが認められた。

12日第1地点の各壁における図取りを始める。第2地点では依然として人骨群の調査を続行し、併せてその図取りを行なう。なお人骨群に伴う住居地の炉址の一部に使用された数片の土器は加曾利B式である。

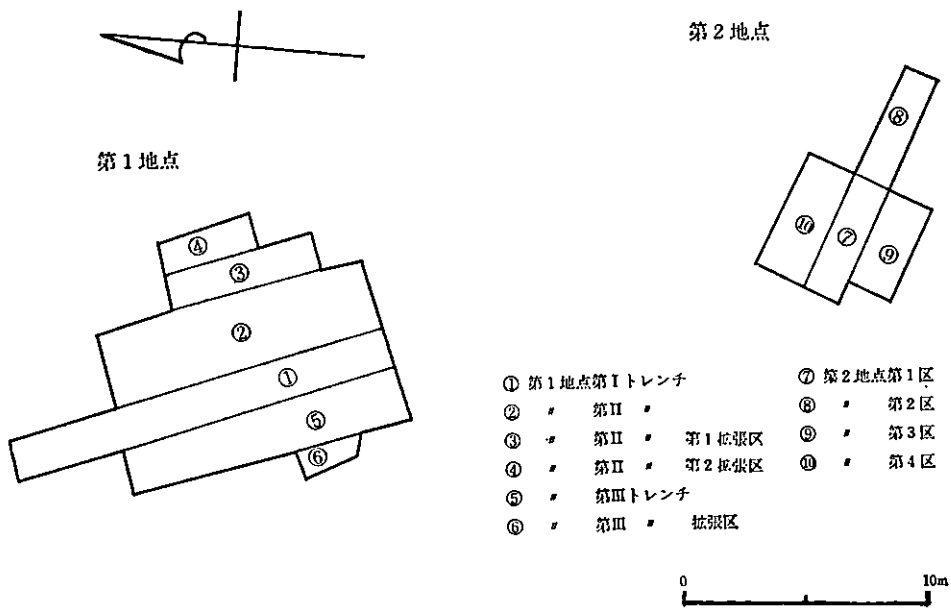


Fig. 2 第1地点・第2地点トレンチ区画

13日両地点とも調査終了後写真撮影を行ない、第1地点はそのまま向う1箇月間出土状態を公開することとし、第2地点は人骨群を取りあげた後、1区をのこして他の部分の埋めもどしを行なう。

14日第2地点1区をさらに地山まで掘り下げて貝層の堆積状態を調べた。この結果貝層下のローム表面は加曾利E I式の住居址の床であることを確認したのでこの追求に移り、大型土器の口縁部を使用した炉址を発見する。

15日午後からこの部分の実測図、写真撮影等を行なって夕刻埋めもどしを行なう。 武田宗久

- × 早期
- △ 前期
- 中期
- 後期
- 晩期

Fig. 3 千葉市の貝塚分布図



第4章 調査の概要

第1節 第1地点の状態

本地点は加曾利北貝塚の北東部に位する。すでに第2章で述べたように、大正13年東京大学理学部人類学教室が発掘してE地点と名づけたと思われる箇所より北西方に約100mの距離にあり、現在本地点の近くにある高圧送電用鉄塔から北北東に約5mを測る場所を基点として設定した第1トレンチ、第2トレンチ、第2トレンチ第1拡張区、第2トレンチ第2拡張区、第3トレンチ及び第3トレンチ拡張区を含む地域の総称である。

本地点の標高は32.5mである。地表面は概ね平坦で貝殻が僅かに散布する程度である。本地点の東端より約5m北東によった所から急に30度前後の斜面と変わり、谷底の方向に向っている。

I 層序

地表面からローム面にいたる層序は、西壁附近と他の部分では著しく異なる。即ち、西壁の断面図 Fig. 7 (イ〜ロ〜ニ) では、表土下よりローム面にいたる間は殆んど暗褐色土層乃至黒褐色土層である。貝層と認められるものは黒褐色土層の中にブロック状の混貝土層と少量のキサゴ破砕層が点在する程度であるが、中央部の第1トレンチを北から南に切った断面図 Fig. 8 (ヨ〜カ〜タ) と東壁の7枚の断面図 Fig. 11~17 (ホ〜ヘ、ヘ〜ト、ト〜チ、チ〜リ、リ〜ヌ、ヌ〜ル、ル〜オ) では、いずれも黒褐色土層がローム面の上部を被い、この厚い土層の上部と表土層との間に、主として混貝土層・混貝土層・キサゴ破砕層などが複雑に交錯して発見された。

さらに Fig. 8 (ヨ〜カ〜タ) をよくみると、南部以外の部分における層序は表土・混貝土層・混貝土層・混貝土層・黒褐色土層の順に水平的に堆積する傾向があって、この間にブロック状のキサゴ破砕層が散在する状況であるのに対して、南部の断面では混貝土層・混貝土層・キサゴ破砕層の三層が、あたかも数枚のレンズを南から北

に向けて斜めに重ね合わせたように堆積している。このレンズ状の堆積は南壁の断面図 Fig. 10 (ニ〜タ〜ホ) ではほぼ水平的である。そしてこれらの貝層の直下は黒色炭化遺物層に被われ、その下にC住居の床面がある。

(黒色炭化遺物層はC住居が火災によって焼失した際に生じた堆積物と思われる。)

以上のような Fig. 8 (ヨ〜カ〜タ) の南部と南壁の断面図 Fig. 10 (ニ〜タ〜ホ) の状況を総合して観察すると、C住居は焼失後かなり長い期間をそのまま放置されていたために、そこに大きな凹地が生じた。その後この凹地に土砂や貝殻が次第に落ちこんで行ったのではなからうかと思う。

次に東壁の断面図 Fig. 11~14、17 (ホ〜ヘ・ヘ〜ト・ト〜チ・チ〜リ・リ〜ヌ) をつなぎ合せて観察すると、この附近にもやはり前述の貝層と同様、レンズ状をなした貝層の大きな落ち込みがあるので、もしトレンチを更に東方に拡張して発掘して居れば、新しい住居址を発見することが出来たかもしれない。

第一地点の表土の厚さは平均15cm前後で、内部に少量の貝殻と加曾利B式期の遺物を僅かに含んでいた。貝層は上述の如く頗る多彩な様相を示し、内部に豊富な堀之内式期の遺物を有する。貝層の厚さは平均70~80cm内外であるが、B住居址の上部では110cmに達するところがあった。

貝の種類は数量の上から云うとキサゴが最も多く、これに続いて、ハマグリ、アサリ、シオフキ、ウミミナ、サルボウ、イタボガキ、アカガイ、カガミガイ、マテガイ、アカニシ、ナガニシ、イボニシ、ツメタガイ、バカガイなどが多く検出され、マガキ、サザエ、アラムシロ、オオノガイ、レイシ、ミルクイ、ヤマトシジミ、カワニナ、ヒグリマキマイマイ、オキアサリ、ハイガイなどは少ない。特殊なものとしてはアワビ、アリスガイ、オオマテガイ、ソデガイなどがある。

貝層下とローム面の間にある黒褐色土層中には、上部

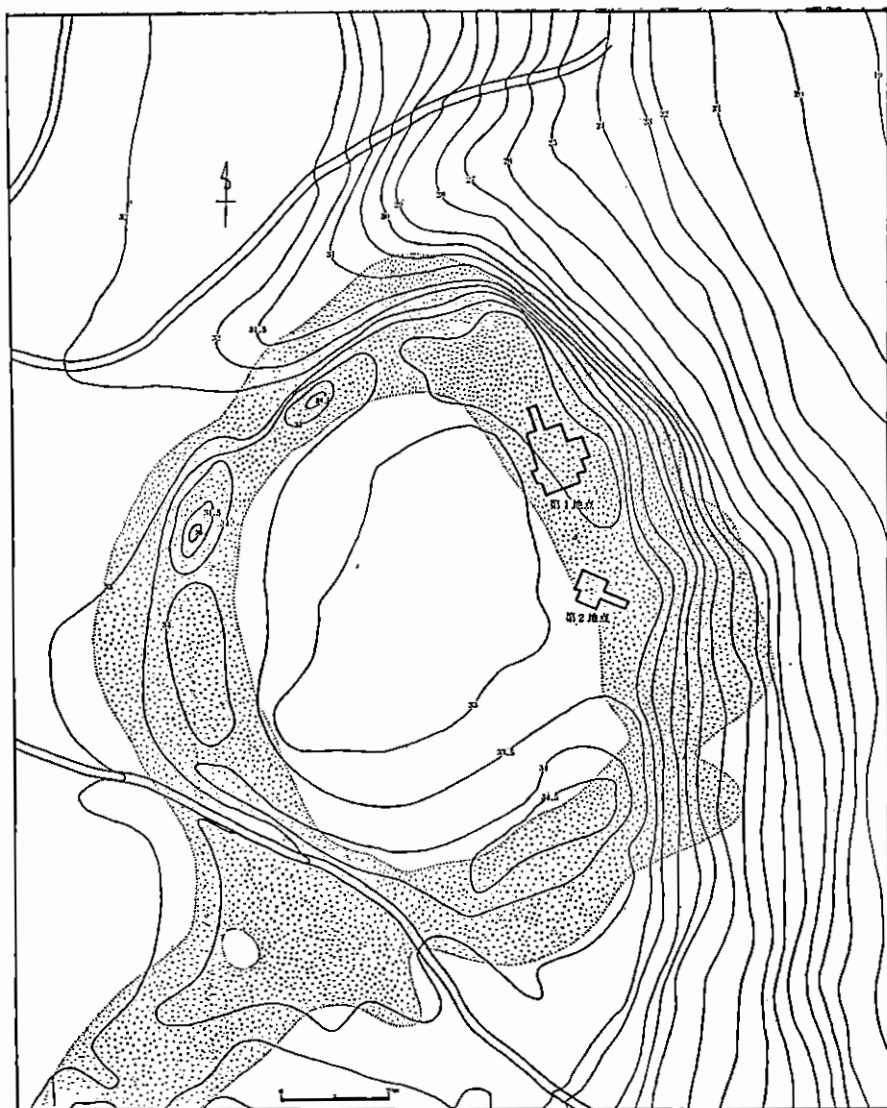


Fig. 5 加曾利北貝塚の発掘位置

に堀之内式期の遺物を含み、中部以下に加曾利E式の遺物を内蔵するところが多かった。なおこの層には焼土のブロック、キサゴのみのブロック、キサゴ破碎層のブロックなどが散在しており、また少量の貝殻が混入していたが、加曾利E式の文化遺物を含む明確な貝層は認めなかった。

本地点のローム層の上部は殆んど人工的に掘り凹めら

れた竪穴住居址の群と大型ピットの群によって占められ、自然の状態をそのまま遺存するローム面は、僅かに西壁附近の一部と東壁のチ〜ト壁面附近に見出されるにすぎない。試みに c~d 断面図によって両者の高低を比較すると、前者は後者より 30 cm 前後高くなっている。これを傾斜角度で示すと 5~7 度となる。そしてこの両者の間に B 住居址があることから、この住居を建造する際に

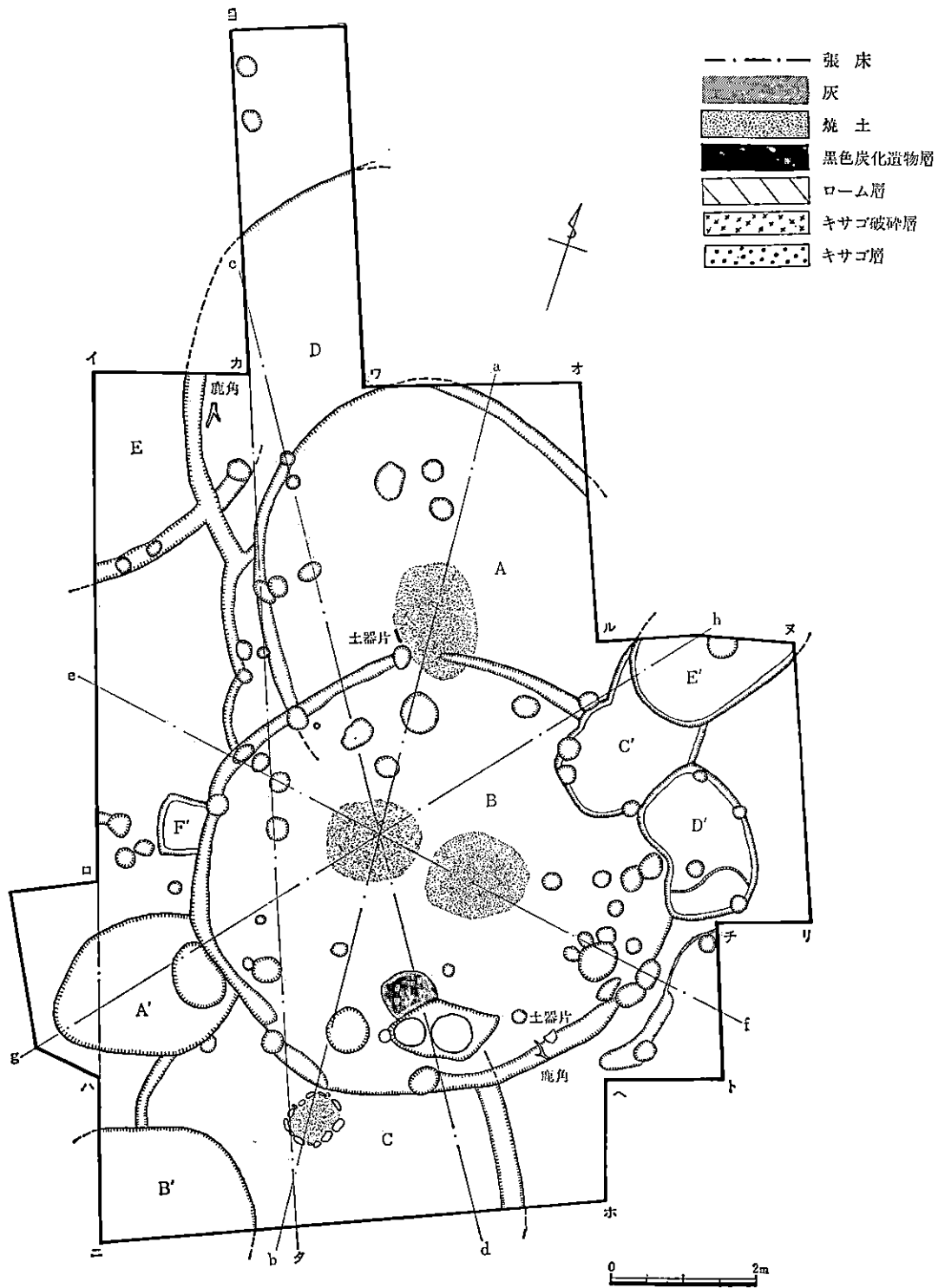


Fig. 6 第1地点住居址群の平面図

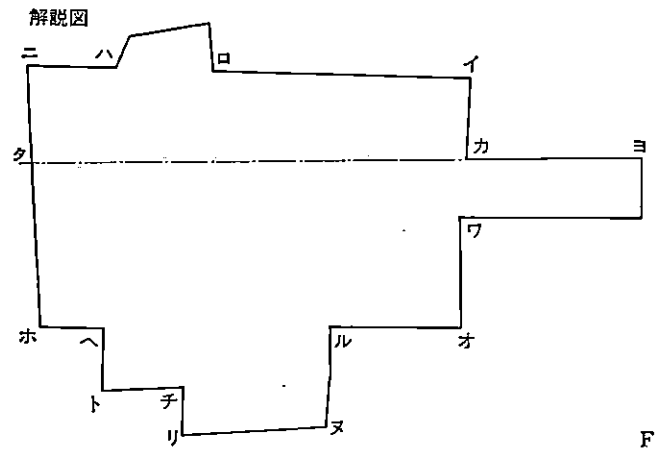
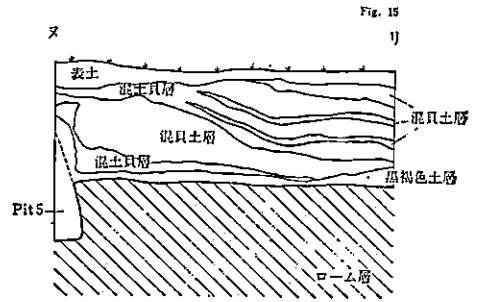
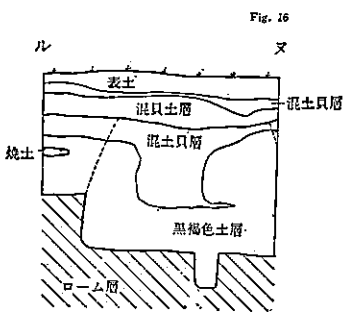
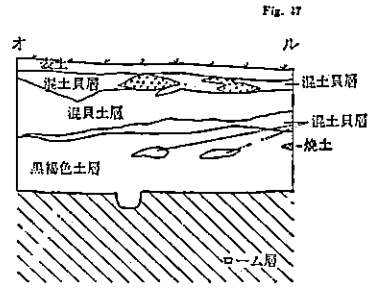
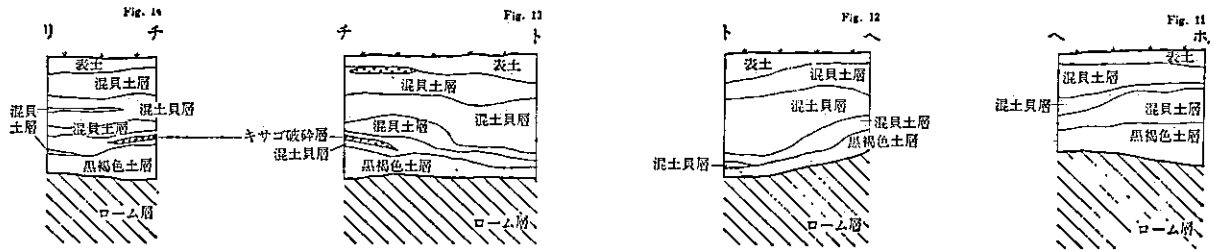


Fig. 11 ~ Fig. 17 第1地点調査区の断面図

は、恐らく西側から東側に向ってゆるやかに傾斜している自然地形があったものと推定される。従って本住居の床上の壁面は西側を高くし、東側を低くすることが出来、これによって、防寒と日当りが良く、通風と排水に便利であったことと思う。

II 住居址

本地点で発掘し得た住居址はA・B・C・D・Eの計5箇の竪穴式のもので、これらは、いずれもその床面が互いに部分的に重複した状態で発見された。このうち完掘したものはB住居址だけである。A・C住居址は全形のほぼ4分の3程度、D・E住居址は部分的な発掘にとどまった。

A住居址

表土下 1.55m のところにほぼ水平な床面をもち、周溝の状況からして不整円形を呈しているものと判断される。炉は床面の中央よりやや西寄りにある。

炉は床面を約 50cm 前後掘り凹めたもので、称名寺式土器破片一個を炉側に残存し、形状は不整楕円形で 1.6m×1.12m である。炉の中心より西壁までは 2.2m、北壁までは 3.1m である。炉の南端部はB住居址の床面上に張り出していることと、本住居址の床面とB住居址の床面とが重複している部分においては、本住居址の床面がB住居址の床面上に約 5cm 前後の盛り土を施し、いわゆる張床の状態をなしていることから、本住居址はB住居址が廃棄された後に構築されたことを示している。

B住居址

地表下 1.6m のところに周溝を有する床面を構築しているもので、西側の壁高は 60cm 前後、東側のそれは 20cm 程度である (Fig. 20 (c—d))。

東北側の床面はビット C'・ビット D'によって半円形に切断されているが、これは本住居址が廃棄された後になされたものであるから、元の床面の平面プランを再現行すると楕円形を呈していたものと認められる。

床面の長径 6.4m、短径 5.75m、炉は 2 箇あって 1 つは床面中央より西北寄り、他は中央部よりやや東寄りに

ある。前者を a 炉、後者を b 炉とする。いずれも不整円形を呈し、a 炉は 1.3m×1.15m、b 炉は 1.4m×1.2m で、これらの炉の中から発見された少量の土器破片と西南側の周溝中に鹿角と伴出した土器底部破片とはいずれも加曾利 E II 式に属するものである。なお床面の中央より南側に深さ 20cm、径 70cm の不整円形を呈する浅い凹みがあって、内部に灰白色の灰が充満していた。

上述の如く本住居址の床面には 2 箇の炉があるが、これらは同時に構築された遺構ではなく、一方が使用されていた時期には他はまだ存在していなかったであろうと思われる。一般に中期以降の竪穴住居址の炉の位置は、床面中央部より北乃至北西寄り、又は北東側に偏在する傾向がある。これを本住居址の床面の平面プランに当てはめて観察すると、b 炉よりも a 炉の位置が妥当である。

そこで a 炉を中心とした床面よりも早い時期に b 炉を中心とした床面があった。それを少なくとも一回以上改築あるいは増築したものと考えることが可能である。

本住居址の柱穴の状況を見ると、P'1・P'2・P'3・P'4・P'5・P'6 は、その内部からロームブロック混入の土壌が検出されたのに対して、他の柱穴のうち本住居址に伴うものと判断される深い柱穴には黒褐色土壌のみが充満していた。また床面東側周溝の外側に古い周溝の一部とも見られるものが遺存すること、本住居址の床面の硬さは西側において最も顕著であることなどを考慮に入れると、最初に建てられた住居の柱穴は P'1～P'6 であって、この住居に使用されたものが b 炉であろう。この住居の床面の範囲は Fig. 18 に示す如きもので、5.85m×5.35m 内外であったであろう。

その後の増改築に際して P'1～P'6 は埋められ、新たに P'1～P'7 の柱穴が掘られ、東隅の床面は廃棄された代りに西側の床面は拡張され、a 炉を中心とする住居が建てられたものと考察される。

C住居址

本住居址の南半分は未発掘であるが、発掘した部分の周溝の状態から推定すると、床面の形はほぼ円形に近いものであったろう。

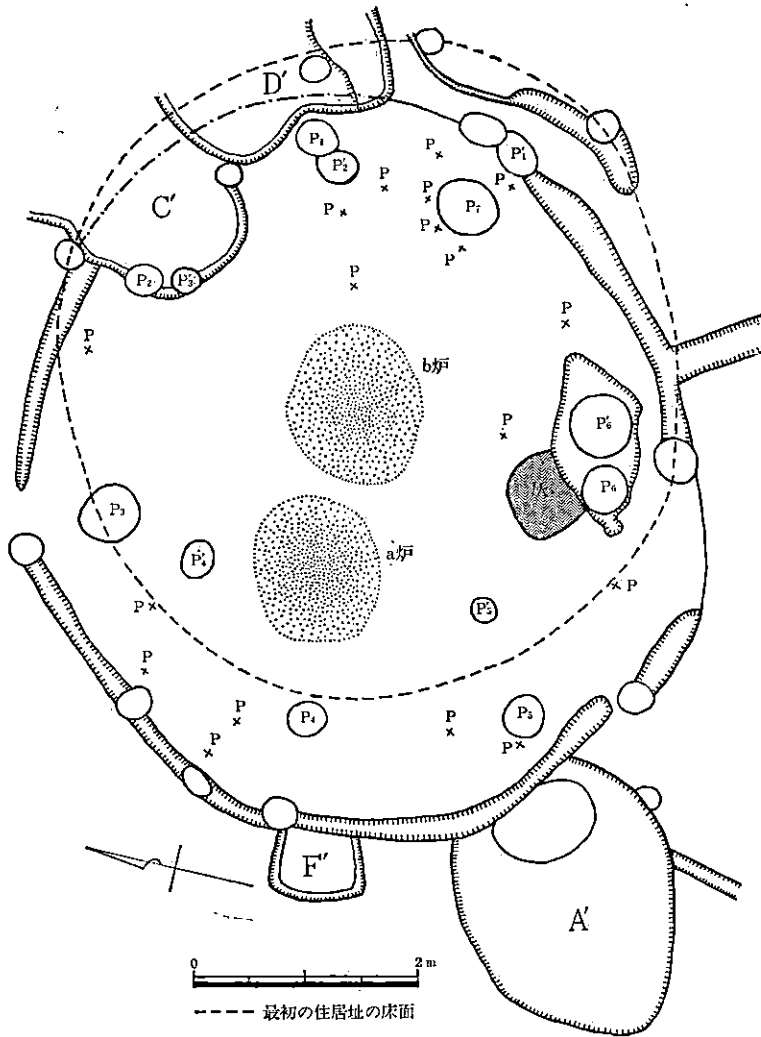


Fig. 18 第1地点B住居址の平面図

発掘された床面を見ると、西側は大形ピット A'・B' によって弧状に切断され、北側はB住居址の床面より約 10 cm ほど高く土壌を盛りあげ、その上に張床を施してあった。従って本住居址はB住居址よりも新しく、ピット A'・B' よりも古いことが判明する。地表面よりの深さは 1.5 m である。

炉は中央よりこれもまた西北寄りにあり、粗粒質砂岩 25 箇をもって構築する。このうちイ・ロ・ハの三箇は石皿の破片である。炉の構造は床面を長径 55 cm、短径 47 cm、深さ約 25 cm に掘りくぼめ、その外周に前記砂岩

を不整形に圍繞させている。

床面一帯は焼土と炭化物によって充満され、いわゆる黒色炭化遺物層となり、その最も厚い部分は 20 cm にも達し、この中に包含される遺物はすべて火熱のあとをとどめていた。特に花崗岩製石皿の大形破片や花崗質砂岩の異形石棒?にその影響は最も顕著に示されているほか、釣手土器の原形が著しく変容して発見されたことも、あるいは本住居の火災に原因が求められるかもしれない。なお本住居址に伴う土器は堀之内 I 式である。

D・E住居址



Fig. 19 第1地点B住居址
床面より発見された石皿

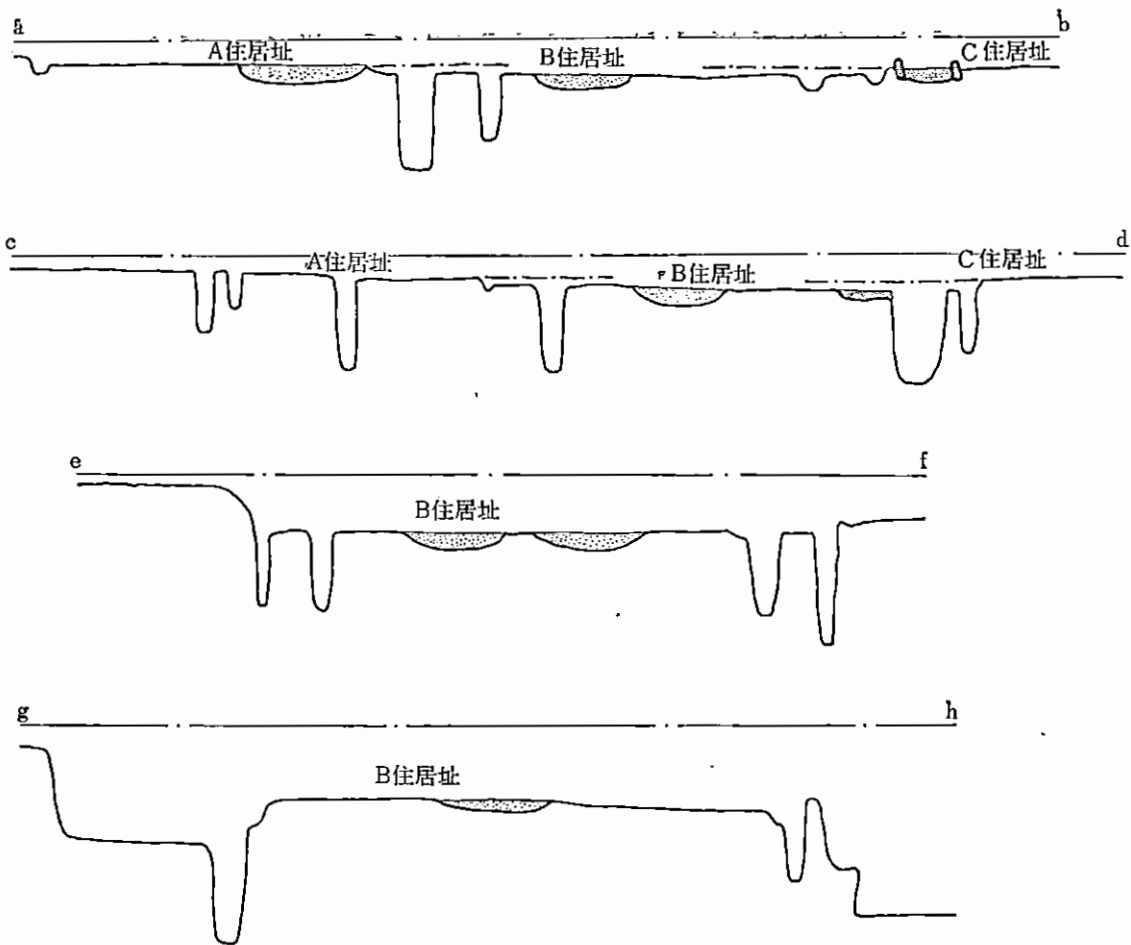


Fig. 20 第1地点B住居址の断面図



Fig. 21 第1地点B住居址の周溝より発見された鹿角

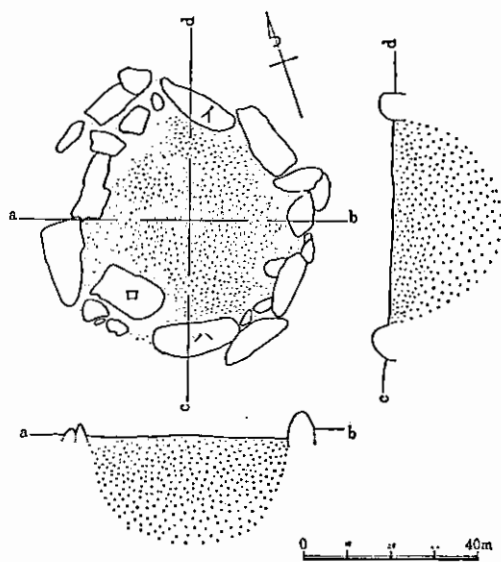


Fig. 22 第1地点C住居址の炉の実測図
(イロハは石皿破片)

D住居址は地表面下1.45m、E住居址は1.2mのところを床面とする。D住居址の床面の南側の部分はA住居址の床面の北側の上に、10cm 前後の盛り土を施して作った張床であり、E住居址の床面の東側の部分はD住居址の床面の西側の上に25cm 前後の盛り土を施した張床であるところから、この3箇の住居址の先後関係は、Aが最も古くD・Eの順序で新しくなることが判明したが、D・Eは局部的な発掘にとどまり、これらの住居址に伴う人工遺物としては、僅かにD住居址の床面上にあった鹿角の一端を切断したもの1箇にすぎなかったため、それらの住居址の編年的位置を決定することは困難である。

以上の所見に基づいて上記5箇の住居址の先後関係を整理すると、B→A→D→E、B→A→Cとなるが、CとD及びCとEとの先後関係は判明しない。

Ⅲ 大形ピット

本地点発見の大形ピットはA'・B'・C'・D'・E'・F'の6箇である。

A'ピット

B住居址の西南隅に接触して発見された遺構で、長径2.35m、短径1.9mにおよぶ不整楕円形を呈し、殆んど垂直に掘り下げる。深さは地表面下175cm、その床面は平坦で、比較的柔らかく、踏み固められた痕跡はない(Fig. 23)。この部分には10数本の魚骨と鹿角製大形釣針1箇が発見された。またこの床面の東北隅に長径88cm、短径65cm、床面からの深さ107cmに達する不整円形の大きな穴が垂直にうがたれ、この穴の中間よりやや上部(床面下48cm)に、厚さ2~3cmのごく薄い灰白色の炭化物質が被膜のようにかぶさっていた。

以上のような状況から、このピットの使用目的は或種の食糧用物質を一時的に貯蔵するために考案された遺構と推定した。なおその保存食糧の中に若干の魚類が含まれていたことは確かであろう。

B'ピット

C住居址の西側に発見され、この住居址の床面の一部

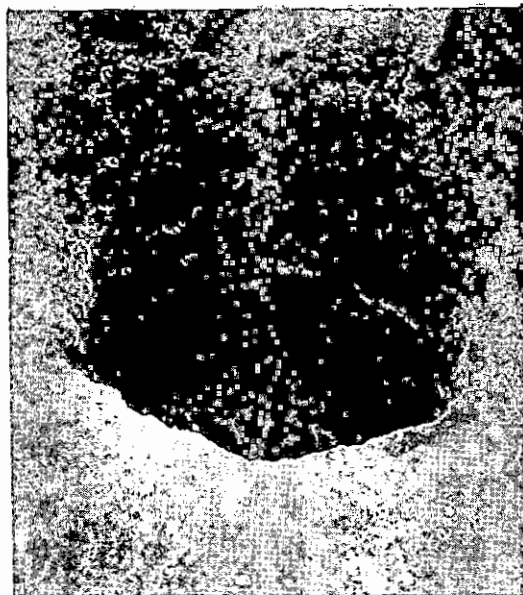


Fig. 23 第1地点A'ピット

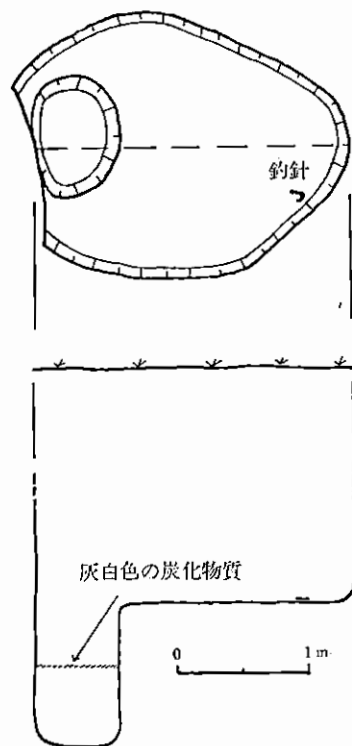


Fig. 24 第1地点A'ピットの実測図



Fig. 25 第1地点D'ピット



Fig. 27 第1地点E'ピット

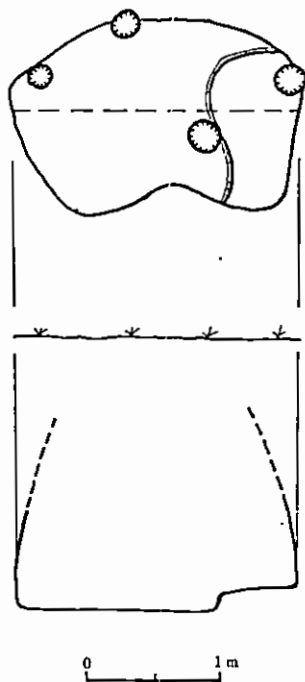


Fig. 26 第1地点D'ピットの実測図

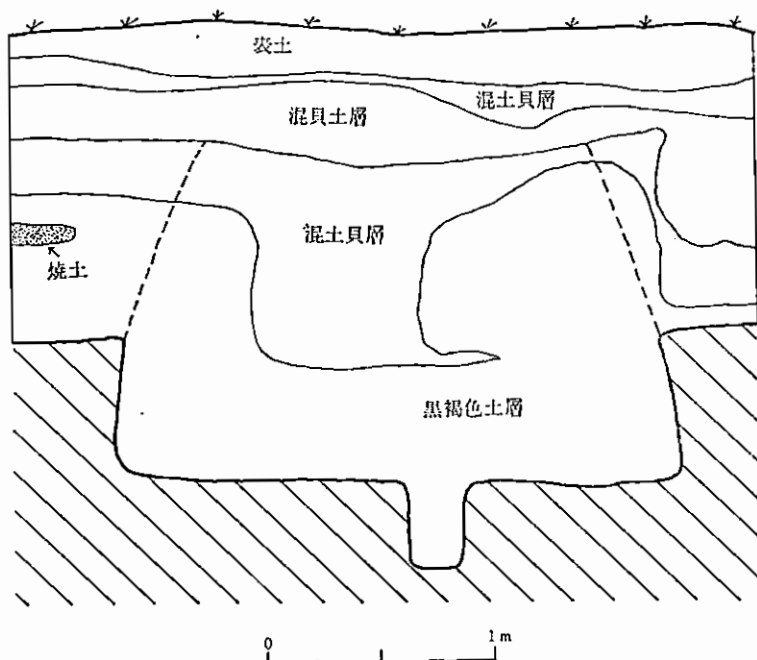


Fig. 28 第1地点E'ピットの実測図

を弧状に切断して構築した遺構である。このピットの発掘は全形のはほぼ4分の1程度であったために、その形状は推測の範囲にとどまるが、断面図イ～ロ～ニ・ニ～タ～ホをつなぎ合わせることによって大凡のことは判断される。地表下165cmのところに柔らかく平坦な床面を有し、壁面は内側に傾斜し、深さは102cm前後で、三角フラスコ型(截頂円錐形)を呈していたものであろう。

C'・D'・E'ピット

これら3箇のピットはB住居址の東側に発見された。

C'ピットは3箇の中では最も浅く、地表下187cm。B住居址の床面の一部を切断して構築され、東南側はD'ピットによって、また東北側はE'ピットによっていずれも切断されているところから、C'ピットはこれら3箇のピットのうちでは最も古いものであることが判る。実測図によって床面の原形を推定すれば、ほぼ楕円形と隅丸方形の中間に近い形状であったろう。このピットの旧状をのこしている壁面の部分を観察すると、B'ピットの場合と同様に内側に傾斜する。なおこのピットをめぐる周囲の壁面に4箇の柱穴が点在するが、D'ピットに接する地点にある柱穴だけが内側に傾斜しておるのに、他の3箇は垂直に掘り下げられている状況から判断して、後の3本はこのピットに関係なく、B住居址に伴う柱穴であるように思われる。

D'ピット(Fig. 25)の床面の一部はB住居址の床面を弧状に切断して構築したものである。床面の長径207cm短径120cm、ゆがんだ隅丸方形を呈し、壁面に3箇の小柱穴をほぼ等間隔に配置し、床面の一隅にも1箇の柱穴が認められる。床面は二段に分れ、上段は地表面下182cmで比較的狭く、下段は地表面下203cmに及び、このピットの主要床面を構成する。両者の床面はともに柔らかく、踏み固められた痕跡は認められない。また周囲の壁面は内側に傾斜する。さらに上述の壁面にある三箇の柱穴も壁面に添って内側に傾斜しているところから、このピットに伴うものと認められるが、下段床面の一隅にある柱穴は垂直にうがたれ、このピットに伴うものか、B住居址に伴うものかの判断は保留せざるを得ない。

E'ピットは全体の2分の1弱を発掘したにとどまる関係から、床面の原形を判断し得ないが、実測図(Fig. 6)によると隅丸方形に近いものようである。周壁の状態はB'・C'・D'と同様に内側に向かって傾斜している。ただこのピットの床面のほぼ中央と推定される所に、一箇の比較的大きな円形の穴があった。径30cm、床面からの深さは40cmである。なお地表面からこのピットの柔らかい床面までの深さは195cmに達する。このピットの立体的構造を判断する資料はFig. 27, 28である。これらによると、このピットの上部に示される混土具層は甚だしい落ち込みを見せているが、その上部にある混土具層はわずかの落ち込みを示すにすぎない。従ってこのピットが構築された時期は、混土具層終了の頃、すなわちその下の混土具層成立の直前であって、その形状は截頂円錐形をなし、ピットの深さは150cm内外、截頂部の直径は140cm前後、床面の最大幅は240cm程度で、床面の中央より東寄りに1本の太い柱が立っていたものと推定される。

F'ピット

B住居址の西隅にある周溝の外側に接して存在する小形のもので、方形を呈し、南北85cm、東西68cm、深さ35cmである。このピットの使用目的は不明である。

武田宗久

註1 桜木町という地名は昭和11年加曾利町の一部と都町の一部が合併して出来た町名で、加曾利貝塚が初めて学会に発表された明治20年代にあっては、本貝塚は加曾利町の中に含まれていた。

第2節 第2地点の状態

I 発掘の経過

今回の発掘調査における第2地点とは、前述の第1地点の南方約20mの、高圧送電塔の南東約10mの所における調査溝を指している。

第1地点の調査に併行して環状に堆積する貝層の縦断面を観察する目的をもって、東西方向に巾1.5m、長さ10mのトレンチを設定した。(但し、このトレンチでは人骨群に遭遇し、その収容に当たったため当初の目的を達成することはできなかった。)

発掘は、長さ10mのトレンチを5mごとの2区に分ち、西半部を1区、東半部を2区として調査を実施した。

表土下の層序は一様ではなく、所によって褐色土層、混土貝層、純貝層とまばらな分布を示している。その1区の南壁ぎわに、混土貝層の中に人間の頭蓋骨(1号人骨)を発見したため、この1区を中にはきんで、南側に

巾2m、長さ4m(第3区)、北側にやはり巾2m、長さ5m(第4区)の拡張区を設けたが、人員、日程の都合から2区での作業を中止し、1区および3・4区の作業に集中して人骨の収容にあたり、5体の人骨を発掘、収容した。

この人骨群の発見された所は、地表下約40cm程の所であるが、厚く灰の堆積した炉址が同一水平面上にあることなどから住居址内と判断されたが、さらにその下層に貝層の存することがボーリングによって判明したが、さし迫った日程の中で、やむをえず範囲をさらに縮小して1区の西半部の発掘をすすめた結果、約1mの混土貝層の下にローム層を掘り込んで築かれた住居址の床面を発見して発掘を終了した。

II 層序

(イ) 第2地点貝層断面図 Fig. 29 a (第4区北壁、上層住居址床上まで)

第1層 表土層(厚さ約10cm)

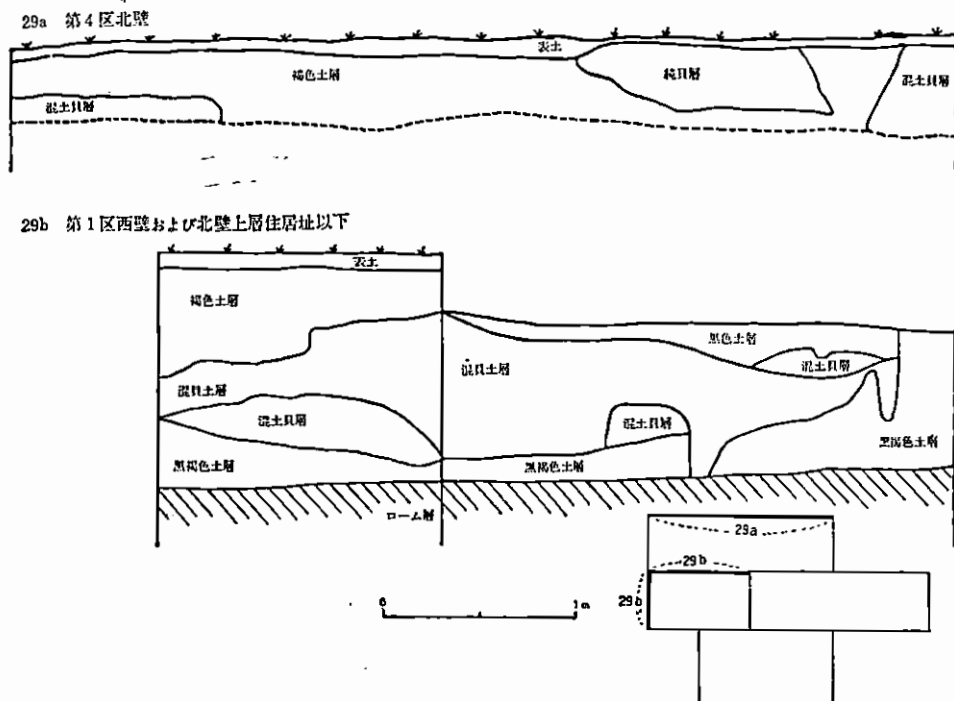


Fig. 29 第2地点調査区の断面図

第2層 褐色土層 (厚さ約 35 cm)

部分的に混土貝層、および純貝層を含む土層である。本地点における居住が終了した後に堆積したものと見ることができ、この層の下端に加曾利B式期の住居址が位置する。その住居址上の人骨を覆うように混土貝層が堆積していた。加曾利B式土器を出土した。

(e) 第2地点貝層断面図 Fig. 29 b (第1区西壁、および北壁上層住居址以下)

第3層 黒色土層 (厚さ約 10 cm)

上層住居址の床を形成する土層である。貝類、遺物などをほとんど含んでいない。西壁には見られなかった。

第4層 混土貝層 (厚さ 20~80 cm)

厚さの変化がはげしく、最厚部では 80 cm を数える箇所もあるが、東端までは伸びていない。この層の下端の線をたどると、あたかも住居址の断面に似通って見ることが出来る。この層の中に、厚さ 20~40 cm を数える混土貝層がブロック状、レンズ状に分布し、断面図にも 3 箇所を見ることが出来る。貝類は、アサリ、ハマグリ、シオフキ、キサゴ、カガミガイ、マテガイなどが見られたが、いずれも小型のものが多く、ヤマトシジミの比率の高いことが注目される。ほかに、イタヤガイの右殻が 1 枚とオオノガイ、カキ、ツメタガイなどが検出された。出土遺物のほとんどはこの層中より発見された。土器は加曾利E I 式に属するものを出土した。ほかに土器片を利用した土錘 2 個、アカシの貝輪の未製品破片 1 個な

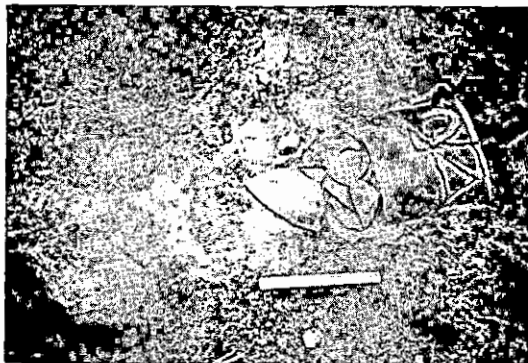


Fig. 30 第2地点第5層上面から発見された土器および灰塊

どが発見された。獣骨は少量で、ほとんどがシカ、イノシシであった。

第5層 黒褐色土層 (厚さ 10~70 cm)

下層住居址を直接覆う土層である。やはり厚さの変化が大きい。もっとも薄い所はトレンチの北西隅で厚さ約 10 cm である。住居址の床面を直接覆う土層は、往々にして住居址の中央部に当たる部分が薄くなっている例が見られるので、このあたりが下層住居址の中央部と思われる。この土層の中には、部分的に上の混土貝層が落ち込んでおり、あるものは下層住居址の床を 10 cm もえぐっているものもある。これらのことから見て、この土層の堆積した直後に、この上で何らかの作業が行なわれた形跡を認めることができる。

この土層の上面に復原可能な土器 1 個 (PL. 28, Fig. 33—2) と灰の堆積などを発見している (Fig. 30) が、この土層の中からの遺物の発見は、下層住居址の床に密着したものの他は全く無かった。

Ⅲ 住居址

第2地点で発見された住居址は 2 個である。

(i) 上層住居址 (PL. 5 Fig. 42)

地表下、約 40 cm の所に発見された。5 体の人骨を残していた住居址である。貝層の上に菅なまれ、張り床をしてあるが、用土が黒色土であるため、平面形の形状、柱穴などを確認することができなかった。これを住居址と判断した根拠は、PL. 21, Fig. 42 に見られるように、直径約 60 cm の灰、焼土の堆積 (第1炉址) と、長径約 90 cm、短径約 60 cm の焼土の分布 (第2炉址) とがあり、ことに、第1炉址は、灰の堆積も多く、中央部では厚さ約 40 cm を数えるレンズ状に堆積しており、その下の土も赤く焼けているなど、明らかに炉址と認めることのできる状態を呈していたことである。この炉址の灰の堆積の北側に土器片 (加曾利B II 式土器のもの) が数片あてられていた。

さらに、第1炉址と第2炉址とでは、第2炉址の方が古く、第1炉址が使用されている間にこの住居址が廃棄

されたと考えることができる。

この上層住居址が営まれていた時期は、これを覆う混土貝層中の土器、および第1炉址の北側にあてられていた土器片などにより、加曾利B式の時期と判定することができる。

(2) 下層住居址 (PL. 6, Fig. 31)

トレンチの最下部、ローム層を掘り込んで営まれた住居と考えられる。地表下約125cmの所に、非常に固いローム土の床を残している。発掘した範囲が狭いため、全体の平面形の形状、壁高などを確認できなかった。遺構として発見されたのは炉址1個とピットが大小5個である。

ピットは、直径約10cm、深さ約70cmのもの (Fig. 31 "b") と、直径約30cm、深さ約100cmのもの (Fig. 31 "c") の2個と、他の深さ4~12cmのものに分けることができる。この中、前の2個のピット (Fig. 31 "b", "c") が、本住居址の柱穴と考えられた。双方共垂

直に掘り込まれている。他はいずれも浅く、ことにその中の2個は、住居址の床を覆う黒褐色土層の上から掘り込んだものであることが確認できた。

炉址 (PL. 22, Fig. 31 "a", Fig. 33-4) は、口縁直径37cmの加曾利E I式の所謂キャリバー型の甕の口頸部を口縁より16cmの所で切断したものを10cm余り埋め込み、口縁を床面上に出した形で作られていた。炉址の中は、灰と焼土が充満していた。

この住居址の営まれた時期は、炉址に使用されていた土器によって、加曾利E I式の時期と判定することができる。また、出土遺物は、上記の炉の土器の他には、柱穴 "c" の縁にかかって発見された打製石斧の未成品様の石製品 "d" 1個のみである。

なお、この住居址を覆う黒褐色土層の上において、何らかの作業が行なわれたらしい形跡を認めたが、居住の跡とする積極的な根拠はつかめなかった。

穴倉昭一郎

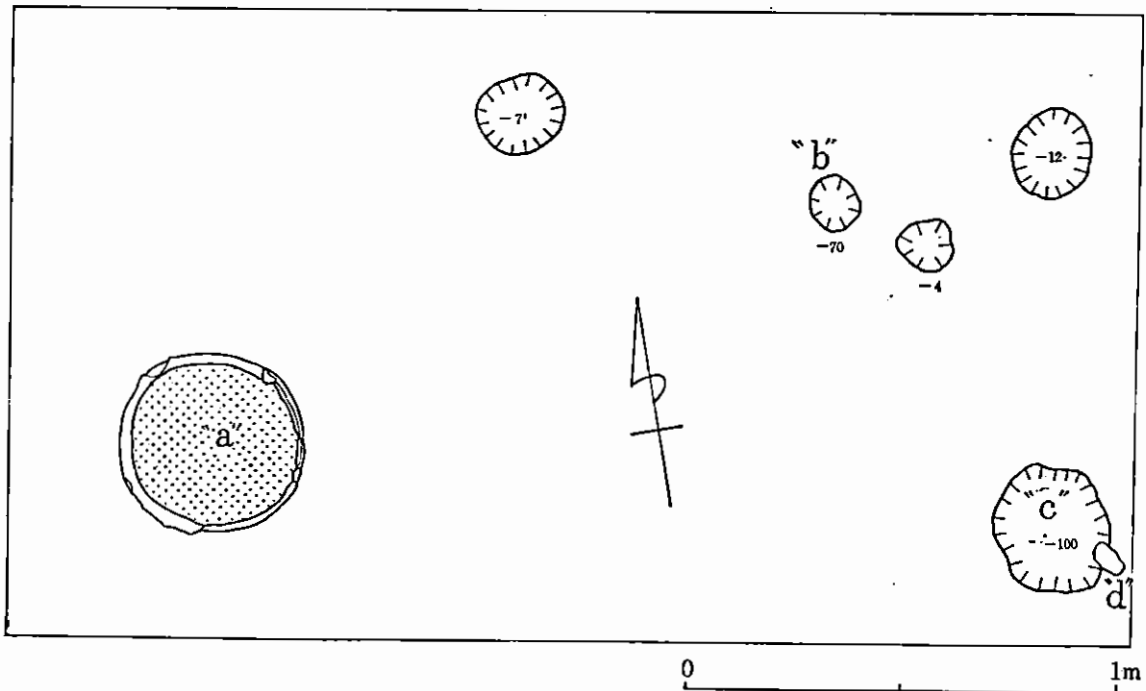


Fig. 31 第2地点下層住居址の平面図

第5章 遺物の概要

第1節 人工遺物

第1地点

I 土器

第一地点より出土した土器は、その破片を含めるとかなり多量にのぼっている。それらの土器は、各々の住居址と直接の関係を有するものと、そうでないものがある。

前者は量的に極めて少ないが、上記遺構の編年を決定する基本資料として貴重なものであり、後者はこれらの遺構以外の各層から出土したもので、加曾利北貝塚が成立した時点より現在に至るまでの生活の年輪を推考するうえで、重要な役割をはたすであろう。先ず前者について述べることにする。

A住居址に伴う土器 (Fig. 35—19)

本住居址の炉の西隅に口縁部を上にして突きささっていた土器片である。

粒子の細かい良質の粘土によって作られ、赤褐色を呈する。これは恐らく焼成当初の色ではなく、炉の側壁にあった関係から火熱を受けて変色したものであろう。口縁がやや厚い深鉢形土器の破片で、あらい縄文を地文とし、縦方向の太い沈線があり、文様以外の空間はいわゆる磨消縄文となっている。称名寺式に該当する。

B住居址に伴う土器 (Fig. 34—11, 12, 13, 14)

本住居址のa炉の中に充満した焼土中から検出した3箇の破片と、住居址の東南側周溝の中に遺存した1箇の土器底部破片で、前者の Fig. 34—11は赤褐色、Fig. 34—12、13は灰黒色を呈する。

いずれも粒子のあらい粘土を使用する。Fig. 34—11は縦方向の太い燃糸文を地文とし、これを横方向の太い沈線文で囲む。Fig. 34—12と13は同じ土器の破片とみられ、いずれも太い横方向の沈線文と円形点列文を施す。

14は深鉢形土器の底部で、あらい縄文と縦方向の紐状沈線文がある。以上4箇は加曾利BⅡ式に該当する。

C住居址に伴う土器

本住居址は前章に述べた如く、火災によって焼失後廃棄されたものと考えられ、その際の火熱を受けた土器・石器類が床上に散乱していたが、土器については、その凡てを記載する繁をさける意味で完形を保つもの1箇と、やや完形にちかひのもの1箇についてのみ述べることにする。

前者は良質の細かい粘土によって整形された懸垂用の壺形土器で、胴部の両側に、紐を通すための把手が印籠式に2箇ずつ計4箇あり、口縁にちかひ部分の両側と前後にそれぞれ1箇所計4箇の小孔をうがう。文様は胴部につけられ、平行沈線文と連続うずまき文を交互に組合せる。また胴部以外の器壁には磨消の手法が用いられている。(Fig. 32—4, PL. 31)

後者は前記の土器と同様良質の粘土によって作られた深鉢形土器で、前者と同様赤褐色を呈し、器面調整もすぐれている。口縁部に4箇の把手があり、文様はこの把手によって区切られる縦方向の細長い数条の沈線が一つの文様区切面を構成し、四面に平行曲線文を幾何学的に組合せる部分が多く、渦巻文も一部についている。(Fig. 32—2, PL. 32)

以上の2箇はともに堀之内Ⅰ式に属する精製土器である。

住居址以外の土器

現在の地表面からローム面に達する深さは70cmから195cmの間を上下し、住居址や大形ピットのある部分では特に深かった。そしてこの間に多数の混土貝層や混貝土層が介入して複雑な様相を呈する部分が多かったので、明確にどの層に伴う土器であるかを判断しにくい場合もあったが、大別してローム面を直接に覆う貝層下土

層中の土器、その上の貝層中の土器、最上部の表土層中の土器に分けることが出来る。

貝層下土層即ち本地点では黒褐色土層乃至暗褐色土層の下部からは、Fig. 34—1~8 に示すような土器片が往出土した。これらのうち 1~5 は雲母粒が混入する中厚手で固く焼かれたものが多く、黒褐色乃至赤褐色を呈する。半截竹管による弧線文、連続刺突文、鋸歯状文、縦方向の隆起線に刻み目をつけたもの等が阿玉台式の特徴を示す。6~8 は粒子のあらい粘土を用い、中厚手で黄褐色、赤褐色、黒褐色を呈する。あらい縄文が発達し、隆起線の渦巻文が口頸部から胴部にかけて施されるものが多く、大形浅鉢土器や深鉢土器であって、加曾利E I式に該当する。なお (Fig. 32—1, PL. 26) は今回の発掘品ではないが、本貝塚から昭和4年に出土した上記の型式に属する遺物で参考品として紹介する。

貝層下土層の主体をなす土器は Fig. 34—9~18 で、粒子、焼成、厚さ、土器の色は 6~8 と同じであるが、あらい縄文に沈線文が縦又は横、或いは、斜めに走るものが多く、隆起線はあまり見られない。また磨消縄文 (11・14)、櫛状器具による縦方向の平行沈線 (15・16)、無文土器などもある。無文土器は大形の浅鉢に多く、器面の内外に赤色顔料を施したもの (18) もある。加曾利E II式に属するものと認められる。

混土貝層・混貝土層などの貝層中の土器は、今回の発掘品中最も多量に発見され、大形破片や完形又はそれにちかいものもあった。(Fig. 35—20~32, Fig. 32—2~8, PL. 31~37)

粒子のあらい粘土を使用したものと、良質の粘土を用いたものとに分けられ、前者はあらい縄文又は縄文に竹篋ようのもので平行直線・曲線、S字状連続文、波状文などの沈線を大まかに施したものが多く、後者は細い縄文又は磨消縄文に平行沈線、渦巻文、幾何学的曲線文が丁寧に施される。前者の器形は深鉢形、甕形のものが多く、後者には壺形、皿形、注口形のものもあった。両者とも口縁に環状、山形等の小把手が2~4箇所につき場合があるが、粗製大形の深鉢形土器では把手を欠き、口

縁の表面が一直線となる (Fig. 32—6・7, PL. 37・36)。色は赤褐色、褐色、黄褐色、黒褐色のものが普通であるが、Fig. 35—21 は灰黒色である。以上は堀之内I式期の所産と考えられる。なおこの種の土器は貝層下の土層中にも若干混入していたが、それらは貝層形成の過程に於て、その下の土層中に落ちこんだものであろう。

表土層にも少量の土器破片が混入していた (Fig. 35—33~36)。これらはいずれも粒子の細かい粘土を使用し、焼成は良好で黒褐色を呈する。縄文を地文とし篋状の工具で曲線又は格子状の沈線を施すもの、口縁部に横一本の隆起線を紐状にあらわし、これに指頭圧痕を点列させるものなどがあり、加曾利B式の特徴を示す。この種のものは貝層中には見られなかったので、おそらく本地点以外の場所から後世に及んで混入されたものと思われる。

II 土製品 (Fig. 37—1~14, Fig. 40—1)

土器以外の土製品としては土錘14箇と耳飾1箇がある。土錘を型的に分類すると、緊縛式のもの13箇 (Fig. 37—1~9, 11~14)、有孔式のもの1箇 (Fig. 37—10) となる。

緊縛式のものとは長方形又は楕円形の土器片を使用し、その長い方の両端に打缺痕を有する。このうちあらい縄文のみのもの6箇、あらい縄文に横文向の平行沈線を施すもの1箇、平行沈線のみのも1箇、無文のもの3箇、半截竹管による連続刺突文を施し、胎土に雲母粒を混入する阿玉台式の文様を有するもの (Fig. 37—1) 1箇である。なお Fig. 37—7 はB住居址の柱穴の中から出土した。加曾利E II式に伴うものであろう。

有孔式のもの (Fig. 37—10) は、楕円形管状の土製品で、長い部分の中央に径5mm前後の円形の孔を貫通させたものであるが、遺物は半分に割れている。表土層からの出土品で加曾利B式に伴うものであろう。

以上の土錘の用途は漁網の附属品とみる可能性が強いが、緊縛式のものとは縄物の錘であったかもしれない。

耳飾はいわゆる滑車形のもので、漏斗状のくぼみが対称的な位置につけられ、小孔があって、赤色顔料を全面に塗る。貝層中から出土した。(Fig. 40—1, PL. 40—1)

Ⅲ 石製品

石製品の総数28箇、内訳は打製11箇、磨製17箇である。

これを名称別に分類すると、打製石斧 5、磨製石斧 2、打製石鏃 6、浮子 1、石皿 4、凹石 1、敲石 5、石棒 2、不明2となる。

さらに記述の便宜上、これらを広義の用途別に分類して、打製・磨製石斧計7箇を一般労働用具、打製石鏃6箇を狩猟用具、浮子1箇を漁撈用具、石皿・凹石・敲石計10箇を厨房用具、石棒2箇を宗教用具とし、不明品2箇については別に記載する。

一般労働用具

a 打製石斧 撥形のもの3箇、分銅形のもの1箇、形態不明のもの1箇である (Fig. 38—1~5, PL. 38—9~13)。

Fig. 38—1~3 は撥形で、1 は完形を保っている。基部より刃先の方が幅広くなっており、両刃である。器面の中央部に自然面を残し、縁辺部に加工痕がある。第1トレンチ南側貝層下部より出土、硬砂岩。Fig. 38—2, 3 はともに基部を欠くが、形態は1と同様とみてよいであろう。2は第2トレンチ貝層中より出土、石英斑岩。3は第1トレンチ黒褐色土層中より出土、黒雲母片岩。4は分銅形で一方の端部を欠く。中央部に自然面を残し打痕は縁辺に集中する。第2トレンチ第2拡張区の貝層中より出土、流紋岩。5は全形の半ばを欠くので形態は判らないけれども、端部の曲線から判断すると撥形のもののように思われる。第3トレンチ黒褐色土層より出土、中粒質砂岩。これらはみな土工具であろう。

b 磨製石斧 Fig. 40—2, 3, PL. 38—7, 6 とも蛇紋岩製の小形のもので、長方形を呈し、全面がよく研磨され光沢を有する。いわゆる定角式石斧に属するもので刃は蛤刃である。Fig. 40—3 は一端を欠く。いずれも第1トレンチ貝層下部より出土。

狩猟用具

打製石鏃6箇、いずれも無柄式で両面にこまかい打痕がある。Fig. 40—8 は三角形、9・7・5・6・4 は三角形の底辺をくぼませた形で、原材は6・9 は珪岩、8・7・5・4 は黒曜石である。8 は打痕が粗雑であるので未製

品かもしれない。

漁撈用具

軽石製の浮子1箇 (Fig. 38—10, PL. 38—25) は棒状の両端を円くした全面磨製のもので、一端に円形 (径5 mm) の小孔を有する。長さ10.3 cm、断面の最大径3.7 cm。一応漁網の浮子として記載するが、一般に貝塚からの出土量が多くないところから、大形釣針に伴う浮子又は銚などに付ける浮標とも考えられる。携帯用の砥石という説もなりたつが今は採らない。第3トレンチ貝層中出土。

厨房用具

Fig. 39—8・9・10・11 は石皿、6は凹石、3・2・4・1・5 は敲石である。11はC住居址の床面から発見された。本住居址は焼失した痕跡が顕著であったので、その際の火熱の影響を強くうけたためであろう、花崗岩の石質が化学変化してポロポロに崩壊する状況を呈していた。大形の石皿で原形の約二分の一弱をのこし、扁平楕円形の石塊の表裏になだらかなくぼみがつけられ、辺縁部に蜂窩状の小穴が点在する。

8・9・10・11はC住居址の床面に設けられた石囲炉の一部から検出した。9は絹雲母石墨片岩、10は粗粒質砂岩、8は安山岩で、いずれも火熱の影響をうけた痕跡がいちじるしい。9は小形の石皿で表面にのみくぼみがある。8・10・11は大形石皿の破片で、辺縁部に蜂窩状の小穴を伴っている。

6は凹石で細粒質砂岩の表面に蜂窩状のくぼみが2箇所につけられている。C住居址床上出土。

3・2・4・1・5は敲石、石質は順次に細粒質砂岩・玄武岩・安山岩・斑岩・巨晶花崗岩で、拳大の石の全面がよくみがかれ、断面はやや扁平で、表と裏に浅いくぼみがある。形は不整形円形~楕円形~長楕円である。5は両端を欠失する。いずれも貝層中から出土した。

宗教用具

Fig. 38—11, PL. 39—4 は全長23 cm、最大幅7.4 cm、断面は楕円形で長軸の一端がくびれている。類品がないので断定は出来ないが異形の石棒であろう、花崗質砂岩。C住居址の床面上にあり、火熱の影響をうけて3つに分

解して発見された。Fig. 38—12 もC住居址の床面上から出土した。扁平棒状の石塊で両端を欠失しているが、形状から推定して石棒の破片であろう。表面に蜂窩状のくぼみが点在する、緑泥片岩。

その他

Fig. 39—7, PL. 39—6 はC住居址の床面上に発見された、細粒質砂岩。不整梯形で表面に浅いくぼみがある、

砥石か石皿の一部であろう。Fig. 38—9, PL. 38—14 は第2トレンチ第1拡張区の貝層中の出土品で、細長い自然石の一端部にくぼみを刻む。用途は不明である。花崗質砂岩。

以上に記載した石製品類と第2地点出土の石器を便宜上、一括表示すると下表のごとくである。

表 1 第1・第2地点出土の石器一覧表

Fig. No.	名 称	出 土 地 点	石 質	重 量	備 考
38—1	打 製 石 斧	第1地点 貝 層	硬 砂 岩	100	完 形
38—2	" "	" "	石 英 斑 岩		基 部 欠
38—3	" "	" 黒褐色土層	黒 雲 母 片 岩		基 部 欠
38—4	" "	" 貝 層	流 紋 岩		端 部 欠
38—5	" "	" 黒褐色土層	中 粒 質 砂 岩		基 部 欠
40—2	磨 製 石 斧	" 貝 層	蛇 紋 岩		端 部 欠
40—3	" "	" "	蛇 紋 岩		端 部 欠
40—9	打 製 石 鏃	" "	硅 岩	1.0	完 形
40—8	" "	" "	黒 曜 石		未 製 品 ?
40—5	" "	" "	"	0.6	完 形
40—4	" "	" "	"	1.0	"
40—6	" "	" "	硅 岩	1.4	"
40—7	" "	" "	黒 曜 石		先 端 部 欠
38—10	浮 子	" "	軽 石	15	"
39—11	石 皿	" C住居址床上	花 崗 岩		半 欠
39—9	" "	" C住居址石囲炉	絹雲母石墨片岩	320	完 形
39—10	" "	" "	粗 粒 質 砂 岩		破 片
39—8	" "	" "	安 山 岩		"
39—6	凹 石	" C住居址床上	細 粒 質 砂 岩		"
39—3	敲 石	" 貝 層	"	385	完 形
39—2	" "	" "	玄 武 岩	355	"
39—4	" "	" "	安 山 岩	494	"
39—1	" "	" "	斑 礫 岩	415	"
39—5	" "	" "	巨 晶 花 崗 岩		両 端 欠
38—11	異 形 石 棒	" C住居址床上	花 崗 質 砂 岩	963	ほ ぼ 完 形
38—12	石 棒 ?	" "	緑 泥 片 岩		両 端 欠
39—7	砥 石 ?	" 貝 層	細 粒 質 砂 岩	360	完 形 ?
38—9	不 明	" "	花 崗 質 砂 岩	58	完 形
38—7	打 製 石 斧	第2地点 褐色土層	黒 雲 母 片 岩		基 部 欠
38—6	石 斧 様 石 器	" 下層住居址床上	玄 武 岩		端 部 欠
38—8	不 明	" 上 層	石 墨 片 岩		端 部 欠

※重量は完形品のみ記載した。[重量単位：g]

※石質は埼玉大学新井重三教授が鑑定した。

Ⅳ 動物質製品(Fig. 40-10~20, PL. 40-2~6, 8~13)

Fig. 40—20 はペン先形を呈し中央部の横断面は扁平である、基部を欠く。鹿角製。長さ 4.4 cm、中央部の幅 0.9 cm、魚獲用のヤスであろう。19 は鹿角製の鎌で基部を欠く。長さ 4.2 cm。18 は猪牙製斧、刃部は鋭く尖っている。完形、長さ 4.6 cm。

17・16 は鹿角の一部を縦に半截したもので、両者とも一方の端部が斜めに磨り切られている。用途不明であるが、未製品かもしれない。

15 は鹿角の一部を縦に半截し、一方の先端を鋭く尖らしたもので、外側にそりを見せている。長さ 9.8 cm、基部の幅 2.3 cm、刃部の幅 0.2 cm。なお以上の 15~20 はいずれも貝層中から出土した。(Fig. 40)

14 は鹿角の股の部分半截して加工した大形の釣針で、基部に糸をくりつけろためのえぐりを施し、軸は内側に湾曲し、針先は外側に向っている。逆刺はない。長さ 5.5 cm。B 住居地の西側に所在した大形ピット (A'ピット) の床面に発見された。(Fig. 40)

13 は鹿角製髪飾 (ヘアーピン) の頭部の残片で、棒状を呈し、小孔が頭頂と横にあり、横むきの小孔の前後には各々 2 条の彫刻を施す。長さ 3.1 cm、頭頂断面の最大幅 1.3 cm。貝層下底より出土。(Fig. 40)

12 はマガキ製の貝輪、原形の 2 分ノ 1 強を残存する。大きなマガキの腹縁部を切りとって加工したものである。貝層中に発見された。(Fig. 40)

10 は大きなハマグリの腹縁に鋸歯状の刻み目をつけたもので、一種の貝器であろう。貝層中出土。

以上の外ハマグリの殻の内側に、赤色顔料が多量に残存するものがあつた。 武田宗久

第 2 地点

I 上層の遺物

第 2 地点は前章第 2 節で述べたように、発掘の結果上層の住居址と下層の住居址が発見された。

従つてこの二つの住居址は明瞭に新旧の差が認められるから、遺物の記載に際しては、両者を別にすることが必要である。それ故先ず表土層から上層の住居址までの遺物について述べ、次にそれ以下の層に含まれた遺物即ち下層の住居址までのものについて記することにした。

本地点の上層住居址までの層序は、地表面下約 10 cm 前後のうすい表土層と、その下の層とに分けられる。下の層は褐色土層の部分と混土貝層の部分と、少量の純貝層の部分とがあり、約 30~35 cm 程度であつた。

褐色土層の部分は本地点の中央部には無く、周囲に分布していた。人骨群は、その上部を混土貝層と少量の純貝層が被覆し、それらの下に住居址があつて、その床上に第 1 号、2 号、3 号、5 号があり、床上か又はそれに接近したところに 4 号が埋葬されていた。このうち 4 号以外の 4 体の人骨の埋葬状況は極めて異状なものであつた。

表土層からは何らの遺物も検出されなかつた。表土層下住居址までの遺物は Fig. 36—8~20 に示すようなもので、これらは加曾利 B 式に該当するものと考えられる。このうち住居址に伴う灰と焼土の充満した炉の側壁に突き刺さつていた 3 箇の土器片は、Fig. 36—18・19・20 であつて、本住居址の営まれた時期を決定する一次的資料として重視されるものであるが、これらは加曾利 B II~III 式のものともみてよいであろう。なお土器以外の遺物としては、この層の中から打製石斧 1 箇が出土した (Fig. 38—7)。これはかなり大形のもので、基部を欠失している。刃部をなす根もとの部分はやや扁平で、石質は黒雲母片岩である。

その他不整形の磨製石器が一点出土している (Fig. 38—8, PL. 38—8)。董青石を含む石墨片岩を材とし、蛤刃状の加工がみられるが、使用痕は認められず用途不明である。 武田宗久

II 下層の遺物

第2地点の下層(上層住居址の床面以下)より出土した土器片は、復原可能なもの4個を含めて272片であった。(但し、同一個体の破片と認められるものは合わせて1片とした。)それらは次のように分類が可能であり、それぞれの破片数は次表のようになる。

表2 第2地点下層出土の土器分類

加曾利E式(勝坂式類似のもの)	12片
・(阿玉台式類似のもの)	7片
・(I式、II式)	129片
後期土器(称名寺式、堀之内式)	20片
分類不能	104片
合計	272片

1) 勝坂式類似土器

破片数は少ないが、大型の破片がある。大きい環状の把手、隆線文を付け、その上に爪形文様の刻目を施したものの、など勝坂式の施文法を行っており、器壁も比較的厚く、大型の土器の破片であることを示している。胎土に雲母を含むものも若干ある。

2) 阿玉台式類似土器

断面方形をなす隆起線、その両側を画し、また蛇行して付された押しき文など、阿玉台式土器の施文法を継承している。胎土には、雲母あるいは砂粒を含んでいる。

3) 加曾利E式土器(Fig.33—1・2・3・4, PL. 30・28・29・27)

第2地点の第3層(黒色土層)以下より出土した土器片の主体をなすもので分類可能な土器片の50%を占めている。この中には4個の復原土器が含まれている。縄文、隆線文、沈線文、櫛目文など、いずれも加曾利E I式の特徴を示しているものが多い。中に若干、捺糸文などの加曾利E II式の特徴を示すものもある。また、胎土に雲母を含むものもある。

復原されたものは次の4個である。

① 深鉢形土器 (Fig. 33—1, PL. 30)

混土貝層中より出土した。器高42cm、口径28.5cm、底径11cm。口縁は外反直上する平縁で、1cm~1.5cmの巾で約1.5cmに肥厚した隆帯がめぐらされている。

この断面は四角く角張っている。頸部の内側にはゆるやかな段が見られ、以下底部付近に至るまで徐々に細くなるほぼ円筒状の器形である。器壁の厚さは0.8cm~1.0cmである。文様は縄文のみで、底部付近に至って無文となる。色調は黒褐色ないし赤褐色で焼成はあまり良いとは言えず崩れ易い。底部は平底。

② 深鉢形土器 (Fig. 33—3, PL. 29)

混土貝層中より出土。器高21.5cm、口径14.5cm、底径8cm、器壁の厚さ0.8cmを数える小型のものである。①と同様に、口のやや開く円筒状の器形を呈し、文様は縄文のみであるが、この土器は、口縁に隆帯がつけられず、かわって縁より1.5cmの所に巾0.4cmの沈線がめぐらされている。口縁の断面はやはり角張っており、把手が付けられていたらしい痕跡が1箇所残されている。焼成は普通である。

③ 深鉢形土器 (Fig. 33—2, PL. 28)

混土貝層下端より出土した。現存高25.5cm、口径25.5cm、胴部径18cmとやはり、口辺部の開く円筒状の器形を呈している。口縁はやや外反する平縁で、巾約1.5cmの隆帯が付されて厚さ約1.5cmと肥厚している。断面はやはり四角である。口縁より9cm前後の所に巾1.5cm前後の隆帯がめぐらされており、その間にやはり巾1.5cm前後の隆帯のはりつけによる眼鏡状の文様が付されている。これら隆帯の両側は、巾0.5cm前後の比較的太い沈線によってふちどりがなされている。地文として比較的粒子の細かい縄文が施されているが、頸部隆帯以下には他の文様はない。器壁の厚さは約0.7cmである。

④ 深鉢形土器 (Fig. 33—4, PL. 27)

下層住居址の炉に使用されていたものであり、いわゆるキャリバー型の土器の口頸部と見ることができる。口径41cm、現存高16cmを数える。口縁内側が強く出て鋭角の断面を作っている。文様は地文として縄文の施された上に、口縁より5cmの所を2条の隆線をもぐらして文様帯を画し、その中は半円を描く隆線を背合せにしたものにより4つに区画され、沈線による尾の長い渦巻

文が描かれている。頸部以下は2条及び3条一組の隆線の懸垂文がそれぞれ4組、交互にはほぼ等間隔に施されている。

4) 後期土器 (Fig. 36—4~20)

刺突文による称名寺Ⅱ式土器の破片1片の他は堀之内式と見ることができる。櫛目文、縄文また無文の上に施された平行沈線文を有する破片が見られる。

5) 分類不能の土器

ほとんどが無文のものである。中に櫛目文の破片もあるが、分類の不可能なものである。底部の破片が10片あり、いずれも平底で底径の大きいものようである。他の無文土器も底部近くの無文帯のものが多くようである。厳密には、分類はできないが、大方、加曾利Ⅱ式に伴うものと考えてよいと思われる。胎土に雲母を含んだものが若干見られる。

6) 土 錘

4個採集された。いずれも土器片を利用したものである。土器片の原体となる土器型式は決め手となる特徴を残していないため、断定することはできないが、大体加曾利Ⅱ式のものであるらしい点を認めることができる。いずれも混土貝層中より出土した。

① (Fig. 37—15) もっとも小さく 3.9 cm × 5.0 cm。焼成不良のため表面の文様は不明である。

② (Fig. 37—17) 大きさは 5.4 cm × 7.3 cm。粒子の粗い縄文の上に平行沈線文が施されている。

③ (Fig. 37—16) 大きさは 5.6 cm × 6.7 cm。粒子が粗く、薄い縄文のみである。

④ (Fig. 37—18) 大きさは 5.0 cm × 4.3 cm。無文で粒子は粗く、二次的な火熱を受けているせいか胎土はもろい。

7) その他の石器 (Fig. 38—6)

下層住居址の床上、柱穴("c")の傍から発見された。玄武岩を材とする。長さ 10.2 cm、巾 5.8 cmのほぼ短冊形を呈し、厚さ 2.8 cm で横断面は扁平な亀甲状の六角形に近い形状をなしている。側面は研磨され一方にはは

っきりとした稜が残っている。刃部と思われる方は、石斧と見るには鋭利さを欠くが、片刃状に研磨されており、部分的に、打撃の際に剝離したであろう痕跡が見える。以上のことから、石斧ではないとしても、何らかの打撃の用に供された石器と見ることができる。

8) 貝 輪 (Fig. 40—11, PL. 40—12)

大型のアカニシを加工したもので、長さ 11 cm、巾 6.6 cm をはかる。アカニシの核と唇部巾 2.6~2.8 cm によって構成され、他の殻板を欠いている。しかし、まだその欠き面になんらの研磨も加えられていないので、未製品であろう。 穴倉昭一郎

第2節 自然遺物

第1, 第2地点出土の動物遺存体

今回の発掘調査は、ごく小範囲に限られているので、加曾利北貝塚全体における動物遺存体の内容、性格などについては別にのべねばならない。

ここでは、一応出土した遺存体には、どのようなものがあったかをのべるにとどめたいと思う。

I. 軟体動物門 Phylum Mollusca

軟体動物は腹足綱、斧足綱のみである。資料のすべてがいま筆者の手元にないので、貝塚貝種の内容は本文中の貝層の説明の項にゆずりたい。ただ、特殊なものとして注意されたものに、つぎのような種類があった。

①アワビ類 *Haliotis* sp. (PL. 41—14)

第Iトレンチの貝層で1個出土。完全品でないので種名ははっきりしない。

②ソデガイ(シドロ) *Labiostrombus japonicus* (Reevé)

IIトレンチ 2区 -60~70 cm 出土

貝塚の貝としては珍しい種類である。故酒詰仲男博士によると関東地方では2箇所でしかこれまでに知られていなかったものという(千葉県東金野井、園生貝塚)。他にも3箇所だけが記録されている。本州中部以南10~30尋に産する(保育社:原色日本貝類図鑑、1962年版)。殻表面に特に水磨などの痕跡もみない。おそらく特別にはこぼれたものなのであろう。

③カワニナ *Semisulcospira libertina* (Gould)

IIトレンチ 3区

ヤマトシジミとカワニナがブロック状にひとつかみ位埋存していた。ヤマトシジミは小~中型の大きさのもの(殻長2.0~2.5cm)が主で、カワニナはやや大型のものが目についた。

④イタボガキ *Osrea densamellosa* Lischke

IIトレンチ 2区貝層 小型のもの1個

⑤アリソガイ *Coelomactra antiquata* (Spengler)

IIトレンチ 貝層

より成育した大型の殻が1個出土している。殻の腹縁がこわれているが、その割れ口は滑らかにすれており、腹縁を何か削るか擦るかに利用した一種の貝器とみてよいであろう。アリソガイはこのような内湾貝塚に時々出土し、このような貝殻の利用例も2, 3知られている。殻の大きい点を利用されたのであろう。

⑥マテガイ *Solen gouldi* Conrad

次のオオマテガイと混在している場合もあり、またマテガイのみかたまっていることが少なくなかった。

⑦オオマテガイ *Solen grandis* Dunker

IIトレンチ、2区、貝層中(-60~70 cm)

普通のマテガイに似て大きく、長さ12.2cmに達する。加曾利貝塚では以前にも採集されたことがある。東京湾岸奥部の貝塚で数箇所出土したことが報告されている。量的にはあまり多くないものであろう。やや外洋性の貝である。

⑧オオノガイ

IIトレンチ、2区、-80 cm 出土

小破片(3.8×1.7cm)であるが、殻表面に赤色塗料がぬられていた。

II. 脊椎動物門 Phylum Vertebrata

1) 魚 綱 Class Pisces

目につく比較的大型の魚骨はごく少ない。これらの他の小魚骨の精査が完了していないので、魚類相のすべて

を明らかにするに至っていないが、それらも発掘時の所見では、特に多いことはなかったようである。

①スズキ *Lateolabrax japonicus* (Cuvier & Valenciennes)

2層: 鰓蓋骨片 1

②クロダイ *Sparus longispinis* (Temminck & Schlegel)

2層

II トレンチ p.m.: r. 1, l. 2, dent.: r. , l. 1

3層

I トレンチ p.m.: r. 1, l. 2, dent.: r. 1, l. 1

II トレンチ p.m.: r. 2, l. 1, dent.: r. 3, l. 4

褐色土層

II トレンチ p.m.: r. 1, l. 1, dent.: r. 1, l. 1

III トレンチ p.m.: r. 1, l. 1, dent.: r. 1

4層

II トレンチ dent.: r. 1

その他 (-120 cm)

I トレンチ p.m.: r. 1, l. 2, dent.: r. 2, l. 1

クロダイの骨のなかで目につく、前顎骨(p.m.)、歯骨(dent.)を右・左側(r, l.)別にして出土量を表示すると以上の通りである。左右共に出土していても大きさが大低の場合違うので同一個体のものではない。他の魚種に比べて出土量の多かったことが推測される。このようなクロダイを主体とする魚類相は東京湾岸奥部貝塚でもっとも普通にみる様相である。漁獲されている魚体には、顎骨からみて大小の個体が混ざるようである(前顎骨で全長 20.0 mm 前後から 30.0 mm 前後位までが多い)。

③マダイ *Pagrosomus unicolor* (Quoy et Gaimard)

2層 III トレンチ dent. r. 1

褐色土層 II トレンチ max. r. 1

上記の2つだけが確実な出土例である。2例とも大きなもので、歯骨は全長 45 mm に達する。大型のマダイが僅かに出土するのは、それが特別に搬入されたものであることを示しているのであろう。

④ヘダイ *Sparus aries* (Temminck et Schlegel)

3層、II トレンチ p.m. l. 1

1つだけ前顎骨が出土している。出土量つまり捕獲量の少ないのは内湾での棲息が少なく捕れることが稀であったからであろう。

⑤コチ *Platycephalus indicus* Linné

3層 dent. l. 1

褐色土層、II トレンチ dent. l. 1

これも出土量はごく少ない。

2.) 鳥 綱 Class Aves

キジ科の一種 Phasianidae gen. et sp. indet.

2層 左右脛骨片各1

3層 左大腿骨片1

鳥骨の出土は至って少ない。上記の3つがみつかった。2層で出土したのは同一個体のものかも知れぬ。かなり大型の個体のもものと見られ、ヤマドリ *Syrnaticus soemmerringii scintillans* (Gould) であるかも知れぬ。

3.) 哺乳動物綱 Class Mammalia

①イノシシ *Sus scrofa leucomystax* Temminck

イノシシの骨はほとんどすべての層・地点(貝層のある範囲と貝層下の褐色土層まで)で発見された。下顎骨は完全なものもなかったが、5個(r. 3, l. 2)が出土している(PL. 41—8)。骨は破砕がひどく同一個体のもとの判定は難しかったが、同一個体と判定される左右の尺骨が同時に出土している例(PL. 41—9)、中手骨、指骨がまとまって出土している例(PL. 41—10)など、骨の切断、分離あるいは扱い方で中々興味深い資料があった。

②ニホンジカ *Cervus nippon nippon* Temminck

ニホンジカの骨も各地点、各層で出土している。全体でのことであるが、貝層中からは第1頸椎2個、第2頸椎3個、第1・2頸椎はそれぞれ別個体なので5個体分、他の顎骨その他も、確実に個体別できるのはこの程度の

数である。

頸椎、下顎骨、肢骨には若い個体が目につく。頸椎は2つとも小さく、下顎骨は3つのうち2つには乳臼歯がみられた。ほぼ同時に出土した上腕骨なども小型であり、雌の若い個体ではないかということ推定させた。

鹿角の出土は多くない。頭蓋骨をつける例が3個体分あった(PL. 41—1)。別に落角を用いたと思われる角の切断片があった。角の切断片は、特有の擦り切り法の痕をよく残しており、それを材料とした角製品の製作がなされたものと思われるが、現存する資料だけではどのようなものがつくられたか、判定することはできなかった。(PL. 41—2~6)

③ クジラ *Cetacia* fam. indet. (PL. 41—13)

Ⅱトレンチ、3層

15.5×5.0 cm、厚さ 1.5 cm 位の小断片である。片側に鋸歯状に切り込まれた形をみるが、直ちに骨器の一種とは認め難い。

④ タヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus*

Temminck et Schlegel

Ⅱトレンチ 3層 左上腕骨片1

Ⅰトレンチ 右下顎骨 (P₂~M₂)

僅かに上記の2つの遺骸が採集されたにとどまる。下顎骨は保存状態良好で、歯はかなり咬耗が進んでいる。

⑤ ノウサギ *Lepus brachyurus brachurus* Temminck

Ⅰトレンチ 2層

脛骨・左尺骨・踵骨片各1。他に歯2

Ⅱトレンチ 貝層下部

左上腕骨・橈骨・右脛骨・大腿骨片各1。

Ⅱトレンチ 褐色土層

右脛骨片・左大腿骨片各1。

今回の発掘調査では、イノシシ、シカを除いた獣類の出土はごく少なかったが、そのうちではウサギの骨がや

や目だつ存在だった。

加曾利北貝塚の魚・鳥・獣骨

加曾利北貝塚の調査トレンチで出土した骨類はほぼ以上のようなものである。骨の含まれていた層は縄文後期堀之内Ⅰ式の時期である。この頃の特徴としてあまり骨が出土しないのが普通であるが(特に東京湾岸奥部地域の貝塚の場合)、この1962年度の調査トレンチについても同じような様相がみられたのである。しかし、このことは、一つの貝塚の全域についてほぼ同じような状態であるというのではなくして、地点あるいは場所によっては、魚骨の集積するようなこと、あるいは特殊な鳥・獣骨の埋存するようなこともあり、簡単にこの時期の動物相を説明することができないという事実もしばしば経験するのである。それだけこの時期の問題は難しいともいえるであろう。はじめにものべたように、この北貝塚の様相は、別にあるその後の発掘資料もまた併せて論じなければならない。

金子浩昌

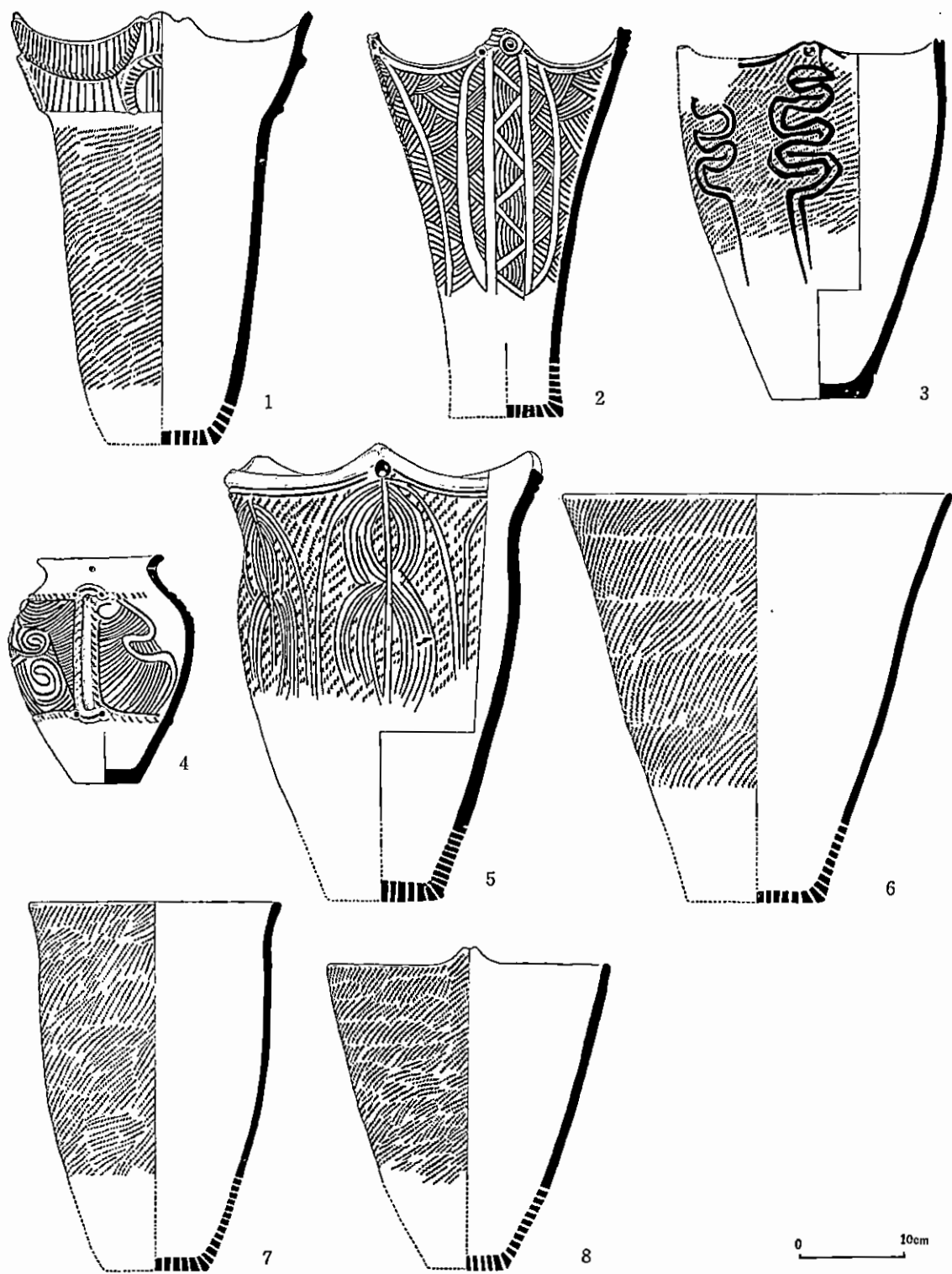


Fig. 32 土器実測図(1)第1地点出土 1 加管利E I式, 2~8 堀之内I式

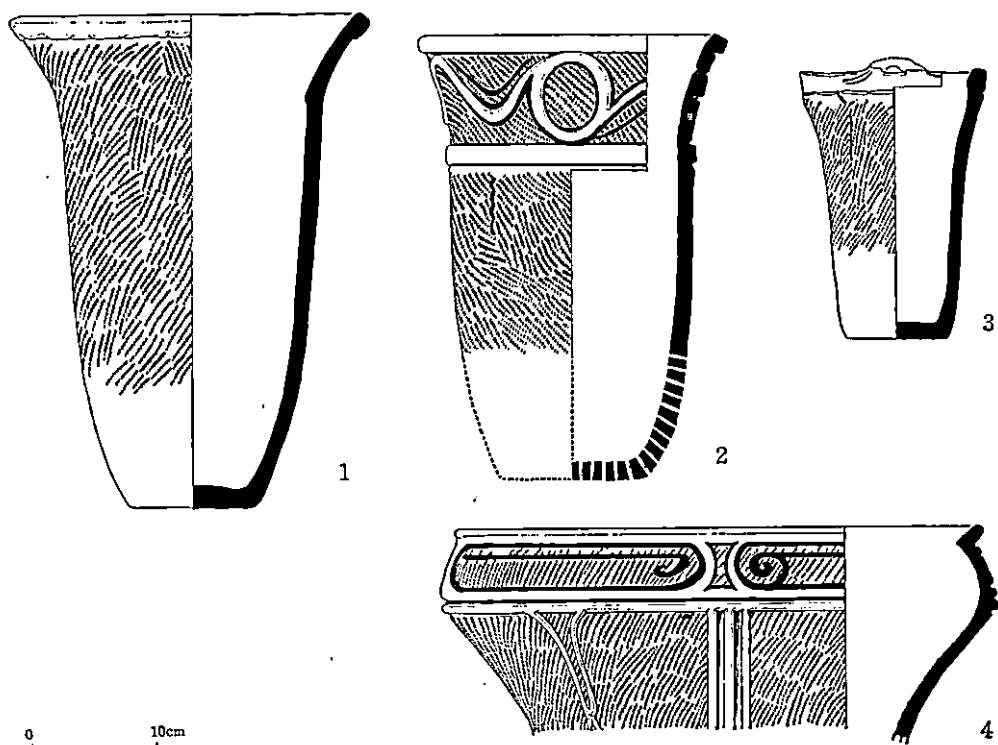


Fig. 33 土器実測図(2)第2地点出土 1~4 加曾利E I式

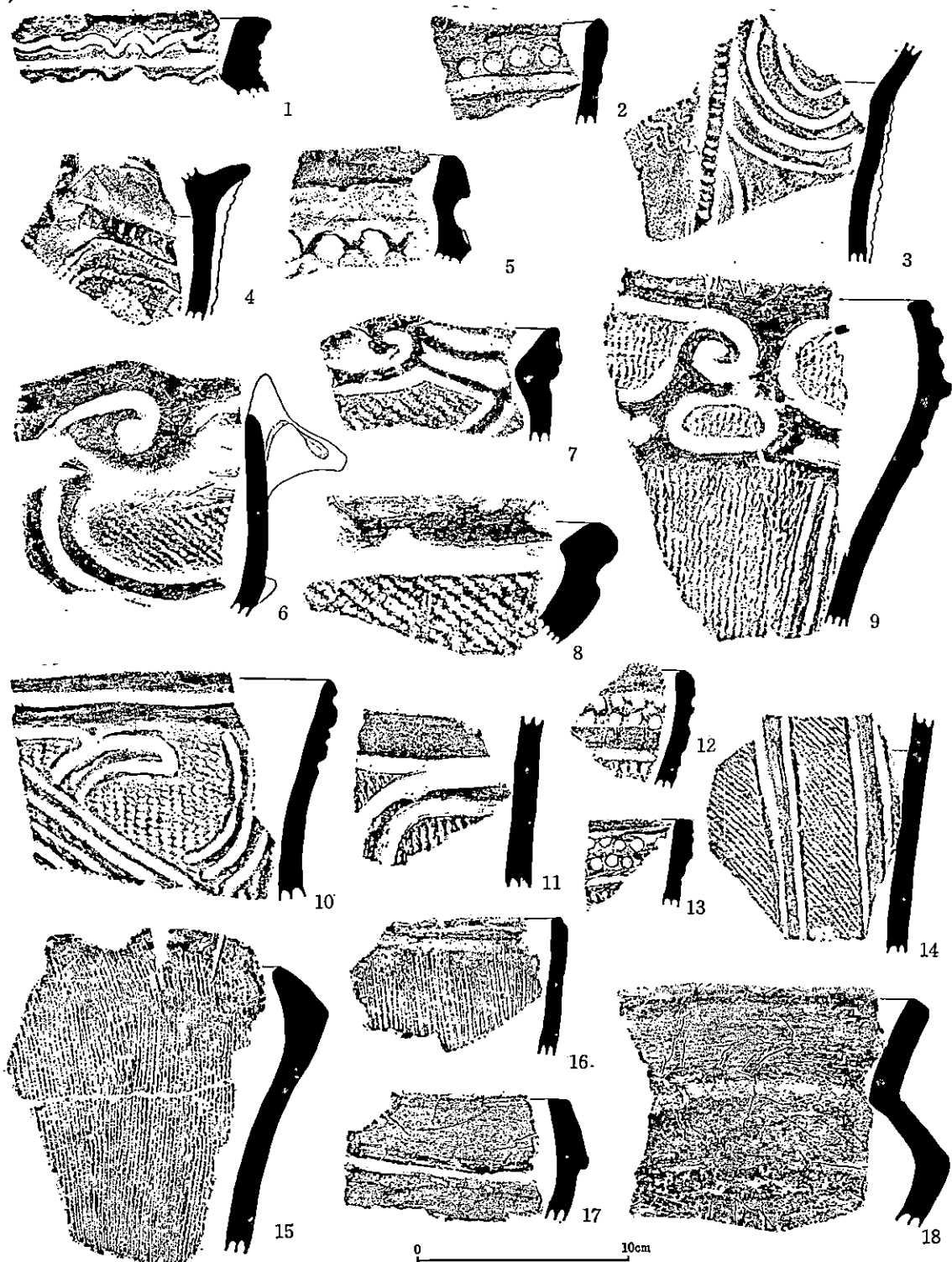


Fig. 34 第1地点出土 土器拓影 1~5 阿玉台式, 6~8 加曾利EⅠ式, 9~14加曾利EⅡ式, 15~16条痕文(加曾利E式) 17, 18無文(加曾利E式)

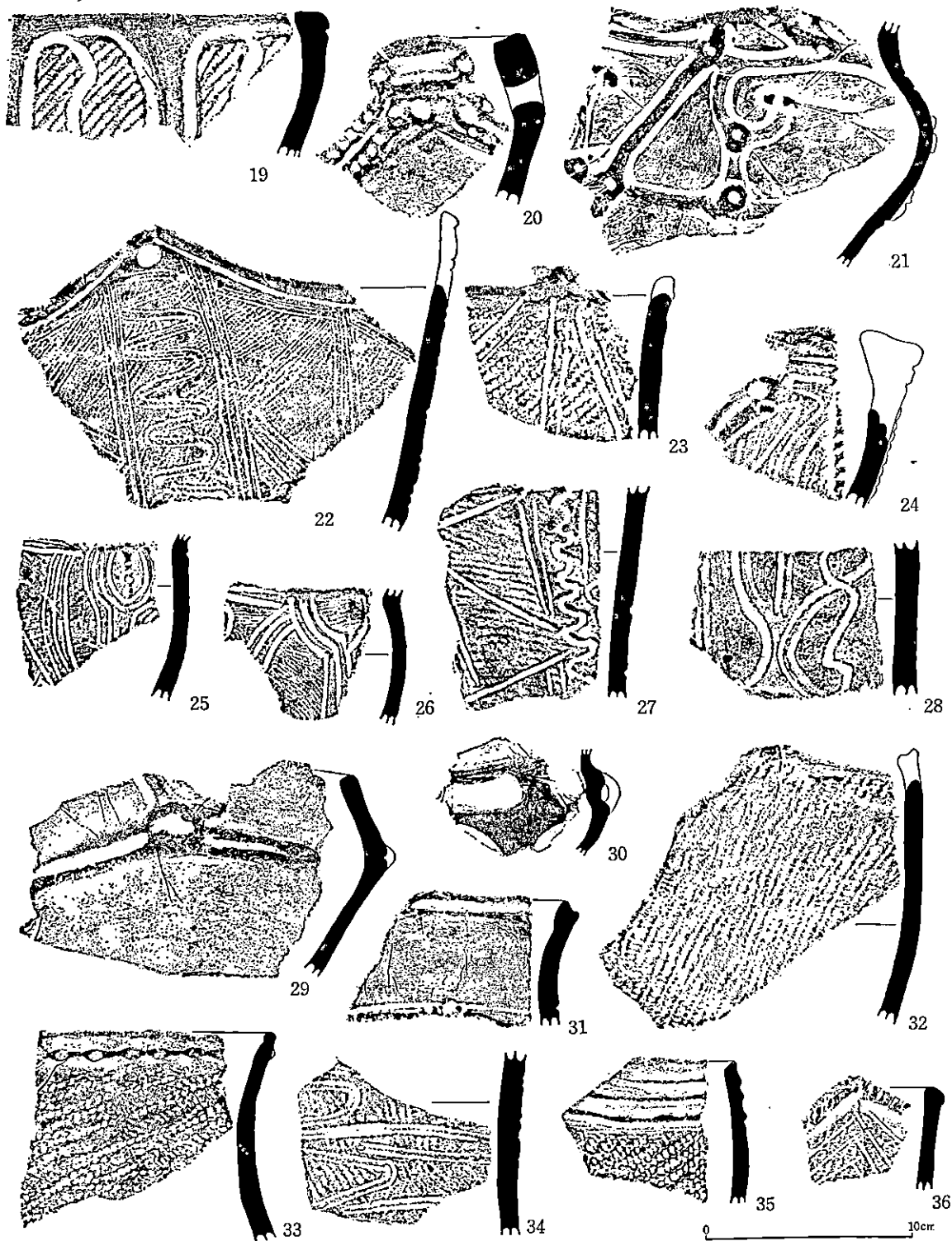


Fig. 35 土器拓影(2)第1地点出土 19 称名寺式, 20~32 堀之内I式
33~35 加曾利B I式, 36 加曾利B II式

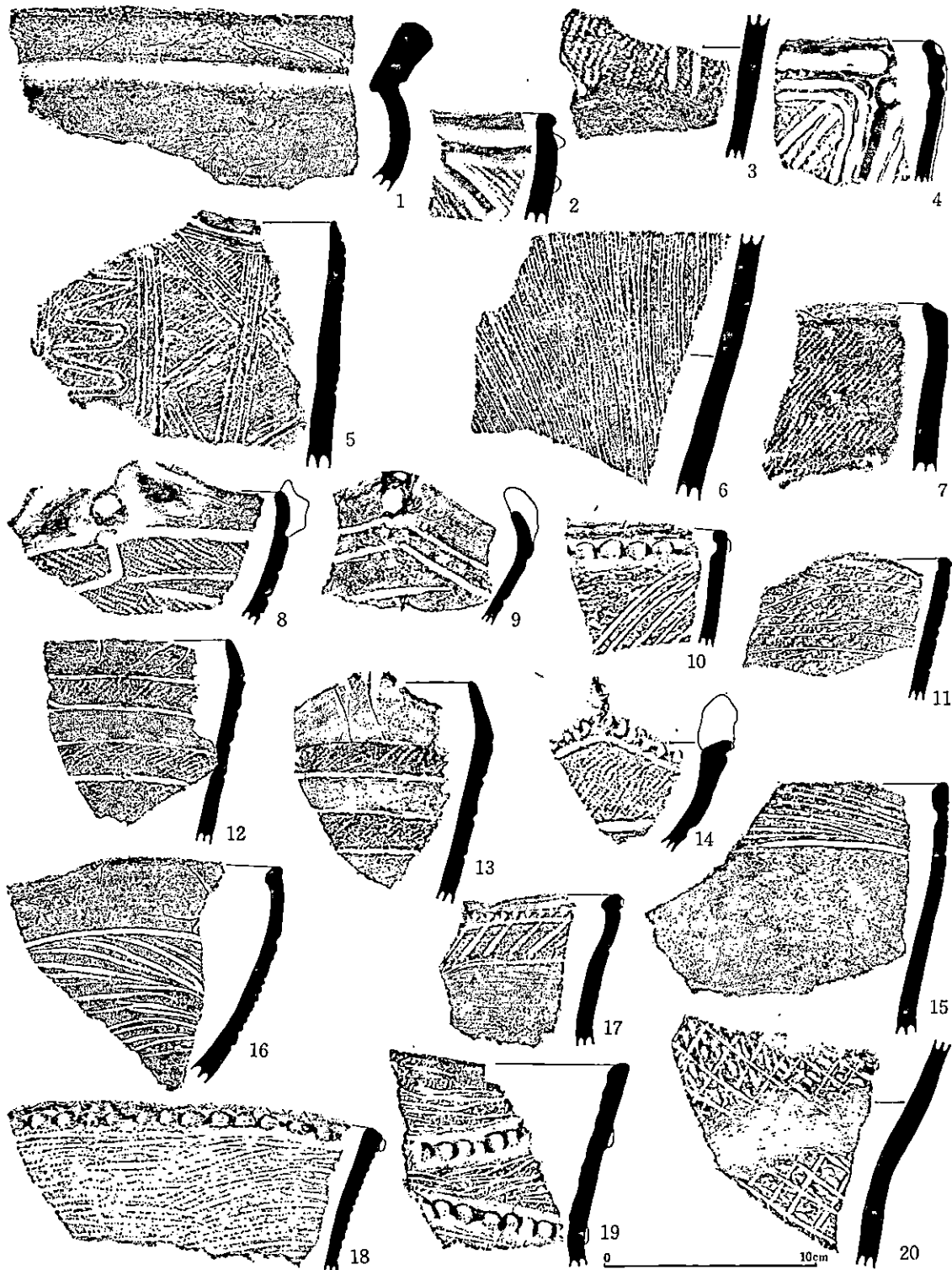


Fig. 36 土器拓影(3)第2地点出土

1~3 加曾利E式, 4~7 堀之内I式

8~13 加曾利B I式, 14~20 加曾利B II~III式

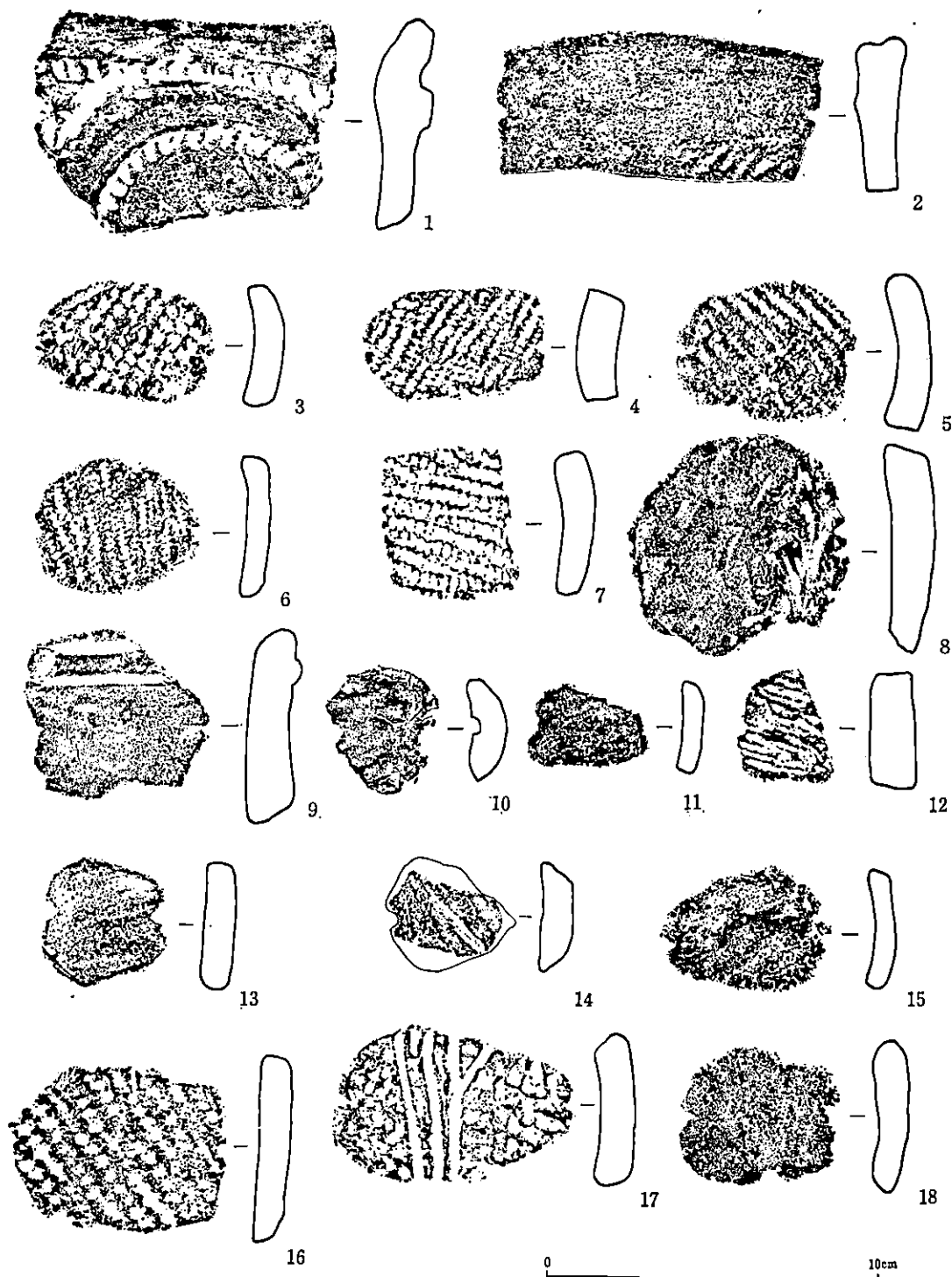


Fig. 37 土錘実測図 第1地点出土(1~14), 第2地点出土(15~18)

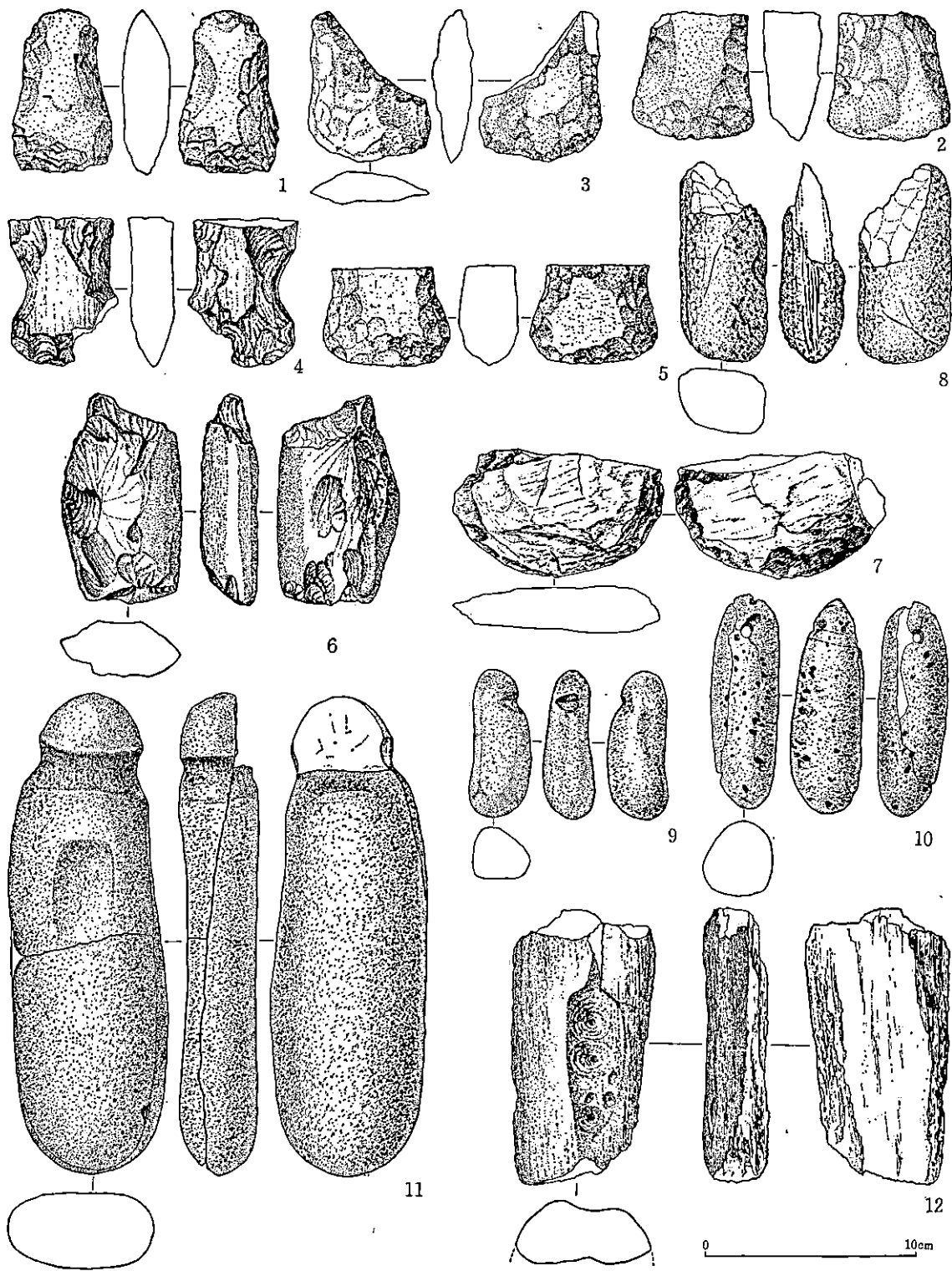


Fig. 38 石器(1)実測図 1~7 打製石斧, 8 不明石器, 9 石錘(?) (6~8 第2地点出土)
 10 浮子, 11 異形石棒, 12 石棒(?) (ほか第1地点出土)

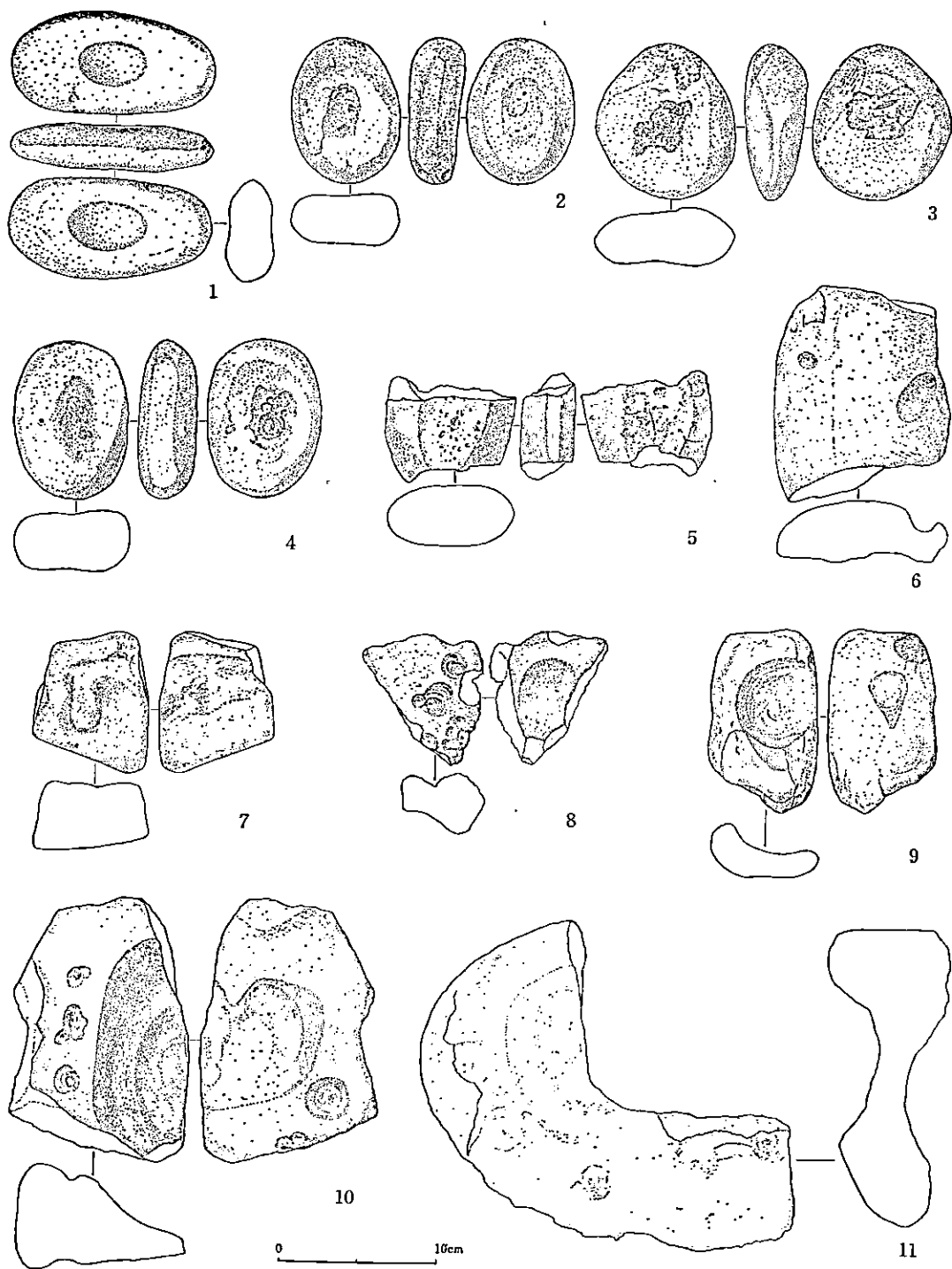


Fig. 39 石器(2)实测图 1~5 敲石, 6 凹石, 7 砥石(?), 8~11 石皿 (1~11 第1地点出土)

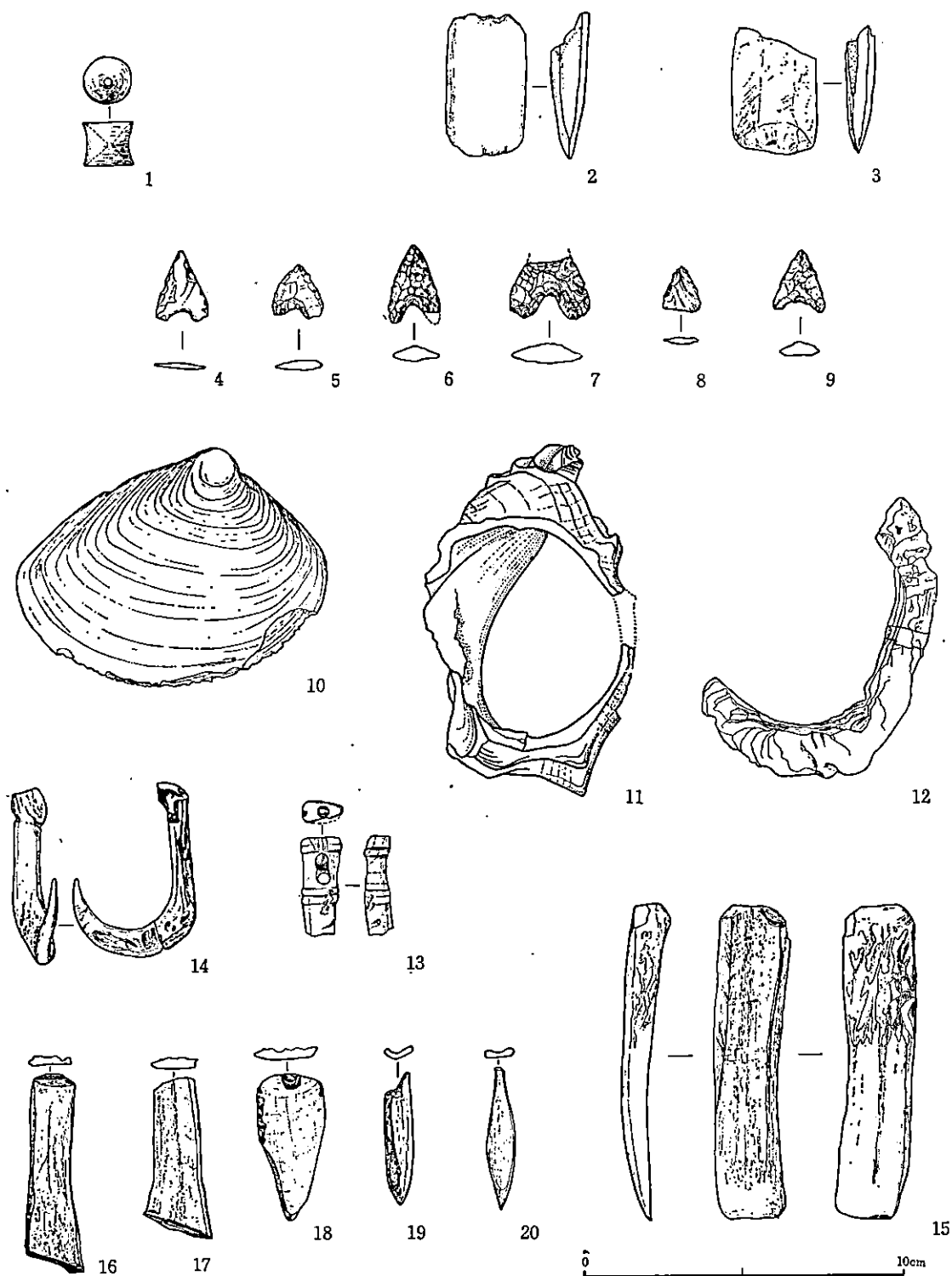


Fig. 40 石器(3), 骨角牙貝製品および土製品実測図 1 耳栓, 2・3 磨製石斧, 4~9 石鏃, 10 貝器, 11・12 貝輪
 13 ヘヤーピン, 14 釣針, 15 ヘラ状器, 16・17 角器未製品(?), 18 牙斧 19 角鏃, 20 角ヤス
 (11 第2地点出土, ほか第1地点出土)

第6章 人骨の出土状態

人骨は第2地点において5体発見された。これらの人骨は、すべて、地表下約40cmのほぼ同一の平面上から発見された。この平面上には、炉址と認められる厚い灰、焼土の堆積も存在するので、住居址の中に埋葬されたものと考えることができる。

そして、これらの人骨は、埋葬された場所によって2つのグループに分けることができる。それは、さらに場所のみならず埋葬の形態も著しく異にしている。

(イ) 第1群(第4号人骨、Fig. 42・43・PL. 5)

本群は第4号と名付けたもの1体のみである。第1炉址の北東約1.5mの所に、頭を北西に向けた仰臥伸展葬で貝の密度の高い混貝土層に覆われていたが、保存はあまり良好ではなく、上肢、下肢の指骨は失なわれているものが多い。とくに、左腕の尺骨、橈骨の半ばから先の部分、左寛骨及び仙骨、左大腿骨の上半部がえぐられたように失なわれている。これは、後世の耕作か、木根の抜去の際に失なわれたものであろう。

顔を右へ向け、左横顔を上に見せている。上肢、下肢共に直伸した完全な仰臥伸展葬である。

(ロ) 第2群(第1、2、3、5号、Fig. 42・43、PL. 23、24・25)

第1炉址の南側から南東にかけて、第1群とはすこぶる対照的に4体の人骨が複雑に折り重なった状態で発見された。個々の人骨の埋葬体位も種々様々で、骨の各部位も散乱していて一定の秩序は見られない。全体を混貝土層に覆われていた。これらの人骨の埋葬された部分だけを貝殻で覆ったものか、貝殻で覆われた部分の人骨だけが残ったものかは判然としない。(Fig. 41)

<第1号人骨>

本人骨群を発見する端緒となったものである。本群中の人骨としては比較的埋葬体位の整ったもので仰臥伸展葬の体位を残している。方向は東北東から西南西で、頭を東へ向けている。仰臥し、上肢は左右共に強く曲げている。そのため、左右の上肢骨が胸の両側に重なってい

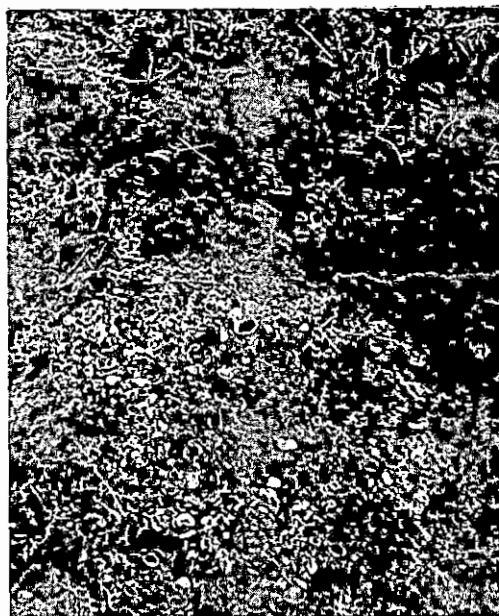


Fig. 41 第2地点の人骨上をおおう貝層

る。そのすぐ南側には第3号人骨、第2号人骨の頭蓋骨があり、左大腿骨の下には、第3号人骨の右肋骨が入り込み、左脛骨の上にも、その右橈骨と尺骨が交叉している。

<第2号人骨>

頭蓋骨及び上肢骨と若干の肋骨、椎骨と胴部以下の各部位の骨とがその間約1.7mの間隔をおいて離れた状態で発見された。

頭蓋骨は、第1号人骨の頭蓋骨の南南西約50cmの所にあり、顔は南南東を向き左の横顔を見せている。上肢骨は頸の横に顔の向いている方向に2本見え、その上に若干の肋骨が重なっている。

胴部以下は、それより西へ約1.7mはなれて、南北方向に横たわっている。本来ならば頭位を北においた仰臥伸展葬ということになるべき形態である。脛が左右共に左へ直角にまげられており、さらに、左脛骨、腓骨は30cm程はなれている。

この大腿骨間に第5号人骨の頭蓋骨があり、下にその他の部分の骨が埋まっていた。

註1 このため、発掘当時においては、頭部を含む方を第2号人骨、胴部以下を第6号人骨として別個の個体として扱ってきたが、その後、新潟大学教授小片保氏の調査によって、この双方が同一個体のものであるとされた。

〈第3号人骨〉

頭蓋骨を2号人骨の頭蓋骨のすぐ北におき、第1号人骨とほぼ平行した仰臥伸展葬であるが、全体として上体と下肢とが「く」字状にまがり、部分的にも多少特異な形態を残している。

頭蓋骨は、前述の位置にあって顔は南を向き、右の横顔を見せている。丁度、第2号人骨の頭蓋骨の後頭部に額を接するような位置である。上体は多少左へくねり、左腕は強くまげているため、上腕骨、尺骨、橈骨は肋骨の左側に重なっている。上体の右半身は第1号人骨の左大腿骨の下に右肋骨があり、そこから右腕がのびているが、「く」字状にまがり、尺骨と橈骨の先端近くが第1号人骨の左脛骨の上に交叉している。この状態は、あたかも右腕で第1号人骨の左脚を抱えているような形態を呈している。

下肢は、左脚が強く上体に近づけてまげられて胸の脇に大腿骨、脛骨、腓骨が重なり、左腕の下に入っている。(この大腿骨の中辺に骨折が治癒したと思われる骨瘤がある。PL. 25)

〈第5号人骨〉

非常に年若い小柄な人骨である。第2号人骨の大腿骨の間に頭蓋骨があり、顔は南西を向き右横顔を見せている。下顎骨はその傍に上向きにある。その頭蓋骨の下から東へ向かって椎骨が連なり、下肢は強くまげられて下肢骨は第2号人骨の骨盤の下に入っている。頭の向いている方向が多少ずれているが、全体として右体側を上にした横臥屈葬の形態である。

以上、第2地点における人骨の埋葬状態について、その概略を記してきたが、第1群(第4号人骨)については、仰臥伸展葬という埋葬形態を明瞭に残していることに疑問の生ずる余地はないと考えるが、第2群についてはいわゆる正常な埋葬形態ではないと考えることができる。

このような埋葬状態の残されている例は、管見によれば大正15年の姥山貝塚における発見例^{註2}をあげる事ができる。

この姥山貝塚例においては、竪穴住居址内に5体(男・成人2体、女・成人2体、子供1体)が発見され、その出土状態は、1体を除いての4体は相接し重なり合った状態であり、このことから八幡一郎氏は埋葬されたものより、何等かの事情で同時に横死したものと見做すことが合理的であると述べている。

今回の第2群についてもほぼ同様のことが言えると考えられる。第1号人骨についてはともかくも、他の4体については非常に混乱した状態を残している。とくに、第2号人骨の頭蓋骨及び上肢骨と、胴部以下の骨とが、1.7mもの間をおいて発見された事情を推察すると奇異なるものを感じざるを得ない。これがそれぞれ、別個の個体のものであったとしても、同様のことが言える。これらの人骨の周辺には攪乱を受けた形跡は認められず、当時の原状を保っていると見ることができ、その感は一層強められる。このような状態がいかなる原因によって生じたか、考えられることはいくつかあるが、それを解決できる積極的な資料は、発掘の際には見出すことはできなかった。

註2 松村瞭他、「下総姥山=於ケル石器時代遺跡」(東京帝大人類学教室報告5 昭和7年)

穴倉 昭一郎

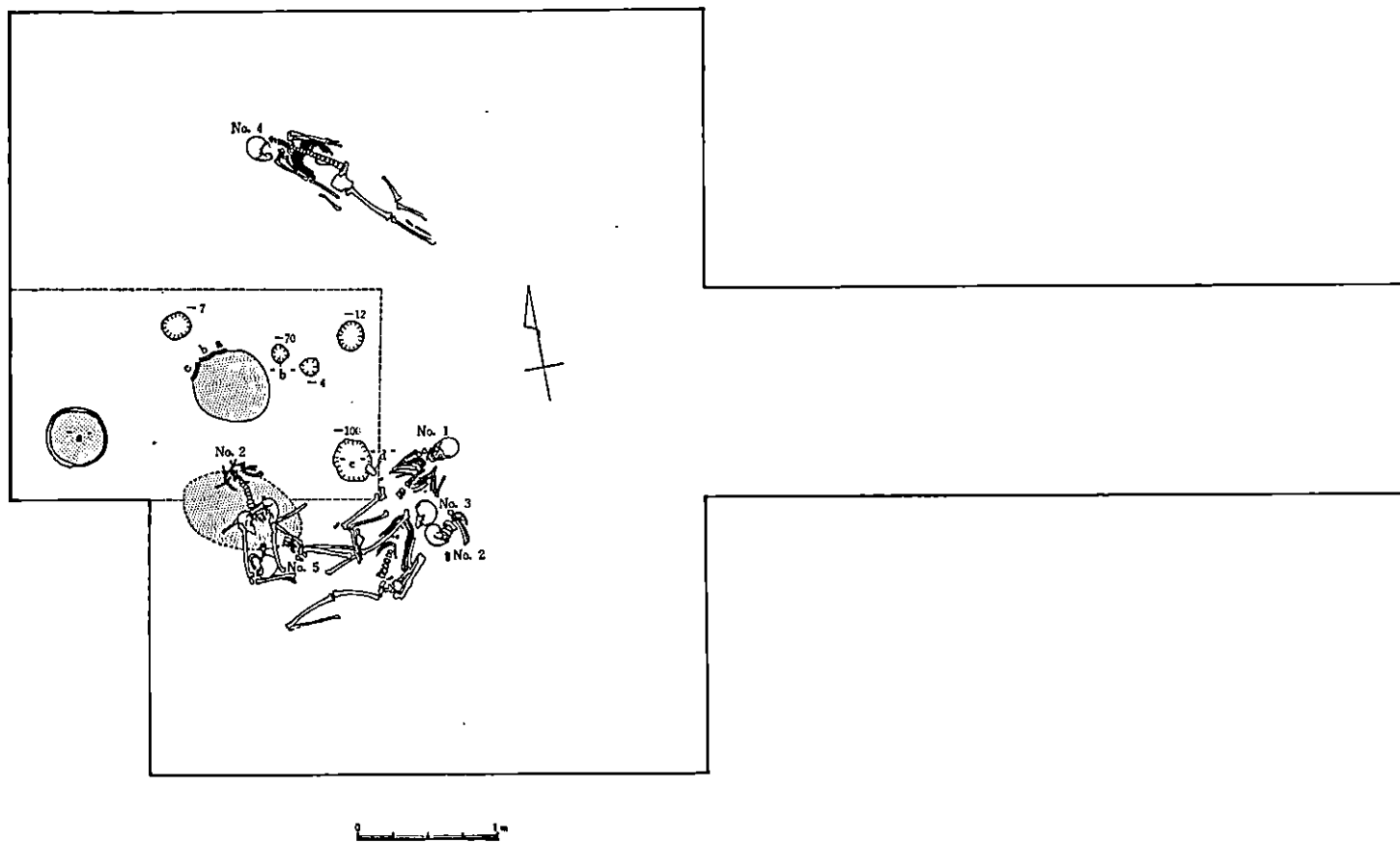


Fig. 42 第2地点の人骨出土状態

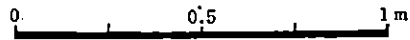
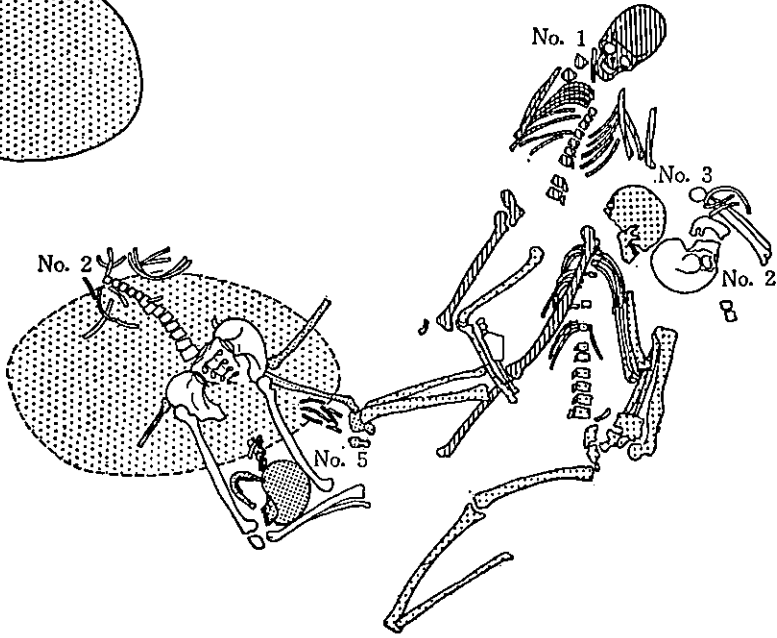
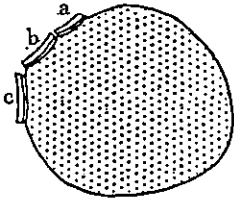
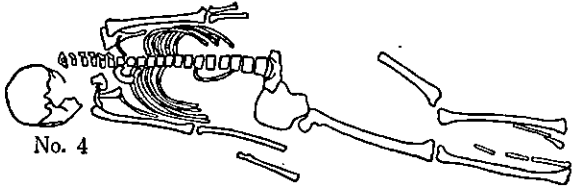


Fig. 43 No. 1~No. 5 人骨の出土状態

第7章 人骨の所見

この人骨群は、千葉市教育委員会がとくに筆者に計測および観察を許されたものであって、はじめにそのご厚意に深く感謝する。

これは5体分あって、保存状態は比較的良好であり、多くの特徴を知りえたので、そのおもな項目について検討を試みることにする。計測方法および項目は R. Martin (1928) の教科書に従う。左右側あるものは左側について述べ、破損しているものは右側で論じたものもある。また推定値を知ることのできるものは、それによって検討したものもある。身長は K. Pearson の式によって算出した。

第1号人骨 (Fig. 43, PL 42—1~4)

保存状態は比較的良好ではあるが、四肢骨の骨端部の破損の強いものが多い。頭蓋骨では、眉間と眉弓の発達は弱く、側頭骨乳様突起は小さい。外後頭隆起の表面はあらいが、突出していない。これらの特徴から、女性骨と考えてよい。頭蓋縫合の癒着の程度は、外板で弱く、内板で強い。頭蓋は中頭に近い短頭であり、頭蓋長高示数は正型ではあるが、高型との境界にある。頭蓋骨に対して、顔面骨が比較的小さい。上顔示数 (Kollmann および Virchow) は低型である。眼窩は丸みを帯びており、左右側ともに眼窩上切痕がある。眼窩示数は高型である。鼻示数は過低型である。全側面角は顎中型である。下顎骨はぜんたいにきゃしゃで、オトガイは発達よく、前方に突出している。前歯の歯槽部の高さは、白歯のそれより高い。下顎枝角は小さい。残存歯の咬耗は強く、Broca の 3~4 度である。鱗歯が下顎右側第1大白歯にある。歯が生前脱落して歯槽の閉鎖している部分では、歯槽突起が萎縮している。歯周炎の像のある歯があり、歯石の附着もある。ケヌキ型咬合であり、抜歯はない。

椎骨に変形性脊椎症がみられる。上腕骨は小さく、中央横断面は扁平に傾く。橈骨および尺骨はともに小さく、骨間縁は鋭く、発達もよい。大腿骨は小さく、きゃしゃであるが、骨体の前方への彎曲があり、粗線の発達もよ

く、柱状を呈する。上骨体断面示数は広型である。脛骨は小さいが、後面に1稜を作り、骨体中央横断面は四辺形である。多くの所見から、熟年期の女性骨であろう。四肢骨の最大長が計測できないので、身長は算出ができないが、大きな人ではなかったらしい。

第2号人骨 (Fig. 43, PL 43—1~4)

保存状態は比較的良好ではあるが、四肢骨の骨端部の破損しているものが多い。頭蓋骨では、眉間の膨隆は強いが、眉弓の発達はよくない。側頭骨乳様突起は大きく、その根部も張り出している。これらの多くは男性骨の特徴を示している。頭蓋は短頭に近い中頭で、頭蓋長高示数は正型である。頭蓋骨に対して顔面骨は大きいほうではない。上顔示数 (Kollmann) は中型、上顔示数 (Virchow) は低型である。眼窩は丸みを帯びているが、長方形に傾く。左右側ともに眼窩上切痕がある。眼窩示数は高型である。鼻示数は過低型である。歯槽突起は大きく、広い。全側面角は顎直型である。下顎骨では、オトガイの突出は強く、前歯の歯槽部の高さは、白歯のそれより低い。それはオトガイの下顎底は軽度^{.....}に上方に彎曲しているためである。下顎枝角は小さく、下顎枝幅は大きい。歯の咬耗は軽度で、Broca の 1~2 度であり、歯石の沈着は少なく、歯周炎の像がみられる。抜歯はみられない。下顎右側第1、第2、第3大白歯と左側第3大白歯に鱗歯がみとめられる。これらの所見から、この人骨は壮年期のものであろう。

椎骨には、とくに脊柱の下部に変形性脊椎症がある。上腕骨の特徴はわからないが、橈骨の骨体中央周は小さい。寛骨の大坐骨切痕は鋭で、男性の特徴がある。大腿骨では、上下部は大きく、頸骨体角は大きい。骨体は前方に彎曲しており、粗線の発達は強く、柱状である。上骨体断面示数では、狭型となり、扁平ではない。脛骨は小さく、骨間縁は鋭で、骨体中央部で後面に1稜を作らない。そのため横断面は四辺形ではない。脛示数は厚脛に属し、扁平ではない。腓骨の中央周は小さくはない。

大腿骨から身長を算出すると、154.6 cm で小さい人であったことがわかる。

第3号人骨 (Fig. 43, PL. 45—1・2)

この人骨の頭蓋骨と顔面骨は破片しかなく、その特徴を知ることはできないが、胸、四肢骨からみると頑丈であったと思う。椎骨には変形性脊椎症がみられる。鎖骨も上腕骨も小さく、後者の骨体中央部の扁平は強い。橈骨も小さく、骨間縁は鋭くない。右側のそれは、骨体の表面は平たんではなく、内外側の彎曲がなく、回内筋粗面 (J.N.A.) が深くくぼみをつくる。尺骨の骨間縁も鋭くない。左側の大腿骨は小さく、粗線の発達も弱く、柱状とはいえないが、上骨体断面示数では広型を示している。頭骨体角は大きく、その他の特徴を総合して男性骨と考える。右側の大腿骨は強い病変がみられる。上端より下部約 $\frac{1}{3}$ のところで、骨体は後方に強くまがり、その部分は太く、表面はあらく、大小の多くの孔をみる。これより下部は上部とはほぼ平行している。これは、この彎曲した部分に骨折があり、下部骨折片の側方転位があり、それが治癒経過をとり、仮骨が形成されて、しだいに吸収と添加作用が加わり、表面があらくなり、硬化したものと考える。生前この人は強い跛行であったと推定する。このために、脛骨では強い左右側差が生じたものと思う。それと左右側ともにきゃしゃで、各縁は丸みを帯びている。附表その2でみるように計測値が、右側のほうが一般に小さい。腓骨の中央周は、右側でも小さくはない。このようにみえると、この人骨には多くの骨変化があり、骨ぜんたいの状態から熟年期のものであろうと考えるが、確定的ではない。左側の大腿骨から身長を推定すると、156.1 cm となり、これと他の骨の最大長からの平均値では 153.2 cm となる。小さい男性であった。

第4号人骨 (Fig. 43, PL. 44—1~4)

保存状態は比較的よいが、崩壊している箇所も多い。ぜんたいとして頑丈である。頭蓋骨は、眉間とそれに続く眉弓の発達はよく、前方への突出が強い。側頭骨乳様突起は鋭く下方にさがっているし、その根部の膨隆もつよい。外後頭隆起の突出はないが、表面はあらく、上項

線は鋭く、外側方に進んでいる。頭蓋縫合の癒着は、内外板ともに進んでいる。頭蓋は中頭で、頭蓋長高示数は高型に近い正型である。頭蓋骨に対して顔面骨は比較的大きい。上顎骨の歯槽突起の萎縮が強いので上顔高の大きさはわからないが、低かったと思う。頬骨弓幅も中顔幅も大きく、たぶん横に張った顔であったであろう。眼窩は長方形で、低型を示している。左右側ともに眼窩上切痕がある。鼻示数では過低型を示している。全側面角は顎直型である。下顎骨では、ぜんたいとして小さいが、オトガイ高が高い。下顎枝示数も小さい。下顎枝角は大きい、一般に老年期になるとこの角が大きくなるので、あるいはそのためかも知れない。歯は生前脱落のものが多く、とくに上顎で目だつ。脱落した部分の歯槽突起と歯槽部の萎縮が強い。残存歯の咬耗は強く、Broca の 3~4 度である。歯周炎の像がある。抜歯があったかどうかかわからないし、ケヌキ型咬合であったかもわからない。以上述べたことから、この人骨は老年期の男性であろう。

椎骨には変形性脊椎症がみられる。上腕骨は大きく、骨体中央部の扁平も高度である。橈骨は大きくはなく、骨体中央部は扁平に傾く。尺骨とともに、骨間縁が鋭く張り出している。大腿骨は小さく、粗線の発達は強くないので、柱状をなしていない。上骨体断面示数は超広型である。脛骨は小さいが、骨間縁は鋭く、後面に1稜をつくり、中央横断面は四辺形である。骨体周は大きく、脛示数は中脛である。身長は、大腿骨だけでは 155.8 cm で、その他の骨からとの平均値でも 155.8 cm で、同値である。身長は大きいほうではない。

これら第1号から第4号までの人骨の計測値のおもなものは、表1、表2に示しておいた。

第5号人骨 (Fig. 42・43)

この人骨は破片となっており、欠損部も多く、くわしい特徴を知ることはできないが、一見して成人骨ではない。化骨核が離れているものが多い。下顎骨の大きさと、永久歯の萌出状態から、それにレントゲン写真によって少年期のものであると考える。性別はよくわからない。

このように加會利北貝塚人骨は、性別不明の少年期のもの1体、壮年期の男性1体、熟年期の男女性各1体ずつ、老年期の男性1体である。これらの成人骨について述べると、頭蓋モドウルスは大きいほうではなく、顔面骨は横に広い。下顎骨のオトガイの突出は強く、オトガイ高は低くない。眼窩上切痕は3体ともみられる。ケヌキ型咬合が多い。下顎枝角は老年期のものは大きい、他は小さい。椎骨の変形性脊椎症は4体ともみられ、壮年期にもすでにみられる。大腿骨上骨体断面は扁平なものや丸いものがある。脛骨の骨体中央部の横断面は

四辺形のものや三角形に近いものがあり、厚脛と中脛であり、平脛ではない。身長推定値は縄文後期人としては小さいほうに属している。第3号人骨のように、右側大腿骨に重篤な骨折症状があり、たぶんそのためと思うが、それに続く脛骨では左右側でその大きさを異にすることは注目すべきであろう。それにこの5体分の人骨群の形質上の特徴は、ほとんど同時期に同一地域に住んだ人達の全貌を明らかにするものとして、多くの興味のある問題を含んでいる。

小片 保

表 1 頭蓋骨と顔面骨のおもな計測値

(mm, 度, または無名数, 括弧は推定値を示す)

人骨番号					人骨番号						
性					性						
推定年齢					推定年齢						
	1	2	3	4		1	2	3	4		
	女	男	男?	男		女	男	男?	男		
	熟年	壮年	熟年?	老年		熟年	壮年	熟年?	老年		
1	最大脳頭蓋長	171	178	×	178	48/45	上顔示数(Kollmann)	48.9	53.7	×	×
8	最大脳頭蓋幅	137	142	×	140	48/46	上顔示数(Virchow)	67.0	69.9	×	×
17	バジオン・プレグマ高	128	135	×	133	52/51	眼窩示数	90.0	85.0	×	72.1
20	耳プレグマ高	105	107	×	124	54/55	鼻示数	63.4	50.0	×	60.7
8/1	頭蓋長幅示数	80.1	79.8	×	78.7	65	関節突起幅	117	120	×	(120)
17/1	頭蓋長高示数	74.9	75.8	×	74.7	66	下顎角幅	94	105	×	(110)
17/8	頭蓋幅高示数	93.4	95.1	×	95.0	68	下顎骨長(深)	72	75	×	(73)
	頭蓋モドウルス	145.3	151.7	×	150.3	69	オトガイ高	(32)	30	×	34
40	顔長	93	92	×	×	69(1)	下顎体高	30	32	×	×
45	頬骨弓幅	(133)	134	×	(134)	69(3)	下顎体厚	12	14	×	(12)
46	中顔幅	97	103	×	95	70	下顎枝高	60	64	×	(60)
48	上顔高	65	72	×	×	70(1)	下顎切痕幅	35	41	×	×
51	眼窩幅	40	40	×	43	70(3)	下顎切痕高(深)	13	13	×	×
52	眼窩高	36	34	×	31	79	下顎枝角	114	112	×	(125)
54	鼻幅	26	26	×	28	68/65	幅長示数(下顎骨)	61.5	62.5	×	60.8
55	鼻高	41	52	×	46	71/70	下顎枝示数	56.7	57.8	×	56.7
72	全側面角	82	85	×	85						

表 2 四肢骨のおもな計測値

(mm, 度, または無名数, 括弧は推定値を示す)

人 骨 番 号					人 骨 番 号								
性					性								
推 定 年 齢					推 定 年 齢								
	1	2	3	4		1	2	3	4				
	女	男	男?	男		女	男	男?	男				
	熟 年	壮 年	熟年?	老 年		熟 年	壮 年	熟年?	老 年				
1	上腕骨				9	中央横径	21	21	右 18 左 21	21			
	上腕骨最大長	×	×	275	(290)								
	5	中央最大幅	19	×	21	22	9a	栄養孔の高さでの横径	23	24	右 20 左 22	22	
	6	中央最小幅	15	×	16	15	10	骨体周	81	77	右 71 左 78	84	
	7a	中央周	60	×	61	65	9/8	中央断面示数	70.0	75.0	右 70.0 左 75.0	67.7	
	6/5	骨体断面示数	79.0	×	76.1	68.2	9a/8a	脛示数	71.9	77.4	右 76.9 左 75.9	66.7	
1	橈骨					4	腓骨	中央周	×	50	右 52	×	
	1	橈骨最大長	×	×	(220)								223
	4	骨体横径	15	16	14								16
	5	骨体矢状径	10	11	11								10
	5(5)	骨体中央周	38	42	42								43
	5/6	骨体断面示数	66.7	70.6	78.6								62.5
11	尺骨												
	11	尺骨前後径	13	12	12	14							
	12	尺骨横径	16	15	14	16							
11/12	骨体断面示数	81.3	80.0	85.7	87.5								
1	大腿骨												
	1	大腿骨最大長	×	380	398	(396)							
	6	骨体中央矢状径	28	32	27	28							
	7	骨体中央横径	24	25	23	24							
	8	骨体中央周	82	90	85	84							
	9	上横骨体径	29	27	26	31							
	10	上矢状骨体径	23	27	20	23							
	14	前頸および頭長	59	64	×	60							
	20	大腿骨頭周	125	135	×	×							
	29	頸骨体角	123	135	132	123							
	6/7	中央骨体断面示数	116.7	128.0	117.4	116.7							
	10/9	上骨体断面示数	79.3	100.0	79.3	73.8							
	1a	脛骨											
1a		脛骨最大長	×	×	(335)	340							
8		中央最大径	30	26	右 25 左 28	31							
8a	栄養孔の高さでの最大径	32	31	右 26 左 29	33								

第8章 総括

すでに調査の概要については、数項目に分けて述べて来たので、新たに蛇足を加うべきものはない。ここでは今までの記載の要点と、それから窺うことの出来る若干の問題について考察を施し、結語にかえたいと思う。

先ず第1地点については、住居址群と大形ピット群の存在が注目される。発見された5箇の住居址(A・B・C・D・E)は互いに重複した状態を示しているが、A・B・Cには夫々の住居が営まれた当時に存在したのもと思われ土器が伴っていた。これによってAは称名寺式の時期、Bは加曾利EⅡ式の時期、Cは堀之内Ⅰ式の時期とされ、A・D・Eの関係は床面の重複の状態からAよりもDが新しく、DよりもEが新しい。併しCとD、CとEとの先後関係は判明しない。そこで従来の土器による型式編年を尊重して上記5箇の住居址の先後関係を整理すると、B→A→C、B→A→D→Eとなるが、CとD、CとEの先後関係は判明しない。ただ以上5箇の住居址群の上部を被覆している貝層と、貝層下住居址群に至る土壤に含まれる土器型式は、堀之内式と認められることから、D・Eはこの型式の時期以後のものではあり得ない。

B住居址は完掘した唯一のものである。本住居の建造された場所は西に高く東に傾斜した自然地形のローム層を掘り下げて床面をほぼ水平に設け、その平面プランは不整楕円形を呈するものである。この床面に設けられた2箇の炉址と、多数の柱穴のうち6箇所からは、ロームブロックの混入が認められること、東側周溝の外側に1条の古い周溝かと推定される部分があることなどを総合的に考慮して、少なくとも1回の増改築が行なわれた形跡が看取され、最初の平面プランは円形に近いものであったと考えられる。

C住居址はいわゆる石囲炉を伴うものであるが、火災によって焼失後廃棄され、その後長期間窪地となっていたようである。このことはその上の貝層断面が著しく落ちこんでいることによって証明される。

なおこの貝層断面を検討すると、細破されたキサゴ層がレンズ状に入っていることが注目される。これはキサゴを人工的に破碎したものと思われ、附近の諸貝塚からも往々発見される現象であるが、今回の調査からはその用途を解明する手がかりは得られなかった。

大形ピット(A'・B'・C'・D'・E'・F')のうちA'は円筒形、B'・C'・D'・E'は截頂円錐形を呈するもので、いずれも堀之内式土器に伴う時期に設定された遺構と推定され、その用途はA'ピットに於ては或種の食料となる材料を貯蓄保存するためのものと考えられる。^{註1}B'～E'については用途を知るための一次的資料は得られなかった。併しA'～E'に共通する現象として床面が踏み固められた痕跡に乏しく、人類の居住には狭すぎる状態を呈するもので、捕獲動物の一時的な飼養か、食品材料の貯蔵かいずれかの用途に使用したものであろう。^{註2}F'は用途不明である。

次に第2地点については、地表下約40cmと云う頗る浅いところに、住居址の炉と推定されるものがあり、炉の側壁に突き刺さっていた土器片から、これは加曾利BⅡ式のものと考えられる。この炉を伴う床はいわゆる張り床であるが、床下は黒色土層となっていたために、床面が柔らかく且つその範囲や柱穴の存在、周壁の有無などを確認することが出来なかった。

人骨はこの床面上に4体(第1号・第2号・第3号・第5号)、床面上か又はその北側に1体(第4号)発見された。このうち第4号は仰臥伸展葬であるが、他の4体は異状埋葬である。人骨担当者の小片保はこれらを次のように考察した。第1号——熟年女性、第2号——壮年男性、第3号——熟年男性、第4号——老年男性、第5号——少年期性別不明とし、ケヌキ型咬合が多く、第1号～第4号の4体(成人骨)には変形性脊椎症がみられ、第3号には右側大腿骨に重い骨折症状がみられるから、生前は強い跛行であったろう。

以上5体の人骨が本住居址上に埋葬されたものか、第

4号以外の4体が住居址上に埋葬され、第4号は住居址外の埋葬であったか否かについては議論の分れるところであるが、第4号以外の4体の人骨は、その異状埋葬の状況から見て同時合葬であることは明瞭である。この点下総に於ては姥山貝塚接統溝に代表的な例があり、同時合葬6体(伸展葬)の例としては本貝塚の近傍矢作貝塚に於てすでに見られたことであった。次にこれらの人骨群の上には、混土貝層や純貝層が被覆^{註3}されていた。この貝の種類は、ハマグリ、アサリ、シオフキ、ウミニナ、サルボウ、イタボガキ、カガミガイ、アカニシ、ツメタガイなどが多かったが、オキアサリ *Gomphina (Macridiscus) veneriformis* も以外に多く検出された。この暖海性の貝は、第1地点に於てはあまり見あたらないものであった。

以上の住居址の置かれた黒色土層の一部をさらに掘り下げると、混貝土層となり、この層の中にアサリ、ハマグリなどの貝層がブロック状・レンズ状にはさまり、その下に黒褐色土層が続き、この下底に第二の住居址の床面が発見された。さきの住居址を上層住居址、この住居址を下層住居址と仮称するが、この住居址に伴う炉は大形甕の口頸部を切断したもので、その型式は加曾利E I式に該当するものである。なお本型式の土器は黒色土層には発見されず、その下の混貝土層以下に包含された。

第1、第2両地点の遺物は、第5章に於て詳述したので、個々のものについては省略するが、第1地点の土器の包含状態は、表土層中に僅少な加曾利B式のものを出し、貝層中ものは堀之内式、貝層下の土層(暗褐色土層・黒褐色土層)では、上部に堀之内式を含む個所もあったが、全体としては加曾利E II式に該当するものが主体を占め、阿玉台式、加曾利E I式、称名寺式等のものは量的に少なかった。これに対して第2地点に於ては、さきに述べた如く、上層住居址乃至その周辺から、加曾利B式のものが出土し、これをのせる黒色土層中から僅かに堀之内式を認め、それ以下の層序からは加曾利E I式土器が出土するという状況を呈していた。

このことは、本貝塚をつくりあげた住民が、少なくと

も以上の土器編年に相当する各時期に、点々として住居を営み続けたものであって、今日見られるような巨大な遺跡を完成する生活の年輪は、100.を単位とするような^{註4}短いものではなかったことを如実に示すものである。

武田宗久

註1 この種円筒形ビットの中に、粗製大形の深鉢土器(加曾利E II式)が壁面にたてかけられていたのを、筆者は千葉市月之木貝塚一号竪穴の外側で経験したことがある。「千葉市誌」P. 37~39 昭和28年。

註2 本貝塚の東南、蔵立貝塚・さら坊貝塚では、截頂円錐形ビット(加曾利E I式)の中に、人骨が異状埋葬されていた例があったが、これは使用済のビットを墓地に転用したものと考えている。

註3 武田宗久「下総国矢作貝塚発掘報告」考古学9巻8号昭和13年

註4 加曾利北貝塚は馬蹄形貝塚とも環状貝塚とも称される。従来これらの名称は地表面に貝殻が分布している状態によって、漠然とつけられた称呼であるから、市川市姥山貝塚や本貝塚のように、環状になっている場合は、内部の貝層の一部にたとえ二次堆積の場所があると否とに関らず、環状貝塚と称するのがよいと思う。実際問題として発掘によって二次堆積であることが確認された場合はともかくとして、ボーリングなどの表面調査によっては内部の貝層が一次堆積か二次堆積かは確認出来ないし、またボーリング調査には自ら深度に限界があることを知らねばなるまい。

あとがき

工場用地として湮滅の危険にさらされた加曾利貝塚は、その後千葉市がこれを永久に保存して、学術的にも、教育的にも、観光的にも活用する計画をたて、昭和39年度に1億535万円を投じ、加曾利北貝塚とその周辺地合せて約55,057 m² (約16,684坪)を買収し、そこに自然公園と貝塚博物館を設置することとなり、第1地点は昭和40年に再発掘された。そして昭和42年度からここに発見された住居址群をそのまま保存し、公開するための施設を建設するに至った。

末筆ながら本書の公刊にあたり、発掘当時写真撮影に協力された沢本吉則氏、今回石器の鑑定をお願いした埼玉大学教授新井重三氏、土器その他出土品の整理・実測、図の作製・出版関係の繁雑な仕事をひき受けて戴いた加曾利貝塚博物館の各位に対して、深甚な感謝の意を表する次第である。

武田宗久

執筆 者

武 田 宗 久 千葉県立千葉高校

宍 倉 昭 一 郎 千葉市立高校

金 子 浩 昌 早 稲 田 大 学

小 片 保 新潟大学医学部

編 集 者

後 藤 和 民 加曾利貝塚博物館

庄 司 克 ”

市 川 勇 ”

構 成

相 原 秀 次

貝塚博物館調査資料 第一集

加曾利貝塚 I

昭和37年度加曾利北貝塚調査報告書

昭和43年3月30日 初版

昭和50年3月31日 三版

編 者 武 田 宗 久

編 纂 加曾利貝塚博物館

製 作 中央公論美術出版

東京都中央区京橋二ノ一

加曾利貝塚博物館

千葉市桜木町一六三

製 本 協 和 製 本